

書評編集委員会

1992.10.15
第100号

書評

100号記念

寄稿 100号に寄せて

講演録

情報化社会と私達

緊急災害
立入禁止



一〇〇号記念

まず對話から、をめざして

『書評』編集委員会より

寄稿 一〇〇号に寄せて

ある感想……『書評』第九五号にちなんで
 これからも一層の充実を……
 最初の論文と『書評』……
 思いつくままに……
 『書評』一〇〇号刊行を祝して……
 いま、アメリカ文学がおもしろい
 時代とともにあった『書評』……
 賞賛の言葉……
 先生について……
 私と「評論」……
 『書評』ルネッサンス……
 『書評』一〇〇号に思う……
 今日は明日の昔……
 文章で表現することの難しさ……
 ゼミの『書評』誌への着想……
 「女性学」の第二ステージはいまから……
 私と関大生協……
 無限に広がる中国語文の大広場……
 灯台としての貴重な役目……
 内藤湖南研究と『書評』……
 「百尺竿頭進一歩」を……

上林 良一
 植松 健郎
 田中 俊也
 鳥居 克之
 中山 嘉己
 山村 嘉己
 中山 喜代市
 渡辺 幸博
 木村 雄二郎
 寺尾 晃洋
 飯田 紀彦
 足立 利雄
 田宮 武
 中農 晶三
 金田 彌吉
 家谷 正治
 金谷 慧子
 芝田 啓治
 芝田 稔
 多湖 正紀
 西重 信
 梁永 厚

講演録

基調

情報化社会と私達

池野 高理

寄稿

琿春の開放と北朝鮮の自由港

——最近の朝・中両国の経済開放について

西重信 58

連載

おいてけぼり——宮本輝試論 XI

芝田啓治 68

在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート XVI

都立朝鮮人学校の廃校

梁永厚 72

研究余滴 象徴主義 9 第3章 象徴主義運動

II 運動の中の詩人たち 1、ジュール・ラフォルグ

山村嘉己 85

日本中国ことばの来往 ゆきぎ

その45

芝田稔 94

旧漢字・簡体字 カギにせめぐ

短評

『最新日本語読本』 (新潮社)

..... 102

『ゲイ・リポート』 動くゲイとレズビアンの会(OCCUR)編 (飛鳥新社)

..... 104

羅針盤

..... 2

バックナンバー一覧

..... 106

お知らせ ・「書評」編集委員募集

..... 67

・書評賞募集

..... 134

・投稿規定

..... 135

編集後記

..... 136

題字 ■ 網干善教 (文学部教員)

1992.10 羅針盤



“社会が人を育てる”という言葉がある。どこで聞いたのか、いつ聞いたのかは忘れてしまったが、「なるほど」と思った事、“今はそうではないもんな”と続く言葉に、もどかしさを感じた事を覚えていてる。

つまり、「社会の厳しい現実」が、各々と社会、個人と個人の関係を私達に迫っていたのである。しかし、今日では、現実を全く見ることなく、だからこそ様々な関係を迫られることなく、日々を過ごすことができています。

関係を迫られた時、それは「運動」という形で表れざるを得ない。「運動」と言っても、学生運動、労働運動、反戦、部落解放、民族解放、等、その表れ方、取り組みの手段は様々であり、一言で「これが運動だ」と言う事はできない。

強いて言えば、「社会の矛盾と対決し、解決しようとする行動」そのものが「運動」だろう。そして、もちろん、自らが社会を構成している者としての「生き方」を捉え返す作業としても「運動」は意味を持つ。

現在、PKO協力法案をテコとして、自衛隊がカンボジアへ「出兵」している。それに対し、京都の宇治で、兵庫の伊丹で、そして愛知の小牧で、多くの反対運動が闘われている。そこへ結集する人々を結ぶものは「海外派兵反対」の意思である。海外派兵を強行させる、日本

政府——自民党への怒りと、同時にそれを阻止できていない口惜しさが、胸中を去来していることだろう。

たしかに、数多くの反対の声を封殺して、自公民はPKO協力法を成立させた。しかし、大衆の多くも、『国際貢献』という言葉においてPKO協力法を支持していたのである。

私の中で、『国際貢献』が必要でしょ、何で反対するの?』とテレビの街頭インタビューで答える人々と、『南京陥落』のちようちん行列に参加していた人々の顔がダブッて見える。

日本政府に責任があるか、大衆に責任があるか、という話ではなく、私達は、何も知らない事を口実として、日本の、世界の民衆とではなく、権力者と手を結んでしまった歴史を持っているのである。

そして、それは未だ脈々と、私達の生活の中の流れている。学校の歴史の教科書で、『日韓併合』を『中国進出』を、当然の事として書いているものが殆どである。受験へ駆りたてることで、教科書裁判や、歴史の真実を語ろうとする教師には、『受験に関係ない』とソップを向けさせた。そういった事柄に、私達は何をできたろうか。

南京のちようちん行列を、私達は、自分達の問題として受けとめ、批判していくべきだろう。一つ間違えば、

PKO協力ちようちん行列になるのである。

『アジアは貧しいから』紛争は解決しなければならぬから』といった言葉は通用しない。日本が東南アジアに経済侵略を行いつづけるかぎり、貧しさの原因も、紛争の原因も、日本と無関係ではない。

それを根底で支えているのは、『自分さえ良ければ』という利己主義である。

自分が傷付くのをイヤがり、自己保身をする。そして時の権力を容認し、悪事さえも許してしまう。その時、私達は、民衆と手を結ばず、権力と手を結んでいるのである。

今の世の中は、人と人の間に、何種類もの壁が存在し、それが差別や偏見として表れている。一見仲良さそうに見える、どこかで自分と相手の違いを見つけようとする、あるいは、スケープブート(いけにえの羊)をつくり出すことで、共同体意識を持つという、非常に「いびつな」関係しか作ることができない。

世の中を、社会の矛盾を「変える」ということは、自分自身と、そして大衆の意識を変えることに他ならない。今いちど、私達と社会との関係を、そして社会の現実を見つめていこう。

まず対話から、をめざして

「書評」編集委員会

いよいよ今年の夏も終わろうかとする頃、『書評』の草創期に携わっておられたMさんと話をする機会があった。『書評』縮刷版（一九八二年発行）を見入っていた彼は当時を回顧してくれた。

「こんな時はごっぴどく叱られたなあ——感慨深げに彼が開いていたページは第八号掲載、H・マルクーゼ著『エロスの文明』の短評。カットには女性の裸体をイメージした写真が使われている。

——『書評』でエロスとは何事や、いうてえらく言われたもんや——
「ワイセツ云々の「芸術」論議が今でさえ尾を引いているのだから、その時の説教が実によく目に浮かんでくる。「今だったら、逆にセンスが悪いつて言われるな」。世代を隔てたMさんと私達の眼の前には、膨大な時間と活動の束が横たわっている。それが、いわば中年と呼ばれる世代のMさんたちから脈々と受け継がれてきた『書評』活動とは何なのか、をいま一度考え直すきっかけだった。

一九六五年創刊に始まり一九九二年現在に到るまで、その膨大な時間と向かい合ってきた『書評』。ここに学生たちの息づかいの断片を垣間見ることができ。

それでは創刊前夜、出発地点において確認された基本的な姿勢とは何だったのだろうか。

——『書評』を通して何らかの問題提起を鋭く学園内に行くと同時に、種々の問題を話し合う共通の場——を設定すること

——『書評』は現在のトータルな状況への積極的なアプローチを含む

む一つの「思想」の土壌としたい——

同一の場で繰り広げられる対話。自己の存在を確かめる地点。そんな議論の拠点を模索しながら、学生が主体となり『書評』は出発した。

もちろん私達を取り巻く時代背景や生活スタイル、意識といったものはかなりの変遷を見ている。なかでも現在の大学を見渡したとき、ふとした疑問と疑問がぶつかり合う対話、を試みうる場所が次第に忘却されつつあることに気づく。学生たちが個々分散しはじめた。しかし、過去の『書評』を繰りみてみると、試行錯誤を繰り返しながらも、共通の場を作り出そうと必死の姿が見え隠れしている。

第二七号から作られた「読者の声」欄はそうした試行錯誤の「コマ」であろう。読者から、ムスカシイ、もっと自分たちに密接なものを、という声が返ってくる。そこで問い直されたのは、文化大衆運動としての『書評』、つまり『書評』と読者との関係、結びつきを常に軸に据えなくてはならないということだった。書評なり問題提起を受け止め、様々な反応を返す人がいてはじめて『書評』は成立しうる。

現在の『書評』が今なおこれらの原点を貫き得ているとはけっして言えないが、いま私達が持っている渾身の力でもって、さらに幅広く奥の深いものを目指している

ことには変わりない。

例えば、四月の新入生歓迎期に向けた「読書案内」では、今まさに大学という未知の場所に足を踏み入れた新入生が、書物を通して現実生きるこの社会を私達とともに見据えていく序走になれば、との思いがある。自分の学部が先生がいったいどんな本を薦めているのかも興味のあるところだろう。また、「国際化」「教育学園問題」「差別」といったテーマは幾多の壁にブチあたりつつも継続した検証を行ってきており、今後も書評や講演などあらゆる形態を取りながら、より身近な問題として向かい合っていきたい。

以上をふまえて、『書評』が現在の研究発表機関誌の域を越えるのはやはり学生の主体的な発言しかないと考えられる。私達編集子が幾つもの刺激剤をこしらえつつ、ある一つのベクトルの束がそこに向かおうとするなら、私達独自の「文化」と呼びうるものが認められると信じる。一〇〇号という節目をこれまでの道のりを振り返りながら、併せて新たな議論の発火点にしたく、まずは現在の私達をじっくり見つめてみたいとの思いがあった。

最後に、今回の「一〇〇号に寄せて」にあたり、本学の先生ならびに執筆者の方々に「寄稿を依頼させていただきました。無礼が多々あったことをお詫び致します。



寄稿

100号に寄せて

ある感想……『書評』第九五号にちなんで

上 林 良

法学部教員・政治過程論専攻

「泳ぎを習うものは、思い切つて先づ水に飛びこめ」。実際こんな乱暴な教えがあるのかどうか、知らない。けれども、「畳の上の水練」という言葉があるくらいだから、その反対もあるのだろう。抽象的なマニユアルに頼るよりも、どちらかと言えば、経験や試行錯誤のつみ重ねがずっと役に立つだろう。人生百般、学問、研究もおなじように考える先入見が、私の頭のなかにこびりついているようである。一九九一年四月、『書評』第九五号にふと興味をもった。新生生のために読書案内が企画され

ていた。懇切な読書指導があつて、本を読むことの「素晴らしさ」や「おもしろさ」が語られ、推薦図書をおげられるのに出会つて、学生諸君ばかりでなく、私自身にも有益であつた。「愛読書」を思わず人に語つたりする度に、果して自信があるのかと不安な気持ちにおそわれる私には、この読物は、勇気をあたえてくれるエッセー集でもあつた。

同時に、この号、第九五号を保存しているのは、名誉教授芝田稔先生の「日本・中国ことばの来往（その四〇）」を見つけたからであつた。



私は、芝田先生が専任教員でおられた頃、帰途をとにもする機会も多く、中国語のこと、中国の政治家のこと、日中関係等について、さほどでもない用事にかこつけて、先生をわづらわし、いろいろお教をいただいた。第九五号を大切にしているのも、先生の随想を話題にして、いつかまたお話を承りたいものだという底意からであった。

さて、この号の「日本・中国言葉の来往」では、中国西安の近く、武后則天が建立した「無字碑」につい

ての紀行文が寄せられている。もともと唐の高宗の皇后でありながら、王位についた則天武后は、権力をほしいままにした典型的な女傑則天であった。武氏に反抗した唐の宗室や貴族を殺戮したおそるべき略奪者だった。これが半世紀も前に教えられた「東洋史」の知識である。高宗のために五千字にのぼる長文の「述聖碑」を建てて徳をたたえた則天が、自分のためには、「無字碑」、一字も彫らせない碑を建てたことは、まったく知らなかった。則天が「己の功

罪は後人の評に留めよ」と論したことを引いて、「沈黙は雄弁にまさることを心得ていた女傑であったに違いない」と、芝田先生が結論しておられる。

これは佛教をふかく信仰していた則天武后の菩提心からであろうか、権力者の人格、人間性の多様な面のぞかせる事実なのだろうか、とかく物思いにさせる「無字碑」であった。

これからも一層の充実を

植松 健郎

文学部教員

二〇数年前に『書評』原稿を頼まれた当時、『書評』も今日見られるような立派な冊子ではなく、タブロイド判で一枚ものであったような記憶がある。それに、頼まれた方も、生協活動との関連性も深くは知らず、文字通りなにか適当な本の書評を書けばいいのだろうという位にしかり解していなかった。一九六〇年代のことである。つまり文化革命を実感していない頃のことであった。だから今思い返せば汗顔ものである。当時どれほどの期間で『書評』が刊行されていたか覚えはないが、印象が

薄い。今日みるような冊子の体裁をとるようになってからは、『書評』の存在も大きくなった。それは、今の書評は内容も充実し、学術論文を掲載するようになってきたからであろう。特に長期にわたる連載ものが、学術論文でありながら読みやすく、楽しく読ませてくれたからである。

中国文学の竹内教授の学術論文が、書評に連載された最初の論文だったように思うが、これが契機になって、その後も中国文学の芝田教授の楽しい中国語、漢字に関する長編論文、

フランス文学の山村教授のランボロ論、ドイツ文学では池田浩士非常勤講師の浪漫派文学論等、錚々たる論者の大論文が次々連載されてきた。

この書評が一〇〇号を迎えたという。生協組織部『書評』編集委員会が、長年にわたって多くの先生方の協力を得て、レベルの高い冊子を出し続けてきたことは容易なことではなかったであろう。この実績は全国の大學生協活動のなかでも希有なことではないか。全国に誇っていいと思う。先生方の論文だけではなく、学生、院生の論文もしつかりしたもので、学生の論文という域を越えている堂々たる、説得力のある論文がよく見られるのも楽しみなことである。これからも『書評』が一層の充実を目指して二〇〇号への第一歩を歩み出されることを願うものである。

最初の論文と『書評』

田中俊也

文学部教員・心理学専攻

『書評』誌が一〇〇号を迎えるそうである。私と本誌の関わりについて何か、というご依頼があつたので、思い付くままに書いてみよう。

私は、感情の曖昧さと論理の厳密さを共存させる人間の「こころ」というものに関心を持ち、一九七二年に本学文学部に入学した。そのころはまだ「戦中」に近い「戦後」で、学内を多くの「戦士」が集団を成して闊歩していた。一般教養の授業の始めは毎時間近く十数分アジ演説にとられ、多くの大学で「内ゲバ」な事象が発生していた。

いつの時代も「時代精神」というものが存在する。意図的に迎合するのではないが後から振り返ってみるとその時最も居心地のよかつた態度・行動をとつていたな、というものである。その意味では当時は明確な時代精神が崩壊して知的無政府状態になりかけていたとも言える。日常性に没入する者、知的好奇心を充足させる者、趣味に走る者、ラブ・アフエアにのめり込む者等、様々な生きざまがみられた。

そのような時、確か一九七三年だつたと思うが青土社から「現代思想」

という雑誌が創刊された。また、ちょうどそのころ、私自身は心理学のテキスト等に書かれてある心理学的「事実」の記述に何か落ち着きのない違和感を覚え、その感覚はいつたい何だろうと苦しい思いをしていた。幸い心理学教室で良き師にめぐりあい、どうもこれは学問の方法論上の問題ではないか、と考えるに至つた。人間が人間について人間のための知識を得、構成するという行為はどうもそう単純なことではないのでは、と気づいてきた。

「現代思想」でも、心理学関連の特集が何度かあつたが、その中の各論よりも、他の特集号の論文により興奮を覚え、翻訳ではあるが原著にあたって明け方まで頭の中を興奮させていたようである。そうしてやがて「世界がみえてくる」という貴重な体験を持つに至つた。たかだか二十一、二歳である。目にした情報も

図書館（当時確か八十万冊とか言われていた）の所蔵する潜在的情報のほんの一粒である。それでも「あー、そうか」という納得を持てたのは幸いであった。

その時のほとばしるような情熱と勢いが一段落したあと、ふと自分のこれからを考えてみると、問題点の指摘・納得だけでは無責任な徒にすぎない、と思うようになった。しかしそれでも、自分のたどり着いた境地を他の人と共有したい、という気持ちがある。『書評』編集委員会のある部屋に向かわせた。修士課程一年目の春である。「現代心理学の苦悩——近代科学・実証主義批判の視座——」というひどく大上段に構えたタイトルの論文を初めて投稿し四十五号に十四ページを割いていただくとこととなった（現在のより一回り大きいB五版であった）。公開された最初の論文の投稿先が奇しくも本誌

であったのだ。その次の年、一九七七年の四十六号にも二冊の新刊の書評として「科学的知の構造」という小論を投稿した。

博士課程は他大学に移ることになったが、その際の願書の「業績」欄に、学会発表論文に加えて上の二論文のタイトルも書き込んでしまった。最終面接の段である面接官から「この『書評』というのはどういう雑誌ですか」と素性を聞かれた。それはどう答えたかは、ここにこうして一〇〇号記念のお祝いを述べることでできることで推量いただきたい。イデオロギーの時代は終わった。今後とも本『書評』誌が従前どおりイデオロギー・フリーな、学内の文化活動の中心的存在として発展していくことを心から願うものである。



かつて東西対立の中で西側によって構築された「竹のカーテン」によって、中国留学はもちろんのこと中国旅行すらままならぬ時期には、中国事情に関する情報は今では想像もできないぐらい過少であった。その頃、私は中国経済を専攻していたが、その時の恩師はもつと中国語を勉強せよと申され、その指示に従って修士入学して中国語文法を専攻し、そのヌカルミに足を取られて経済畑には戻れないまま現在に至った。またその後さらに恩師の一人であるY教授は語学の教師は語学以外にその国

思いつくままに

鳥井克之

中国文学科教員

の歴史や文化にも通暁すべきであると言われた。

専門分野の仕事以外に、中国の社会科学書の翻訳とその解題を通じて、現代中国事情について紹介する文章をものにしたので、それを『書評』に掲載してもらうことにした。それが本誌四一号の「認真看書学習 中国の学習運動」である。さらに二年間の留学経験、特に大学での生活体験を「中国で生活して 中国の大学生活と北京大学」にまとめて五三号から六三号まで連載したのである。その後は中国における経済改革と対

外開放政策の実施により、現代中国事情は日本の新聞雑誌に過多と思えるぐらい流れ出したので、私はその後はその中の個別的な限定されたものしか書かず、本誌とはいささか疎遠になって現在に至った次第である。『書評』が百号を迎えるに際して思うことは、お決まり文句ではあるが、まずは御同慶の至りであると申し上げたい。しかし今後の『書評』の発展を願う次の事などを要望したい。一つは長期連載の枠は今後も堅持していただきたい。本学図書館に収蔵されている増田文庫の主であった増田涉教授の「日中文化関係の一面」は二八回（急逝のため絶筆）連載された後、岩波書店から単行本『書雑誌談』となって出版されている。これ以外に私の知る限りでも二三冊ある。もう一つは『書評』の原稿を集める組織部の人は読者の代表として執筆者と質疑討論する姿勢をいつ

までも持ち続けていたいただきたいものである。

さらにもう一つは冒頭の論説、トピック特集、連載物の「硬派」以外に、生協食堂の「グルメ情報」、書籍部の「今期の分野別ベストセラー書一覽」、不用家具・文房具・書籍の交換・無償譲渡・ガレージセイルの「リサイクル案内」と生協の財政報告等の生協組合員の生活に密着した欄を増設しては如何なものだろうか。「生協新聞」掲載の記事を要約して本誌に転載しておけば、数年後には学生生活を反映した貴重な史料となるからである。

『書評』一〇〇号刊行を祝して

山村嘉己

フランス文学科教員

いまわたしの眼の前に厚さ数センチに及ぶA4版のほう大な書物が置かれている。奇しくもわたしが生協理事長をしていた一九八二年、生協創立二〇周年を記念して出版された『書評』第一号↓第五九号縮刷版である。その表紙の『書評』という文字は七二年の四月、十八号に寄せられた史学科網干善教授の直筆であり、それはこの百号の表紙も飾っていることと思う。

しかし、この縮刷版を見ると、まさに『書評』の歴史が生きてそこにあるように感じられ、つきせぬ興趣

が湧いてくる。第一号から九号まではタブロイド版の表裏二ページのものであった。十号から飛躍的に拡大され二十数ページに及ぶ雑誌の形態をとることとなった。三十号ぐらいいからは数十ページから百ページに及ぶこともあった。その時から今回の百号まで、すでに四十冊に及ぶ歴史がさらに積み重ねられているわけだ。

執筆者も教員から学生、卒業生に及ぶ何百人という人々が名を連ねている。かくいうわたしも二十六号(七三・四)に初めて名を連ねているが、その後、三十九号(七五・二)の「ラ



ンポー研究余滴 1」以来、現在に
到るまではほとんど休みなく、フラ
ンス象徴派の研究余滴を連載しつづ
けている。なかでもそこからまとめ
た『遊歩道のボードレール』（京都
玄文社）『土星びとの歌ーP・ヴェ
ルレーヌ評伝』（関大出版局）の二
冊の本を上梓することができた。心
から感謝しているところであり、今
後もこのような機会をずっと与え統
けてほしいと願っている。わたしが
連載をはじめた頃、すでに十数回も
続けておられた中国文学科の故増田

教授が「続けることこそ力ですよ」といわれたことばがわたしの耳のな
かにはまだ力づよく響いている。
百号にも及ぶ本が、生協という実
生活を掌る組織から三十年近くにわ
たつて刊行されてきたという事実は、
まさに関大生協の快心事であり、組
織部を中心とする生協文化運動の確
実な歩みの証拠である。『書評』と
いう仕事が元来地味な作業でありな
がら、あらゆる創作、研究にとって
欠かすことのできない基本的作業で
あることはいうまでもない。われわ

れはこの『書評』を通してそのこと
を確認しながら、さらに一歩も二歩
も進んだ研究を生み出すことができ
たように思う。いずれ百号までの第
二縮刷版が出ればそのことは十分確
かめられよう。そして、さらに二十
数年もすぎれば、また、二百号の記
念号が間違いなく関大文化の遠大な
発展を示して刊行されることだろう。
その時、わたしの生命はすでに終息
していることはたしかだが、どれほ
どのわたしの生命の種が『書評』の
なかにまかれてあるだろうか。

いま、アメリカ文学がおもしろい

中山 喜代市

文学部教員・専攻アメリカ文学

『書評』一〇〇号記念号発刊おめでとう！

ますます発展をつづけ、良書を紹介しつづけてください。

いま、アメリカ文学がおもしろい。多様な国、アメリカでは、文学も多様性に富む。中国系、日系作家の活躍も盛んである。

夏休みに、ネイティヴ・アメリカン小説を読んだ。著者はカリフォルニア大学サンタクルーズ校教授で、文学や創作を教えているルイス・オウエンズ。書名は、*Wolfsong* (Albuquerque: West End Press, 1991) といふ。

主人公トム・ジョウゼフは（著者と同じく）、インディアンとアイリッシュの混血で、カリフォルニア大学の学生であるが、叔父の葬儀のため、故郷のワシントン州北部、カスケード山脈中の森林地帯に帰り、白人の進める鉱山開発問題に巻きこまれる。彼は、叔父と同様に、祖先が住み、生きてきた原始の世界を守るため、結局、工事現場を爆破し、不本意な殺人を犯し、日本の北アルプスのような険しい山並みと氷河を越えて、カナダへの逃亡をはかる。最終場面で氷壁をナイフ一つで登って

いくとときに耳にする「ウルフソング」はじつに印象的である。

作家のメッセージは「土地権」にある。環境権のようなあまつちよろいものではない。いまアメリカでは、市民権とともに土地権も最重要問題なのである。インディアンにとっては、もともとアメリカ大陸はすべて自分たちのものであったのだから、この小説はアメリカ合衆国の歴史の見直しであり、「ウルフソング」に時代の警鐘以上の深遠な意味がこめられていることには間違いない。

いま、世界の各地で荒野が急速に、しかも確実に後退しつづけている。悲観的にならざるをえない。人口が日本の二倍弱のアメリカでさえ、この小説において描かれている状況がある。あと十年先に日本はどうなっているであろうか。

時代とともにあった『書評』

渡辺 幸博

文学部哲学科教員

生協の『書評』が一〇〇号になるという。心よりお祝い申しあげるとともに、歴代の書評委員諸氏に敬意を表したいと思う。いま一号から九号までの『書評』誌を通覧することとができれば、結構面白い評論になるのではないかと思うが、ここでは私の寄稿した号に限って、若干考察してみよう。

私が初めて寄稿したのは七一年十月（一七号）、「人間主義の徹底的否定」と題したアルチュセールの『甦るマルクス』の書評であった。六九年の五月革命から二年、全共闘運動

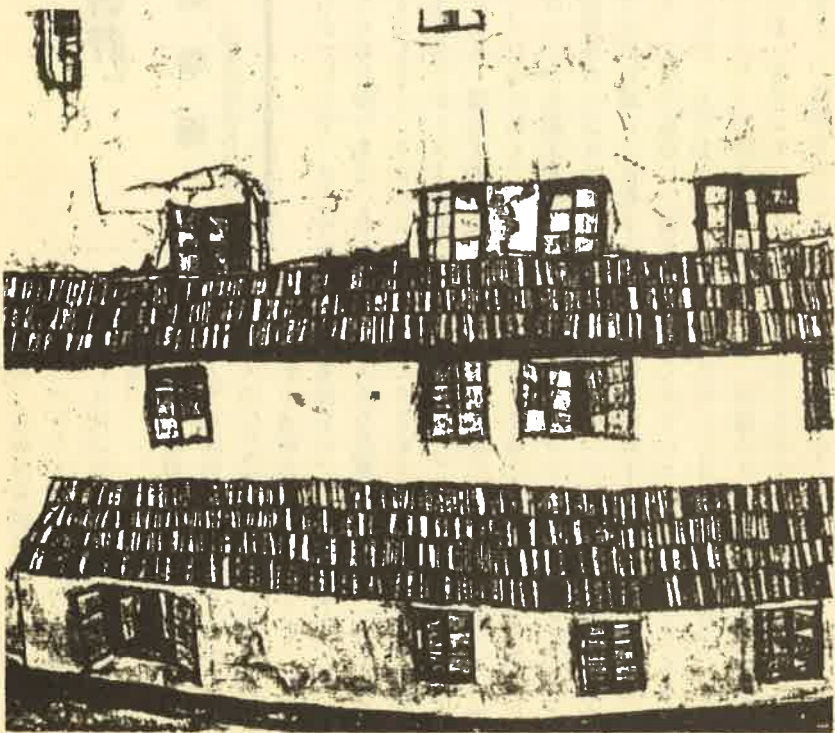
の挫折にもかかわらず、まだその熱気のさめやらぬ時期である。あらためていうまでもなく、アルチュセールは構造主義的マルクス主義者といわれた人である。構造主義は五〇年代のフランスに発したものであるが、その特徴の一つが人間主義の否定にあったのは周知のとおりである。しかし一方では旧知識人と自称するサルトルなど、主体の自由に立脚する立場の人たちが、まだまだ大きな影響力をもっていた。七四年十月の三八号に、いま一度アルチュセールの『政治と歴史』の書評をたのまれた

のも、当時の意識的若者たちの関心が、マルクス主義とあわせて構造主義にも向けられていたことを推測させる。

次に、渡辺一民の『近代日本の知識人』の書評をたのまれたが（「知識人の（日本的晦冥）」七七年四六号）、これも当時の私たちにとって、主体的実践をめぐるの知識人の在り方が大きな問題であったことを反映していると考えられる。五二号（八〇年六月）にはサルトルを追悼して「サルトルと現代」を書いたが、その頃を境に問題は主体的在り方を離れる。すでにフランスでは六〇年代に育まれていた、いわゆるポスト構造主義の精神的風土が、わが国にも受け入れられていったということであろう。そのことは八〇年代に寄稿した書評、評論のテーマからだけでも伺い知ることができる。ちなみに、それらを列挙すると次のようになる。

「近代知に呪われた学問」(八一年六月、五六号)、叢書「文化の現在」(岩波)のうちの「歎ばしき学問」についての書評。「現代社会の構造的(ひずみ)の告発」(八二年六月、六一号)、ボードリヤールの『消費社会の神話と構造』の書評。「マルクスのマルクス主義」(八四年一月、六八号)。「浅田クンを越えて」(八五年四月、七三号)。そして「六・四天安門事件と五四運動」(八九年九月、八九号)である。

このように私のものに限って概観しただけでも、『書評』誌が時代とともにあったことが分かる。七〇年代当初のものは誤植も多く、体裁も粗末であったが、年を追って立派になってきた。今後より一層の充実を期待してやまない。



「書評」誌が関大生協唯一の定期刊行誌であり、しかもその刊行が主として学生組合員からなる組織部の手によって行なわれてきたことを考えれば尚更です。

そこで、当然理事長としては「書

賞賛の言葉

木村雄二郎

関大生協理事長・経済学部教員

「書評」誌が一〇〇号を刊行すると聞いて実のところ驚きました。

生来、何事にも興味をもつくせにその興味を永続させることにはあまり興味のない私にとって、一〇〇号続けたということだけで、それをなした人々に賞賛の言葉をおくりその労をねぎらいたいと思います。「書

評」誌を一号から検討したうえで、あるいはざっと目を通したうえで講評ぐらいすべきなのでしょうが、現在の私には荷が重すぎます。しかし思い起こすだけでも、そこには多くの先生方の寄稿が、書評だけでなく多くの優れた論文（学術・時事）や随筆や紀行文などがありました。な

かには長期連載され、のちに単行本として刊行された論文や、また急死された先生の絶筆となった論文が掲載されたこともありました。あるいは時事その他の問題に関連して、論文ではうかがい知ることのできなかつた筆者の見方なり思想が、「書評」誌を通して垣間見ることもできました。

袴を着けず開放的でありながら、同時に雑誌としての水準を維持してきたこれまでの一〇〇号、今後とも関大生協の文化活動の看板的役割を果たしてくださるよう期待しております。



先生について

寺尾 晃 洋

商学部教員

友人の話を聞くと、弟子の論文を
実にこまかく添削する先生がいるそ
うである。わたしは一応読んで簡単
なコメントはするけれども、とても
そんな丁寧なことをする気になれな
い。それと言うのもわたしにとつて
はそれが当り前だったからである。
わたしは最初宗教学を勉強しようと
思つて、鈴木大拙先生のゼミに入つ
た。大学のゼミでは、学生は一学年
一人ないし二人で、ウイリアム・ゼ
ームズを読んでいたはずであるが、
自分が当つた記憶さえない。ただ一
九四二年一〇月から、学徒出陣で兵

隊に行つた四三年一二月までの約一
年間、毎週一回夕方から先生のお宅
でもたれた自宅ゼミナールのことは
全く鮮明に覚えている。助教授以下
研究室のスタッフとわれわれ学生三、
四名、それに禅宗の坊さん、よその
大学の先生などあまり広くもない応
接間に入れる程度の人びとが来てい
て、わたしにはちんぷんかんぷんの
話で盛り上つていた。途中ティ・ブ
レイクがあつて、到来物をダイニン
グ・ルームで頂く習慣であつた。こ
のように小人数だったのに、わたし
は先生から個人的にあれこれ指導さ

れた記憶はない。ひたすら先生の
一言一句をノートして反すうした。

「科学技術についてはいくら専門
家になつてもいいが、諸君は宗教学
の専門家になつてはいけない。宗教
がちがえば、ドグマはいろいろある
しかし宗教経験はみな一つである。

宗教は人間のこのファンダメンタ
ル・イクスピリアンスを取り扱う
のだから、広く入つていつて人間を
全体構造からつかまえるようにしな
ければならない。」これが先生の教
育的配慮のいわばすべてであつたよ
うに思う。学生は執筆で多忙な先生
をディスタンプしないよう、自分で
模索するよりしかたがなかつた。戦
争から帰つてからわたしはケルケゴ
ールの『死に至る病』を精読し、分
厚い卒論を書いた。先生から与えら
れた自由放任をいいことに、わたし
はここでは先生をいささかのみ出る
ことになつた。

ひとまず卒業したものの現実には何をやっていいかわからず、ひどい荒廃とインフレのためぐずぐずしているうちに、これからは経済の世の中だ、ともかく経済学を勉強してみようという気持ちになった。いまから考えると、この辺にさきに書いた鈴木先生の教育的配慮が生きていたのかもしれない。こうして入った二度目の大学のゼミと大学院の先生が豊崎稔先生であった。この先生も当時超多忙だったこともあって、弟子に対しては自由放任主義だった。聞けば適切な答えは返ってくるが、質問が出るまでになるのはなかなかであった。学部ゼミで先生は開口一番「諸君は資本論を読んだか?」と問い掛けられた。そんな時代であったが、わたしはがく然として出はじめた長谷部訳を目を皿にして読んだ。何もそれ以上は言われなかったが、いい教育をうけたと思っている。

私と「評論」

飯田紀彦

社会学部教員

高校一年生になって間もなくの頃、伊丹万吉の「映画評論」とロバートシューマンの「音楽評論」を読んで感銘を受けた。どうやら単なる印象批評ではない、創造的な評論があるらしいことが分った。それまでは作曲家になりたくて、音楽理論やピアノの勉強をしていたが、才能の無さに気づき始めていた頃だったので、作曲科はやめにして、音楽学か美学でも修めて、評論家にでもなろうかと思いい立ち、アリストテレスやプラトンやヘーゲルまで読んだ。もちろん、私に哲学が分る筈は無く、ちん

ぶんかんぶんだった。高校時代は音楽の勉強以外に、生物部で腐りかけのイカから発光細菌を採って培養したり、演劇部では舞台監督とおだてられて、汚ない舞台裏でトンカチを握ったり、コーラスやオーケストラの助っ人をしたりでも忙しかった。パツハの今日的意味とかクラシックとジャズについてとか、いくつが評論もどきの文章を書いて雑誌社へ送ったりもしたがなしのつぶてだった。

大学は飯の種を確保しておこうというさもし根性で結局医大という

職業訓練学校へ入ったが、評論の勉強は続けていた。

昭和四二年にバイロイトへ行った。本場のヴァグナーを聴けて嬉しかったが、其処で見知らぬドイツ語圏の外人から、日本人にヴァグナーが理解できる訳が無いと言われたのと、遠山一行から、評論とはむなしい作業だと聞かされて、評論への熱意が急速に萎えていった。

十年位前、素人の集いで、ペートーベンのピアノソナタ「熱情」と、友人とチェロソナタ三番をデュエットする機会があった。指が錆びついて動かないので、何度も何度もさらった（お蔭で、今だに指の末梢循環障碍が続いている）。自分では仲々の出来栄えだったと信じているが、其の時、私はペートーベンのころを感じた。ペートーベンと対話できたように思った。そして、このペートーベンとの対話を言語的に伝える

こと、それが評論だと知った。小説や詩、絵画、彫刻や音楽といった表現を通して、私たちは作者のころを窺い知ることができる。

私と『書評』誌との関わりは、一度、依頼されて書評めいた文章を書いただけである。後で読み返してみると、私の書評は、一方通行の独りごちで、著者のころをうまく伝えられずに終ってしまっている。

創造的な評論は、作者と評論家の互いの人生観や世界観の相克であり、

統合であり、両者の対話を評論の読者に伝え、読者のころを揺り動かすことが要請されている。

『書評』誌を時々拾い読みすると、随分と意気込んではいいるが、とどのつまり独りごちの評論に出くわすところがある。大変な才能の無駄使いであり、とても惜しい。『書評』誌が、こうした評論を語る若者と、評論を読む若者とが対話する「場」であればと願っている。



『書評』ルネッサンス

足立利雄

元社会学部教員・新聞ジャーナリズム学

退職してから二年半、最近の『書

評』誌にはお目にかかっている。

そこへ一〇〇号記念に何か書けとい

う手紙が九月八日にとどいた。とこ

ろが、九月十日必着とある。

ことわろうかと思つたが、六十二

円と二百十円の切手をはって速達と

朱書した大型の返信用封筒と原稿用

紙が同封してある。おことわり、と

書くだけではもつたない。

考えてみれば、三、四回は寄稿し

たこともあるし、生協の理事もやつ

たし、新入生歓迎セミナーにも何回

か参加したこともある。因縁浅から

ず。

私の知る限り、『書評』は学生一

般にとつては難しく、とつつきに

くくて、つまりは面白くない印刷物

のようである。ややアカデミックで

思想性があるというのは、大学生協

の出版物として当然だろう。が、だ

から読まれない、のではせっかくの

努力や費用がムダになる。

学生の知的な関心や好奇心をいか

にしてそそるか、は私だけでなくお

よその教員たちが四苦八苦している

問題である。おそらく書評編集委員

会の人たちもそうだろう。

ただし、委員会は学生の側からそ
れを考えるわけだから、簡単に言え
ば、自分たちが、若い人が、学生一
般がどんな欲求をもっているか、そ
れをとりあげればいいのである。恋
愛、セックス、宗教、易占、音楽、
映画―特集のテーマはいくらでも
ある。テレビや週刊誌のマネをしな
さい、とか、トレンドイに、とい
うのではない。現代の大学生らしい自
由な発想を、というのである。

一〇〇号を機として、『書評』ル
ネッサンスを。

『書評』一〇〇〇号に思う

田宮 武

社会学部教員

どうしたところか、このところ、とんと縁が薄くなった『書評』だが、いつときはずいぶんとお世話になった。「ありがとう」と本当にお礼を言いたい気分である。

手持ちのメモを見ると、『書評』に掲載された私の最初の文章は「テレビ報道と視聴者の現実認識」（一九七四年）だった。その後しばらく間をおいて「名作童話『ピノキオ』の差別表現をめぐって」という障害者差別表現の問題を取り上げた。そのころから、私の関心は部落問題に広がったせいで、「差別落書問題を

めぐって」(1)(2)(3)まとめと四回にわたって連載した。

ずいぶん紙面をとって掲載していただいたのは、「聞き書き 部落に生きる人たち」だった。第一回は一九八三年だったが、最後の十五回が終わったのが一九八八年一月だから、長い連載だった。その聞き書きはまとめなおして「被差別部落の生活と闘い」（明石書店）という書名で発行された。しかし、どうしたことが、あまり売れなかったという話だ。

現在、またこりもせず『マスコミと差別問題の常識』を明石書店から

出版してもらおうと編集作業中だ。この本には、先の「ピノキオ」の差別表現、差別落書問題を整理して収録する予定である。こんどこそ少しでも話題に取りあげられ、売れるといいのに願っている。

私にとって『書評』は手抜きができるという意味では決してないが、そう肩に力を入れずに書ける「演習」の場であったと思う。書いてみておもしろいなと自身で納得したら、単行本にまとめなおすという形でリサイクルできるわけだし、駄目な原稿を書いても、大勢の人の目にふれるわけではないので、気楽な点もあって、そこが良かったと思う。

これからの『書評』の編集にかかわることだが、私の要望は次のとおり。

①学生の生の声、生活実態、日常感覚、意識を明らかにしてほしい。「おじいさん」といわれる年齢に近

筆者として、わたしがはじめて『書評』に寄稿したのはいまから二〇年近く前の一九七四年で、「ビートルズと対抗文化」だった。当時はまだビートルズに関しては日本は後進国

で、いまは亡き畏友のユダヤ系アメリカ人の詩人が一九五〇年代に、世界の若者に向かって鋭い矢を放つグループサウンズが存在を教えてくれた。そのエッセーの中でわたしはこ

いせいか、近ごろ、どうも学生の日常意識がどうなっているのか分かりにくい。

②この学部でも卒業論文、ゼミ論文が書かれているのだから、担当教員からユニークな研究を推薦してもらって、そのレジュメでも紹介してくれると、互いに刺激になるのではないか。

③教員の書いた評論は多いが、教員の一人ひとりがある研究をやっているのか、具体的に自己紹介するような試みがあると、これまた刺激になっておもしろいのではないか。要するに、現在の『書評』は知的刺激という面でもしるさに欠けるから、もっと刺激を、もっとおもしろさを、というのが私の要望である。

今日は明日の昔

中 農 晶 三

社会学部教員



う書いている。

……戦争に対する人間の良心の問題を考えると、ほくはジョン・バエズのことを思いだす。徴兵制度と闘うために、女性はなにをすべきかと問われたとき、彼女はこう答えている。「女性はノーという男性に対してイエスというようにすべきです」。そして結局彼女は、徴兵カードを焼きすてて監獄入りした青年と結婚したのである……。

当時はわたしもまだ若かったと思うが、いまもその考え方に変わりはない。

読者としてのわたしは、文学部山村嘉己先生のボードレール、ランボオ、ヴェルレーヌ論を愛読してきた。若いころからヴェルレーヌの「巷に雨の降るごとく 我が心にも涙ふる……」や「秋の日の ヴイオロンのため息の 身にしみて ひたぶるにうらがなし……」の上田敏訳を愛誦

してきたわたしは、小粋きなフランスの小唄作詞家ぐらいに考えていたけれど、山村先生から「死」を出発点にして逆に「生」をたどった詩人と教えられた。

最後にわたしが最近愛誦している室町時代の小唄を挙げて、一〇〇号以降の参考にしてほしい。ご承知のように室町時代はたいへんな戦国乱世で、応仁の乱では東軍・西軍のたび重なる放火によって、上京は一〇〇町あまり、寺社、民家など三万軒あまりが燃えつきってしまった。さら

に花の都に火が放たれ、下京、西京の町々、鴨川の東側の寺社も焼け落ちてしまった。それでも当時の町衆は驚くほどのおおらかさで、焼かれても焼かれても生活を再建し、つぎのような小唄を歌っていました。

ただ人は情なまけあれ

夢の夢の夢の

昨日は今日の古いにしへ

今日は明日の昔

過去を振り返らず、明日に向かって走って下さい。



文章で表現することの難しさ

金田 彌吉

工学部電気工学科教員

簡単に一〇〇号と言っても、実際の業務にたずさわっておられる人達には、かなりの時間と労力を要求されていることと思う。各号を発行するに当たっては、その企画から原稿依頼、編集、印刷、発行にいたるまでの過程では、種々苦勞も多いことだろう。ともあれ、今般一〇〇号の発行に漕ぎつけられたご尽力に敬意を表する。

さて、原稿依頼を受けて初めて考えることは、何をどのように書こうか、と云うことである。感じたことや考えていることを率直に書けばよ

いとわかっていても、実際に書く段になると、そう簡単にはいかない。

特に、我われのような理科系の専門分野では、数式を多用して内容を定量化し具体化しているので、文章そのものは式の内容説明や実験結果との対比などに終始している場合が多い。したがって、表現法や使用する単語はほぼ決まってくる。

しかし、これらとて簡単に見えて実はそうではない。私は学生時代に「理科系だからと言って数式になれるだけでは不十分である。もつと文章を書くことを考えよ」と言われた

ことがある。実際、式のもつ意味を文章で的確に表現することは、言うべくして実に難しい。執筆者にとつては当然理解し、熟知している内容であつても、初めて読む読者にとつては未知の内容を知らされる訳であるから、表現の仕方によつては執筆者の全く意図しない内容に解釈されている場合がある。しかも、文章は冗長でなく簡潔でなければならぬ。簡潔にして要を得た完全な文章はかなり作文に精通した人でないと、まづ無理と言えらるだろう。

私はかつて、ある学会論文の査読委員から「一般に」という言葉の意味のもつ範囲を明確にするよう要求されたことがある。この言葉は普通世間でよく使われている言葉であるから、つい気軽に使つてしまふが、よく考えてみると、「一般に」という言葉ほど非定量的であいまいな表現はないと言える。「一般に」とい

う言葉の裏には、一般ではない特殊な場合もあることをも含んでいるとすれば、執筆者の言う「一般に」はどの範囲かということになる。言われてみれば、なる程と言わざるを得ないが、なかなか完璧な文章を書くのは難しい。

ところで、この原稿を執筆するに当って、過去の『書評』を何冊か見

せて貰ったが、いずれの『書評』にも必ず投稿されている何人かの先生がおられる。なかには四〇数回近くにわたって連載されている先生もおられる。先生の几帳面さや博学ぶりにはほとほと感心させられる。先生に比べれば私など、博学ではなく薄学（浅学）と書く方が当を得ている。

ゼミの『書評』誌への着想

家 正 治

神戸市外国語大学教員

貴『書評』誌が一〇〇号を迎えられたことを心から慶賀し、御祝詞を申し上げます。一〇〇という数字は連続する番号の一つの数字かも知れませんが、竹が節目を経ながら成長

するようには、一〇〇号を一つの跳躍台としてさらに発展されますことを、願っています。

ところで、東京大学の富士川義之教授によりますと（『図書』一九九

二年九月）、イギリスは書評の本場と言われ、歴史的にも同国がいちばん古いとのことで、書評という形式が確立され、社会的に重視されるようになるのは、一八〇二年に創刊された『エディンバラ・レビュー』誌をもつて始まるとされています。また、ただ古い歴史をもつだけでなく、一九世紀以来、書評が文芸ジャーナリズムの中樞を占めてきただけに、書評が果たしてきた役割は極めて大きいと言われています。

書評と言えば、第一義的には、書物の内容を紹介しながら批評することとなるでしょう。私も、ときには特定の書物について原稿の依頼を受けることもあります。しかし、書物の内容について紹介することも大変ですが、批評することは本当に難しいことだとつくづく思っています。はたして的確な批評になっているのかという懸念から見出しには「紹介」



としたはずなのですが、活字になった段階で「書評」となっていて忸怩たる思いをすることがしきりです。

私のゼミでは、夏休みに入ると合宿を行うことにしています。その行事の一つに毎年一冊の書物を取り上げて合評会を持つことにしているのですが、本年（一九九二年）は、コロンブスのアメリカ大陸到達五〇〇年ということもあり、ラス・カサス著『インディアスの破壊についての簡潔な報告』をとり上げました。参

加者全員が、同書について感想や意見など発言することになっていますが、今までとは異なる視点―抑圧された側の視点からの点検、西欧的価値感の負の部分の認識、五〇〇周年を先住民の声に耳を傾ける機会にすることの必要性など、重要な問題の指摘もなされました。また、今年は、豊臣秀吉の朝鮮侵略・文禄の役四〇〇周年でもあるが、マス・コミなどでもあまりとり上げられていない、との発言もなされました。参加者の

各々は、これらの発言から、貴重なものを得たことと思いますが、各自の意見が文章化されれば、より大きな意義を持つことと思います。そこで、ゼミの書評誌を毎年一冊手作りで作ってみてはということをやゼミの諸君に提案しようと考えています。一〇〇号にふさわしい講評をといて御依頼を頂いたのですが、とても書けません。かえって、ゼミ書評誌の着想を得させて頂いた貴「書評」誌に感謝いたしております。

「女性学」の第二ステージはいまから

金 谷 千慧子

人権問題研究室委嘱研究員

関西大学に「女性学」がはじめてお目見えしたのは、一九八六年春のことであつた。総合コース「女性論、女と男のかんけい学」である。山村嘉己先生（文学部教授—フランス文学）が唯一の男性、唯一の専任教員、私たち総勢七名の女性教員は、非常勤（兼務教員三名）という体制だったが、やる気いっぱい、張り切ってスタートした。講演を多くこなしている女性教員たちの授業は、従来の大学の講演形式の型を破るパターンが多く、斬新などよめきを大教室にも送り込んだ。学生たちにも勇

気やショックを与えることになつたが、この授業で最大の影響を受けたのは、「実は僕なんです」と山村先生は、その後人前でもたびたび告白されているのを聞いた。「正直な方なんだな」と思い、「ちよつとやりすぎたかしら」と反省したり、「でも、女にとつて当たり前のことを言つてるんだからしかたないか」と思い直したりしながら、おつき合いをさせて頂いて六年になる。山村先生はその後、本『書評』誌上において、大学における女性学のすずめを書かれておられるようだ。一度

期限を終えた「総合コース女性論」は女子学生らの要望もあり、再度復活、もう関西大学の必需科目になりつつあるのではないか。今後は女性学の質が問われる時期になると思う。「女性学」という教育・研究・実践領域は、いまま世界的規模で広まりつつある。アメリカではすでに一九七〇年代に一万を超える女性学コースが開設され、いまではどんな保守的な男子校でも女性学のない大学はないという。女性学を専攻分野とする学科取得も可能であり、さらに大学院でも女性学専攻が可能である。同志社大で私が担当していた「女性論」受講生の女性が子連れで渡米、フェミニスト・スタディーズの学部を終えて、今年秋からマスターコースに進学した。専攻は「開発と女性」学科だという。アメリカのみならずアジアでのフェミニズム運動も活発になっている。アメリカでは女性学

の出現が、これまでの性役割に基づ
く大学の教育方法・研究内容に変革
をもたらしたし、大学と社会の還流
をスムーズにする役割りを果たして
きた。わが国においても、高等教育
や社会教育での講座の数が増加し、
一一〇一の全大学の二二・八%、二
五一大学に女性学が開講されており、
講座数は四六三へと大幅に増えてい
る（一九九〇年国立教育会館調）。

「女性学」の量的拡大が急ピッチで
進むなかで、一九九〇年代の大学に
おける女性学は、セカンド・ステー
ジとして量の拡大の時期から質の向
上をめざす時期にきている。女性学
も女性の解放を男性批判、社会制度
批判として外に問題を見ていたレベ
ルから、それぞれの分野で自己抑圧
の問題、価値内面性を問うところへ
転換が求められている。そしてそれ
は「人権」の視点から「ジェンダー
性」の本質を捉え直すことでもある。



私と関大生協

芝田啓治

本学経済学部卒業生

「書評」百号発行、おめでとうございませう。四半世紀に渡り、継続された事について敬意を表します。

私が関大に通っていましたのは、一九六九年四月から七三年三月の四年間で、「書評」で言えば十号前後と云う事になるでしょうか。六九年には大学紛争が起り、七〇年安保と続き、全国の学園で学生運動が展開された時期です。授業も休講が続き、確か四年間のうち、三年まで前・後期試験のどちらかが流れてしまうといった状態で、最も勉強をしなかつた学生なのかも知れません。

そのような四年間の中で、関大生協は私たちの空腹を満たしてくれる場でありました。特に、一二〇円定食はただただ量豊富で、満腹感を抱かせるに十分でした。空腹の友人が側にいた時は、六〇円のカレーライスを一緒に食べたものです（私が空腹で、友人の定食をカレーにかえた方が多かつたかも知れません）。

又、知識供給の場でもありました。書籍部へ行くと当時「都市の論理」（羽仁五郎）、「自立の思想的拠点」（吉本隆明）などが並んでいたのを覚えています。書籍と言えば、四月

になるとグラウンドの隅にプレハブが建ち、テキスト販売が行われたのですが、そこは私のバイト先でもありました。又バイトと言えば、生協加入に必要な顔写真をポラロイドで撮るといふものや、大学合格電報など。しかし、今ではその種のバイトはおそらく消えてしまっている事でしょう。

生協は、暇をつぶす絶好の場でありました。少々薄暗い喫茶部で当時四〇円のコーヒ一杯注文し、数時間ねばるなど日常茶飯。何時の間にか一人増え二人増えて議論に熱中する事もしばしば。

空腹に苦しむ事もなく、時間を気にする事なく読みたい本を読み続け、これ又時間を気にする事なく友人と話す。そのような贅沢な時期ではなかつたでしょうか。十分無駄な時間の経験を積重ねたお蔭で、自分の背骨が出来上がったように思います。

『書評』が百号を重ねることになった。おめでとう。私が『日本中国ことばの来往』の連載を契機として『書評』とお付き合いをするようになってから九十二年、今回で丁度連載五〇回となった。『書評』の歴史、百号から見れば略相半ばする時間に当るが、今尚連載を続けておられるのは、編集委員会の寛容によるものである。それは私が連載の冒頭でお断わりしておいたこと——無限に広がる中国語文の大広場を思い切りかためぐってみたい、こんな独り善がりを容認してくれているからに他な

無限に広がる中国語文の大広場

芝田 稔

元文学部教員

らない。これはありがたいことであるが、来し方を顧みて忸怩たるものがある。

『書評』百号を祝福するとともに自戒の意をこめて「百」の字に少し拘ってみたい。

「百」とは『説文解字』によると

：「数ナリ。十ノ十ヲ一^ツ百トナス」とあり、また「十八数ノ具^ツハルナリ」という。十は数の最初にととのつたことを意味している。一から始まった数が十に達すれば、数がととのつて完成したことを示す。小さな完成を示す十がさらに完成を表わす十に達したことを百と呼称したのであるから、百という数は物事の完成を示す大きな節目である。

今この時点に立つた『書評』の更なる発展を祈念して、宋・道原『景德伝燈録』のこことばを贈る——百尺竿頭須進歩。



灯台としての貴重な役目

多湖正紀

京産大外国語学部教員

貴誌「書評」が一〇〇号を記念なさるといふことは、実に天晴なことだと、心からお祝い申し上げます。

一号一号の質は当然ながら、それを積み上げて一〇〇にまで達したということは、それがそのときどきの必要に応じて発行され、また、その必要を充たして次に引き継がれたことの集積であることを思えば、実に重いできごとであると思います。ひとつには、それは木の年輪を思わせるような成長の姿を示しています。さらに、それは長い年月に亘って編集にたずさわってこられた人たち、今

現にそれを編集なさっている人たちの努力と智慧の結晶であると思なされて然るべきものであると思うのです。ほんとうに一〇〇号発刊おめでとうございます。

外国より日本を訪れる人たちが驚くことの一つにや日本には大きな本屋さんが何処にでもあつて、しかもそこがいつも混雑しているということだそうですが、それはいかに沢山の本が出版されていることを示していることであり、また、自分のことを反省するまでもなく、沢山の人が沢山の本を読みたいと思つてい

ることの証しです。しかしながら、それらを読む私たちにはその全てに接することは不可能です。読む時間、読む力、本を購入する財力などに限りがあります。そんな時、「これがどんな本であるか」「その何処が面白いか」「その本を書いた人はどんな人か」などを教示してくれるものがあればどんなに便利でしょう。いえ、便利であるばかりかそれは欠くべからざることだとも言えるでしょう。いまさら言うまでもなく、この貴重な役目を果たして来られたのがこの「書評」であるというわけかどうか、こんな灯台の役目をこれからも続けてください。

内藤湖南研究と『書評』

西 重信

本学経済学部卒業生

筆者の『書評』への最初の投稿は、一九八五年の第七三号であった。それ以来いくつかのささやかな研究成果をとり上げていただいたが、筆者にとって最も有意義だったものは一連の内藤湖南研究の発表であった。

筆者の湖南研究のきっかけは、多くのすぐれた先学のように中国研究でもなければ東洋史でもなかった。専門としていた朝鮮人の間島（中国吉林省延辺）移住の歴史をたどる過程でのいわば副産物である。戦前、間島問題といわれた朝・中間の国境問題は李朝と清朝の時代に迄さかの

ぼる。日本による朝鮮の保護国化によって、この問題は日・清間の外交問題となった。一九〇九年の間島に關する日清協約によって領土問題には一応の結着がつけられた。白頭山（長白山）を起点として豆満江（図們江）をさかいとする今日の北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）と中国との国境は、実は日・清間でとり決められたものである。この協約そのものと協約締結に至る過程で日本政府にきわめて重大な影響を及ぼしたのが湖南であった。湖南は日本側の頭腦の役割を果したといえよう。一

方の清国の頭腦は宗教仁であった。協約成立後、湖南は京都大学の教授に昇任し、宗教仁は清朝政府から多額の報償金を与えられている。どちらも国家への貢献として高く評価されたのであろう。しかし、一説には宗への報償金が辛亥革命の資金として使用されたともいわれている。そうだとすれば清朝にとつてはまことに皮肉な結果である。だが日本ではこのようなことは起こらなかった。湖南の指導下で間島問題の調査研究を行った稲葉岩吉（君山）は後に朝鮮総督府の朝鮮史編纂に従事し、湖南は顧問をつとめた。そして中国研究の権威としての湖南の名声は今日でも変わりはない。

コペルニクスがうち破つたものは天動説だけに止まらずそれを支えていた教会の権威でもあったことをひき合いに出す迄もなく、科学は権威に対する挑戦である。むしろ社会科学

学も同様である。かつて国家や民族や社会にとつて疑いなく貢献であると考えられていたことが、数十年後には人々の批判的となる場合がある。革命や決定的な敗戦といった社会の激変を経験した国ではことさらである。さらに現在では正しいと思われたり当然のこととみなされていくことも、後世での評価もそうであるという保障はなにもない。そうしてみれば、科学とは権威に挑戦することによって少しでも早く後世での評価を先取りしようとする努力であるといえるかも知れない。先覚者といわれる人が同時にすぐれた科学者であった例はコペルニクスが代表している。

筆者のつたない湖南研究にあえて注目していただいた『書評』編集委員会
の心意気は今後も継承されてゆくであ
らうし、誰よりも筆者自身の初心とし
て忘れてはならないことである。

「百尺竿頭進一歩」を

梁 永 厚

文学部非常勤講師

『書評』が、記念すべき一〇〇号の誌齢を数えたことは誠に喜ばしいことである。おめでとう。

古来、ひとびとは一〇〇という数字に洋の東西を問わず特別な意義をもたせてきた。いわば百歳の長寿、創立一〇〇周年、建国一〇〇周年祭……などである。特別な意義は、表意文字である漢字の百からすると点がいく。漢字の百には「多い」「励む」といった意味がある。したがって、一を百かさねた衆多の喜び、百という数字に到達するための容易ならぬ努力などにたいし、人びとは

祝意と敬意を表すのだと思う。

また『書評』発行のローテーションが、創刊から現在まで同一のクォタリーであるとするなら、二十五年という歲月即四分の一世紀をかけての一〇〇号ということになる。代々の編集子たちが一〇〇号を迎えるまでに経たであろう多くの苦心、努力に心からのねぎらいの言葉をお贈りしたい。「本当に苦勞さんでした」。なお二十五年前には、この世に生を受けていなかったいまの編集子たちは、創刊のころざしと、代々の編集子が築いてきた編集の伝統をうけ

ついで、さらなる紙面の工夫をこらしているであろう、といった信頼と期待を誌齡一〇〇号に際して寄せておきたい。

さて、私は『書評』の八十三号から「在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート」の連載ということで、かれこれ四年の付き合いをさせて頂いている。

日・韓、日・朝の国家間の関係および在日韓国・朝鮮人の諸問題は、複雑困難な歴史的因縁を包影し、エモーショナルな態度に奔りがちな状況があり、その上に分断された南北の体制の思想に沿った論調と、それへのセクト主義の横行から、実相はよく見えないといった現状にある。

一例をあげると、在日の韓国系と北朝鮮系の二団体即ち韓国民間と朝鮮総連は、管轄下の教育機関において、それぞれが帰属する体制の思想を第一義においた「国民教育」「人

民教育」を行っている。ところが日本社会へむけては、韓国・朝鮮の文化や歴史と母国後の教育即民族教育をしていると唱え、一定の支持を得ようとしている。つまり日本社会むけの主張と実際の教育内容は整合されていないのである。

私は「在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート」の連載において、在日韓国・朝鮮人教育の望ましいありようを考えていく資を提起するために、一次的な資料にあたりながらクリテイクしてきたつもりであり、これからもそうしていく考えである。連載はまだ戦後十年目のところであるが、現況までをとりあげる計画で筆を進めようと思っている。読者の皆さんの叱正を心からお願したい。

記念すべき誌齡を数えた『書評』が、これを機会に一層の発展をとげるよう、百という漢字のはいつた成句を引用して結びとしたい。

——百尺竿頭一步を進む——
（「既に工夫を尽した上に、さらに工夫を加えて向上する」のたとえ）



情報化社会と私達

ハードからソフトへと唄われ続け数十年になる。それに伴い情報は重宝され、おびただしい量の情報を皆がかき集め、数々のシステムが確立した。しかし、今になってはたしてこれだけのものが必要なのか、という疑問が生じ始めた。つまり、生活していく上で使っていくかなければならないという情報は限られ、別に数々の情報機器を装備し全てのことを知ろうとしなくてもいいのである。情報に埋もれ身動きがとれなくなるまえに、しっかりとニーズを見つめ対処していかねばならない。そこで我々生協組織部は、現状にメスを入れるべく情報化、とくにコンピュータII便利論に反対されておられる池野高理先生（大阪経済大学教員）を講師としてお招きし、情報化と私達について講演会を催した。ここにその模様を再現すると同時に、今一度、情報化社会の問題点を認識し、自らの立場を確立していきたい。

基調

〈情報化社会とコンピュータ〉

世の中は動いている。様々な事象が生み出され、我々はそれを情報として捉え活用する。

「情報化」というものは人間の情報活動の生産性を上げる機械としてのコンピュータが出てきたことにある。つまり、情報量の増大と共に押し進められてきたのがコンピュータ化であり、現在では沢山の情報を管理し、処理するには必要不可欠の存在となっている。

コンピュータ導入により膨大な情報の中から必要なものだけを取り出すことも秒単位で可能となった。コンピュータ便利論の下、コンピュータ推進派は増え、今では

コンピュータは家庭にさえ普及している状況である。コンピュータにはICという電子回路の技術（マイクロエレクトロニクス）が使われており、これがどんな性格を持つ技術であるのかを見てみることに情報化社会の持つ意味が見出せる。

いわゆるマイクロエレクトロニクスの技術は元来、真空管を元にしてトランジスタ、IC、LSIという発達の過程を経ている。真空管やトランジスタを組み込んで作られたコンピュータは民需的というよりも軍需的な産業の中で育ってきた軍需主導型技術である。そして、ICの技術の飛躍的な発展により、コンピュータが小さくなり職場や家庭に普及してきた。パソコン、ワープロ、電子メモ帳などの知的道具などが沢山の情報を処理することができるとして利用度が高まっている。

しかし、生活面において、これらは必要だからといってできた技術ではないことに着目するべきである。

〈情報化はどのように打ち出されたか〉

一九七一年、「第三の教育改革」と言われる中央教育審議会の答申で日本で初めて公的な場において「生涯教育」という言葉が登場する。さらに二〇年後の八一年、「生涯教育について」の答申が行われ、生涯教育を保障

するための働きかけ及び条件が次第に整っていく。

八四年の臨時教育審議会答申では「生涯学習への移行」が打ち出され、その体系化がすすめられると同時に「国際化」「多様化」「情報化」が教育の分野で推進される。

とりわけ情報化政策においては「インテリジエント・スクール構想」という学校を拠点として、情報ネットワークを構築する計画があり、学校自体の情報ターミナル化が進められている。これは学校教育のためだけでなくその情報を国家や企業が利用するというものであり、産・官・学の共同路線を一層強化するものとなっている。

「開かれた高等教育機関」をキーワードとして、すでに多くの大学では産・官各界から講師を招き公開講座を実施したり、研究技術開発における学術情報の相互利用のためのネットワーク形成が進められている。

特に先端的技術開発のため、六〇年代から取り組んできた「科学技術立国構想」を再編し、学術研究都市の開発や高度情報化社会に対応しうる人材作りが進められている。

〈関大における情報化〉

八三年一月、関大当局は高槻新校地の購入を新聞紙上で発表した。続いて八七年八月、新学部設置構想の発

表がなされ、学内は騒然とした。

これは情報化政策の一環である関西学術研究都市の一翼を担う構想であり、国家が要求するシンクタンク的存在と関西財界の関西復権を目論むプロジェクトに迎合した形となっている。

学術研究都市とは産業界・政界・学会をひとつところに集め、その研究技術における活動情報を効率よく活用していくという社会自体の高度情報化であるといえる。

これは七三年のオイルショックの総括を教訓化して、それまでの素材中心型産業から高知識集約型産業への構



造転換を背景に「科学技術立国構想」の基礎固め、及び教育の合理化・高率化をその性格として持ち合わせている。

関西学研都市は関西新空港と抱き合わせて北摂学術研究都市や千里国際文化ゾーンを包摂するものとして設けられ、経済復興と産業構造の変換を狙いとしている。産業構造変換には情報産業・航空技術産業・原子力産業・分子生物産業の四つの方向性があるといわれており、これらは全て軍事技術に結び付く産業であり、産業と研究の軍事利用を示唆する極めて危険な構想であると言える。そのような中で、関西学研都市の一端を担う高槻新学部構想は「総合情報学部」や「バイオ関係学部」などといった先端的技术を開発し、産業界の即戦力となる人材を生み出す教育体制を敷くと思われ、研究の高度専門化が図られている。

関大の大きな情報化の一つに総合図書館が挙げられる。これは大学図書館にコンピュータを導入し、学術情報システム構想に連動した形で図書館の高度利用と合理化を図ったものである。

この構想は学術情報を処理するデータベースを全国的なネットワークで結び、情報検索を容易にするシステムとなっている。しかし、その目的は大学における研究内

容の把握及び管理と同時に研究技術の産業界への効率良い転用にある。

七一年、大阪大学のコンピュータの試験的導入を皮きりに七〇年代後半から各大学はコンピュータ導入を決定あるいはその準備を進めている。(学術情報システムは一九八〇年、文部省が学術審議会の答申を受けて大学図書館のコンピュータネットワークに着手することにはじまる。)

それは大学の枠組を越えて各大学図書館だけを結び中央集中型の新機構を作り、核となる中枢センターを新設している。その問題点としては(1)中枢センターに情報そのものが集中し、図書館・情報・利用者個人が一元管理される、(2)研究者・研究管理が容易になる、(3)産学共同の強化、(4)全国図書館の国家による一元管理の先取り、などがあげられている。

また、コンピュータ導入により、図書館業務の増大、合理化による職員の配転・失業、及び労働疎外、健康被害という問題も現実起こっている。

関大の総合図書館は八五年に開館し、I・Dカードの導入により利用者を管理し、(ブックディテクションシステム(BDS))を取り入れている。またコンピュータによって処理される入退室者数や貸し出し本の傾向・

数などは統計を取って文部省へ報告する義務がある。

こうした利用者個人や研究情報に対する管理体制は八〇年代の学校の条件である「開かれた高等教育機関」が背景となっているが、民間産業の活力の積極的参入を意図したものである。この大学の「開放化」戦略には学術研究都市構想に見られるように産・官・学・軍の複合的開発への国家総資本の支配的意思が示されている。

〈講演会にあたって〉

大学をはじめとする高等教育機関に対する国家支配や産学協同路線の強化は教育・研究・運営の全領域で進められている。

また、大学の社会に対する批判能力を拡散させるために、「(地域への)開かれた大学」をキャッチフレーズに大学が都市から地域へ移転している。これは国家防衛・社会治安対策として進められている。

そして現在、「開放化」「国際化」といったイデオロギイ的方策による大学再編は教員管理・学生管理への規制と支配の強化に結び付き、大学自身が支配・管理の装置となっている。

社会において大学そのものが支配機能を果たしている現在、教育総体の細分化・専門化をほらむ「情報化社会」

は国家総資本における大学のシンクタンク化―国家再編の支配装置としての位置付けを一層強化してくるだろう。そのような状況の下、大学や高等教育機関の「開放化」に見られる支配戦略に対して、どのような批判的原理をもって迎え撃つのかを我々は今一度考えていく必要がある。

高次化する情報化社会の中で発達していく情報通信網は我々の生活を確かに「便利」にしてくれたかもしれない。しかし、この高度情報化社会の渦中に生きている我々は「情報化」の及ぼす危険性を知らねばならない。今回の講演会を契機として、日常の中でその問題点を認識し、情報化社会を問い直す視点を築いていこう。

情報化社会と私達

池野高理

〈感性が麻痺させられている〉

いま基調報告があつて、最後にコンピュータ化、情報社会というものの日常的な問題を一度考えてみようというところがテーマとしてありました。今日は基本的にはコンピュータを中心とした情報社会がいかに「便利」という表面だけで推進されて来たか、その事が本当なのか、また何故そんなものが推進されて来たのかということをお話ししながら、もう一つは何故コンピュータが当り前になった時点でボクがおかしいと言ふようになったのかをお話ししたいと思います。

最近の大学がどういう状況なのかということをお話しますと、(関大では)高槻に新しいのを作っているというお話もありますが、ウチの大学も今、文化公園都市に移ろうということで答申が出ています。それで、大阪経済大学を大阪公園大学にしようじゃないかという話も出て、それは恥しいんとちがうかと言っているんだけども。僕の対案は「大阪イモ大学にしろ！」と言っているんだけど、もつと真面目にやれ、と(笑)。

ただその教育環境の雰囲気がどういふものかと言うと、物凄い象徴的なことが最近あつた。こういう学生がやる討論会を毎年学生から声があるんだけど、今年は教



員からあつた。学生の都合だけで教員の年間スケジュールを動かすのはおかしいという声が出た。一時間程、教授会で議論して、結局は慣例で認めるということになつただけでも、何故そんな声が出てくるか、ということがやっぱりコンピュータと結びついている。教授会では隣りの若い教員が一年間のスケジュールを全部コンピュータに打ち込んでいて、「いやあ、僕の場合は○月×日はこれがひっかかるけれども、この日はコレを予定しているから、休講にするのは困る」と言う。僕はその時、「世の中何が起ころかわからんし、なんでそんなもん決められるんや」と言った。

教員というものは自分から休む場合もあるけれど、何か公的な行事で休みになったら、内心喜ぶのが普通なんです。しかし、「おかしい」と声が出てくるということは、与えられたスケジュールをちゃんとこなすのが当たり前やという声が教員の中にも出てきているんじゃないかなと思う。

最近の学生の評価の仕方で、ある教員はゼミのなかで無断で一回休んだら一〇点引く、合宿に来なかつたら三〇点引くというふうに全部点数刻みで評価する。確かに「客観的」なのかも知れないが、それが本当に客観的なのかという問題がある。「改革」の一環なのでしようが、一年間の講義スケジュールを今年から出せと言われて、僕の場合、最近のデータを常に使うんで、講義の計画なんて立てられないと言つてまだ出してないんです。考えてみたら、今までなかったことが普通になつてしまつている。教員の出勤簿管理も去年から始まつて、反対したのは極く少数だった。何故今までやらなくてもよかったものをやらなければならぬのかということを考えてみると、やっぱりこの基調にも書いてるように、文部省からの問題が出てきたり、大学人の伝統的な慣習・雰囲気というものをどれだけ潰していくかというのが一番の狙いになつているんだということを最近感じて、危ないな

と思っっている。

そういう大学の状況下で、コンピュータの問題に入るんですが、この前三回生を連れて亀岡の方へ合宿に行っただんです。その時に、某セラミックと某情報システムという会社も来ていて、このくらいの顔写真貼ったカードに名前書いて胸の所にベタッと付けてたのね。二つの会社が休憩中それを付けてウロウロしている。学生がそれを見て、「気持ち悪い」って言うんです。僕はその「気持ち悪い」と思う感性は大事だと思っただけれど、何故あんな会社内でやっつてることを外にまで持つてくるのか。やっぱり、それは「気持ち悪い」という普通の感性を麻痺させていく、コンピュータ社会で麻痺させていくことが狙いであるわけです。

それでは、何故そんなものが会社の中で必要になっっているのかということが、コンピュータとの関係で出てくる。多分そういう感性がサラリーマンや労働者になっつていくなかでどんどん麻痺させられていっている。そういう社会が今狙われているんじゃないのかなと思います。

〈コンピュータ便利論の光と影〉

コンピュータが便利だという時に、五つか六つくらい

の話がある。大体コンピュータは、「キケン、キツイ、キタナイ」と言われる労働を無くしていくからいいじゃないかと必ず言われる。次に、必要な情報がボタン一つですぐ出せる。それと裏腹に、POSシステムというのが出来ることで、例えばコンビニエンス・ストアでPOSでピピッと物が流れていくなかで、要するに情報がすぐに送られることは逆に情報に指令されたものの動きが当然出てくるということがある。

それから、必ず言われるのが、日常生活のなかで便利だということ。例えば、某私鉄が乗車用プリペイドカードを出し、国鉄も最近カードを出した。そのことによつて、つまり合理化できる。合理化ができてエエやないかと。もう一つは、今までだったら熟練労働者だけがやっている仕事が、ICというものを組み込むことで普通の全然熟練でない人でも作れるようになる。これまでは、二〇年かかって熟練の域に達して社会に出てくるんだけれども、そういうコンピュータを組み込むことによつて、皆が恩恵を被ることになる——と。

これらは一見もつともらしく見えるけれども、よく考えてみたら、なんかおかしい。これらの「便利」論を真正面から「おかしいじゃないか」と言っていくことはなかなか難しい。けれども、その事を全体的な話のなかで

一旦認めて、こういういい面もあるが悪い面もあるんだという言い方で論議を対峙させても全然話にならない。プラスの面、マイナスの面という論議の立て方だけでは、マイナスの面を減らして行けばいいじゃないか——というふうになる。

問題は、プラスの面というのはマイナスの面があるからこそその上に乗っかっていつている、のではないかということだと思う。光と影というふうに二つの別個のものとして考えるのではなしに、光というのは光が強く放たれば放たれる程、それだけ影が濃くなるということを考えれば、光と影は別々のものとして考えることはできないんです。そういう発想で各々解決していかなければならない。

これらを全体として考えてみたら、必要な情報が必要な時にいつでも引つ張り出せるという場合の問題なんだけれども、よく考えてみたら情報社会という場合、何故情報なのかというと、情報というものが価値を持つからで、それを基軸としている。みんなが必要な時に必要なだけ誰でも取り出せるような社会なら、情報は価値を持たなくなる。

いつも保険論の講義で喋るんですが、例えば僕が試験問題を誰か一人の学生だけに見せたら、その学生にとつ

ては価値がある。全員に配ってしまつたら、いつさい価値はなくなる。それと同じように、情報というのは隠せば隠す程それだけ値打ちが出てくる。だからこそ、会社の中でああいうカードを付けさせるようになる。誰がどこを動いているのか、或いは付けてない者が会社の中をウロウロしていたら、「あいつはおかしい」と。ある会社では、社員がお互いの引き出しを開けて勝手に中を点検できるというシステムがあるのね。相互にお互いを監視し合うんです。それ程大事に情報というものを隠しておかなければならない。にもかかわらず、情報社会で言われているのは、いつでも必要なものを必要な時に情報を取り出せて便利だと言うけれど、そんな必要な情報を簡単に出すわけではない。

そういう発想で考えると、本当に必要な情報が出てきてるのかな、つて思う。今の情報社会で出てきている情報って大体がQ₂でもCATVでも同じものが出てきている。セックスが殆んどで、せいぜい観光地案内ぐらい。これが本当に必要なかという類の情報しか出てこない。情報社会というのは大事なものは隠しておくからこそ価値があるんだということを向こうは知っているわけです。けれども、「独占したらアカンやないか」と言われるんで、必要な情報は出しますよと言っている。と

ところが、最近でも大阪市なんかで飲み喰いがおかしいやないかと言うと、これはプライベートに関わりますので公開できませんと言う。元々プライベートというのは、妻い力関係、いわゆる世の中でうま味を吸っている人間とうま味を吸っていない人間の力関係があるなかで、「なんでお前に情報を教えんならんねん」という関係なんです。それがいつの間にか横の関係になってしまった。本来の力関係がある社会の中で、いつの間にか皆んな幻想を与えられて、「皆んな平等だ」となってしまう。でも、社会システムというのは三角形になっていて、必ず下の方が常に多い。ヨーイ、ドンノで出発するんだけど、最後に残るのは一人。それを努力して皆んな出世できたらいいが、努力して出世するということはいろんな人間を振り切つて落とすことなんだな。日本には物凄く幻想がある気がする。

〈日本型労務管理とコンピュータ〉

この「幻想」と関わらせて言えば、イギリスなんかではこの点はつきりと自覚されていて、まあ階級斗争の歴史が長いということもあるけれど、こつちで喋ってる話とあつちで喋ってる話とが全然違うんだなあ。もう一〇年も前のボクの体験になるのですが、例えば、上(の階

級)の方で「ティーに來い」と言われて行つてみたら、本當にお茶だけだった。労働者階級の方で「ティーに來い」と言われて言つたら飯まで出た。腹が減つてはアカンと思つて食事して行つたボクは困つた。同じティーでも階級によつて全然言葉が違う。日本だと金持ちの所へ行こうが貧乏人の所へ行こうが、「お茶飲みに來なさい」と言われたらお茶しか出てこない。社会の仕組みが全然違う。何故かと言えば、やっぱり日本には幻想があるんだね。

「鉄道員」という映画で、スト破りした人間に対してどれだけ強力に労働仲間が制裁を加えるか。それを可哀相と見るのか、仲間を裏切つた人間に対するモラルとして見るのかによつて違つて来るけれども、労働者という考え方があるからこそなんです。ところが、日本ではそれが無いから情報社会というのが物凄く発達してくる。特に全世界でロボットが百台動いているとしたら、その内の六〇台は日本で動いている。日本で世界の六割のロボットが生産工程で動いていると考えたら、それは物凄く生産性は上がるわけだ。だから、日米経済摩擦で日本が叩かれる。何故アメリカやヨーロッパにロボットが入らないかを考えてみたら、日本の場合には企業別組合になつている。トヨタで板金工やつていようが、日産で

組立工やつていようが全部まとめて企業別組合をやつて
いる。そうすると、トヨタでストしようと組合で決めた
ら、日産なりホンダなりが今のうちにと物を作つて売り
よるでしょ。いわゆる会社ぐるみのスト破りをする。

ヨーロッパでは、どこに勤めようが板金工は板金工全
部が横につながつて職能別組合というのを作る。それに
よつて組織されるので、トヨタで板金工がいやな目に遭
つたら、日産であろうがホンダであろうが会社は全然違
うんだけれどすべての板金工がストをするから、会社ぐ
るみのスト破りはできない。トヨタにロボットが入つて
きた時には、現実に今まで一〇人でやつていたのが一人
でできるようになるからあとの九人は要らんことになる。
ヨーロッパだったら当然クビになる。

ところが、日本では企業別組合あるいは終身雇用とい
う幻想があるから、配置転換ということになる。人間が
働くということは、金をもらつただけに働きの来てい
るわけじゃない。幾つかの要素のなかに、給料をもらう
地域と一緒に暮らすとか、一〇人なら一〇人という人間
関係のなかで培われた労働環境で働く。日本の場合、会
社という意識のなかで働くことになる。

ロボットが導入されると、ケン、キツイ、キタナイ
労働が無くなつてエエやないかと、労働者のなかから出

てくる。ウチの大学でも昔、BDSを入れようという運
動があつた時に、図書館員が必ず言つた。「あんた労働
者の立場で物を言うと言いながら、ワシら年間八百冊ぐ
らい盗まれる本を見張つてなならん。こんな見張りとい
う労働というのは単純労働で、図書館本来の仕事と違う。
全部機械に任せといて、本来の仕事がしたい。それやの
に、アンタなんで反対するんや」と言われるんやけれど
も、見張つてると思つて見張つてるからアカンので、通
りかかつた人と喋り合ひをすることでやつていつたらい
いのであつて……。盗まれるといつたつて、これはこれで
別次元の問題やないか。

図書館にコンピュータが入つたら本来の仕事がやれる、
なんてありえないのであつて、皆んなが雑務をこなしま
がらワイワイとやることによつて、一つの労働、職場と
いうものが形成される。この部分だけコンピュータに任
して、この部分の仕事だけやるということはありえない。
なにもかも引受けて全体の中で業務というものは動いて
いる。

教員がなんで、学術情報システムに反対しないかと言
つたら、自分の研究室で最新資料などボンボンと調
べ、わざわざ図書館へ行かなくてもよくて「能率」が上
がる。ところが、図書館へ行つて本を見たり、人と喋つ

たりするなかでいろいろと見えてくる。コンピュータが便利だというのは、例えば「日本型労務管理」で調べようとと思ったら、「日本型労務管理」で分類されたものは全部出てくるんだけれども、それに関係あるがそのデータには入っていない本は当然はずれているわけね。コンピュータのデータに打ち込むということは、ある人がたくさんの本がどういう分類になっているか、データを打ち込む。その人の主観によって違ってくるわけ。人によってデータの入れ方が違う。しかも、データ業者はコストをかけず早くしたい。それが商売なんやから完全には出来ない。

コンピュータのボタンを押せばすぐに出てくるということはどういうことか、と考えるアカン。最近日曜でも開いているけれど、キャッシュカードは確かに便利だろう。でもよく考えてみたら、コンピュータが二四時間動いているということは二四時間維持、管理する人間が誰か居るんだな。それを単に利用者だけが便利やと、利用者の立場だけで見ると便利やな、と思ってしまう。それを二四時間維持、管理する人間は、人が休んでいる時に起きて働かなあかんようになる。週休二日制と言って、日曜日も当然出て行かなならん。ところが、それが目に見えないから、なんか便利になったなぐらいで終わ



ってしまう。「労働者」という視点がないんです。ヨーロッパとの違いですね。

もう一つは、コンピュータのボタンを押せばデータがすぐ出てくるというのはどういうことか、についてです。そのためにプログラムやデータを入れておかねばならな

いという物凄い作業がある。そんな物凄い作業をどんなふうに乗るかというのが全然見えない。現実に行われていることは各端末に分かれて、全て女性が座らされて、後ろから課長が見ているという状態。労務管理もカード一枚で行われる。

ある日、その女性がフッと壁を見たらピンク色に見えるんだな。それで今日は疲れてるなあって思うんだね。労働省の基準ですら、一時間キーを叩いたら十分休みなさい、とある。でも、人間って流れの中で仕事をしているし、いつの間にか二時間キーを叩いている時もある。皆んなピンク色に見えておかしいと課長に文句言ったら、次の日全部の壁がピンク色に塗られていた。それでもまだおかしいと言ったら、会社と組合が一緒になって考え出したのは、「五時以降は編み物をするな。本を読むな。テレビを見るな」だった。そりゃ、目は疲れんわなあ。でも、アフターファイブなんて、自分がどのように過ごそうと企業が干渉する問題じゃないわけね。これじゃ、帰ったら寝るしかないわな。そこまで会社と組合が一緒になって、強靱な作業を女性に課したわけ。

で、いろいろ調べてみて流産が多くなったとかいろいろ問題になって、日本を調べてみたら日本は問題がない。さすが日本型労務管理は凄いなあ、しっかりしているな

あ、と言うんだけれど、日本の場合、女性の給料は安く、いわゆる結婚の段階になると辞めて、また子育てが一段落したら出て来てと、超M字型の雇用になっている。皆んなが丁度疲れた頃に結婚して退職する。退職してから体にガタ来るものだから、働いている者だけの統計とってみても、健康被害は出てこないわけ。そういう調査で日本には問題ないと言われている。アメリカで問題起きてきている同じ機械が日本で問題ないわけがない。それは何か。その秘訣というのが、企業がずっと働いてきている人間に対して、最近ではセクハラと言っているけれど、やっぱり女は若いうちが華やかなあ、とかプレッシャーをかけて、皆んな辞めさせられていく。そういうふういうまいことカバーして、合体している。だからこそ、日本はコンピュータがどんどん入って来る。そして、日本だけ生産性が高まっていく。

〈下積みのものが常に見えない社会〉

今まで言ってきたことがどういうことかと言えば、昔「巨人の星」というのがあって、花形滴がドリームボールというのを打って格好いいんやね。でも彼が一言言ったのは、「僕が打った時だけを見て皆んな格好いい言うけど、あの飛雄馬の投げるドリームボールを打つためにどんだ

け苦労したか。そのためにはタイヤ引きずったり、凄いや努力して傷だらけになってやっつたんだ」と。そして、彼は「僕は白鳥だ」と言った。白鳥は常に優雅に浮かんでいるためには下で一生懸命水をかいている。あんたはその水かきを見ただけやと。

コンピュータ社会というのはまったくそうなんで、常に自分というものを利用者だけに限定している。それを支えている人間、保守管理している労働者が見えない。見んでも済むようになっていく。隔離されている。キャッシュカードの裏には人が居るんだけど、見えないようになっていく。そんなわけで皆んな便利やと言っている。

POSシステムでも、今弁当が売れましたという情報が入って、あそこへすぐ弁当を納入しろとなる。最近ローソンやセブンイレブン行ったら、ほとんどひっきりなしに車が配達にきている。昔だったら売れるか売れないかわからなかったものが、今売れるとわかるものだから補充せなしようがない。しようがないというか、儲かるから補充するんだけれども。これだけCO₂汚染だとか、環境破壊と言われながら、或いは交通渋滞が経済的にロスだと言われながら、小口配達というのがやたら増えている。

最近テレビで一番腹立つのが、有名な宅配便で、「日本のわがまま運びます」という宣伝やっているね。ゴルフ宅配便、クール宅配便とか。ゴルフなんてあんな広い所に農薬撒き散らして一人で占領して腹立つんだけれど、あそこに卓球台を並べたら皆んなで遊べるよ——。ゴルフはやるんだったら自分で荷物運んで行ったらいい。ゴルフ宅配便ができたおかげで、一人だけ身軽になって車でCO₂撒き散らして行って、宅配便もやっぱりCO₂撒き散らして行く。わがままなんて運んだらアカン。自分で持って行ったらいい。でも、さっき言ったように、日本の社会が、下積みものは常に見えないようにしておくことによって、上だけのものが便利になったというふうに見えるんだね。

それはしようがないことだと言うけれど、自分がせいぜいやることは何かと言ったら、ワープロを使わないこととか。それは何故かと言えば、ボクも最初ワープロは面白いもんやと言って使ってたし、機械ももらったものがあつた。ところが、学術情報システムに反対する会なんかで、やっぱり突きつけられるやね。半導体を作るためにどれだけハイテク汚染が行われているか。大体、大分・熊本・長野・仙台・北海道という所で半導体は作られている。これらに共通するのは「田舎」で「水がき

れい」な所。ICというのは物凄く小さな所に何百億個という情報を入れておくので、それにゴミ一つでもあったらあかんのやね。常に水で流してきれいにしたり、クリーンルームに入れて何百種類の化学物質でゴミを除いたりしなけりゃならない。その純粋一〇〇パーセントのクリーンルームなんかで当然、化学物質をどこかに排出せねばならない。部屋の中を持っておくわけにはいかないから、そうすると大気汚染とか、半導体を掃除するのにフロンが要る。それを日本は一番作っている。

日本の半導体の生産性が高まったということは、どれだけ不良品を少なく優秀な製品を作るかということ。アメリカは大体、不良品率は二%。一〇〇個作ったら二つ駄目なんだね。それだけでも凄いのに、日本は〇・〇二%の不良品率なんです。ということは、一万個作って二個不良品なんやね。アメリカの一〇〇倍の品質なんだ。だから売れる。つまり、これだけ品質のいいものを作るということは、徹底してきれいに作っているということ。あれだけフロンが問題になっても日本は作っている。

フロンが問題になった時に半導体メーカーは何を言ったかというところ、フロンが大気オゾンを破壊するという統計的資料はない、と言った。それは原発もいっしょで、原発の放射能がガンをひき起こしたという統計はないと

言っているのと同じことです。危険性は証明されていないから、まだいように使うということなんです。つまり、彼らにとつてヘリクツは何とでも考えられるから、危険性が証明されない限りは使うと言ってる。データを隠していることもあると思うけど。で、市場から見ると、せっかく投資したものを簡単に止められない。そ



のまま作って、オゾン層を破壊してるし、当然水で洗ってやるもんだから、その汚水を排出していく。それをコストかけてやったのでは経費が高つくから、できるだけ手を抜く。そしてかえって汚染を広める。

よく言われるのが、日本は高度成長があった反面で、公害があったからいけなかった、公害を出来るだけ少くして、高度成長をやりましようと言うのだけれども、垂れ流したからこそ、高度成長が出来たと考えられる。そう考えると、当然ハイテク汚染なんかもコンピュータ社会を成り立たせるもとの所で直結している。

〈ボクがワープロをやめた理由〉

今まで見えなかったけれど、いかにいろんなこと言っても、結局その上に乗っかってるんだなあ。昔なら、人間は矛盾があるもんなだからしょうがないと言って逃げられるんだけど、しかし、そうもいかない状態もある。今はワープロもやめて全部手書きでやっているし、コンピュータは使わないようにしている。とにかく情報というものに自分からはできるだけ加担しないようにしている。

何故そんなことができるようになったかと言えば、幻想を持たない社会にどれだけ共感が持てるかという問題

がある。所詮、自分の立っている所からしか物は見えないんだから、自分の基盤をどれだけ動せるかなんだ。

僕も三三歳まではいわゆるリベラルだった。差別はいけませんよ、コンピュータはいけませんねえ、と言っているのがリベラル。でも、そこを突破するしかないかというのが重要だと思う。僕も最初の頃はそうだったが、何が変わったのかと言えば、「いやー、人間ちゆうもんは沢山矛盾があつて、そう簡単にはいきませんよ」とは言えないような自分にどれだけ追い込むかということだった。

三三歳の頃、ある人を好きになつてしまつて、その人が「あんた確かに格好エエこと言う。格好エエこと言うけれど、具体的に何をやってんの？」と言われた時に、物凄く強烈にくるわけね。相手が好きな人でなければ、「いやー、人間矛盾だらけで」て言つて終わりなんだけれど、その人と一緒に住もうと思つたら、やっぱり言うこと聞かんならん。現実と言つたことをどれだけやっていけるかという問題が当然自分に課せられてくる。で、一緒に住みかけたら、「あんた何を格好エエこと言つてんの。分業がおかしいって、分業するからこそ労働がおかしくなるって言つてんのに、男と女の関係でなんで女が炊事・洗濯せならんの」って言われたら、うーん当

つてゐるわな。

常に人間つて、そうやって点検していかんと楽な方へ行つちゃう。ワープロやコンピュータ利用する人は理屈をつけないと正当化できない。リベラルというのは頭エエから。言い訳することが仕事だから、いろんなこと考える。皆んな自己正当化する論理というものを考えてしまふ。理屈というものは幾らでも作れるから。

〈コンピュータ社会が新たな3Kを生み出す〉

何故、情報社会がこれだけ進んできたのか。何故、便利論を先に出すことによつて、みんなそれに乗つかつてしまったのか。それは勿論、簡単に言うとなんか儲けることなんだけれども、何故今の日本経済、日本社会が得られたのか。

水は確かに高い所から低い所に流れる。これは必然。どの道の流れるかは、これは必然でも何でもない。海岸でたわむれていたら、波は必ずドバツと全体に広がつていく。浜辺にピューッと線を引くと必ずそこに波がワーッと来る。と同じように、税金問題それから金融問題、補助金の問題で、政府と資本が、コンピュータを使つたらこれだけ税金を安くするぞとか、低金利融資をしますよ、原価償却を税金に有利なように高い方で認めますよ、

補助金を出しますよと言えば、みんな当然乗つてくるわけです。

つまり、なんで政府がそれを目的にしたかと言えば、日本だけがとび抜けて労働生産性が高くなつてきたからみんな叩かれることがわかる。七〇年代から出てきてから。ということ、前川リポートが出る前から既に内需でいかなないと駄目だということをおかして。内需でいかなばならないのならばどうすればいいかということ、新たな戦略でどこが一番投資が増えるかという問題が出てくる。最近を見てもらうとわかるんですが、企業が投資している。機械受注とかに現われている企業の投資のうち三分の一は情報関連。やつぱり需要は増える。

もう一つそれと関連して、コンピュータというのは常に熱を發している。ということはその熱を奪つていかなばならない。図書館でクーラーがきいているのは何故かという、別に君達が快適になるというのではなく、コンピュータを維持するために熱を引き出し冷やすためなんです。これは昔から言われていること。七〇年代から言ってきたんだけど、ちょうどその頃大阪で万博があつた。七〇年の万博のメインは何であつたかという、原発から電力を作つて会場へ送ることだつた。コンピュータで一番怖いのは人間の目には見えない電気の瞬断です。火

短評募集!!



力、水力で今年の電力は少ないですなど言うているようではコンピュータ社会は成り立たない。常に一定のレベルの電力を抽出しなければならぬというので、七〇年代から原発を作らねばならないと言われてきた。しかも原発のほうが火力や水力に比べて投資額が大きいから内需拡大にも貢献するってわけです。

これだけコンピュータ社会が進んだといわれながら、その実いまだ3K職場が問題になっている。コンピュータがあれば3Kはなくなるといわれているけれども、よく考えたら、確かにロボットで塗装や重たい物を持つような仕事をやっているかも知れないが、逆にコンピュー

タが出てこなかったらなかつたような職場が新たに出てくる。コンピュータが「キケン、キツイ、キタナイ」といわれる労働を肩がわりしたつもりが、コンピュータ自身が持っている、或いは原発自身が持っている「キケン、キツイ、キタナイ」労働がまた出てくるんです。モグラ叩きをやっているだけですね。

短評を書いてみませんか？

最近一年間に発行された本の中で、自分がこれだけひ人にも勧めたい、または、強く印象つけられた本の短評を原稿用紙(四百字詰)二、三枚に。

★ジャンルは自由、締切は毎月末。

★連絡先 〒565吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合本部3F組織部内

『書評』編集委員会

☎ 387-9998 (直通)

☎ 388-1121 (内線 4821)

質 疑 討 論

——ブック・ディテクション・システムがありますが、池野さんも経大で反対運動をやっておられるというところで、そのシステムの具体的な問題を話していただきたい。

四、五年前かな、別にボクがやっていたわけではないけれど、学生が勝手にやっていたのをボクが紹介するだけです。この点、ボクがやらして言うて言われたのですが、それは学生に失礼です。あくまでも学生が反対運動で潰したんですが、何が問題かというと、一つは、「開かれた大学」といいながら、部外者が入れない図書館なんてありうるのか。カードを入れなければならぬですね。うち（大経大）は「そんな先生、近くに専門学校があるのにぎょうさん来よるからうちがあかん」、なにを言うんや、「開かれた大学」やねんから地域に開かれててええやないかと言うのだけれども、確かにそういう問題が、図書館を管理してる者からすれば問題があるんだが、「開かれた大学」と言うこと自体——その問題性はもちろんあります——に反すると、私は思うんです。

もう一つは、新しい図書館の窓は開かない。関大はそんなことないですか？。開かないよね。なぜ開かないようになったかといえば、あれは警戒装置があるからだ。

ある京都の大学でブック・ディテクション・システムを導入したが、なかなか前と変わらず、盗まれる本の数は減らない。おかしいなあと考えたら、それは簡単なんよ。窓を開けて、下に人を待たせておいて上から本を投げて、下で受けとればいい。かしこい奴がいてるもんです。これはいけないということ窓を全部閉めるようになった。窓を閉めれば、空調を入れねばならない。気持ちの良い日は窓を開けて勉強すればいいのに、それが管理を問われる。もう一つは、ブック・ディテクションを導入するというのは、機械をポンと入れればいいわけではない。本の中に不法に持ち出したらブロッと反応するような磁気が入り込んでる。で、図書館で貸し出しの時、「ピュッ」とやるが、あの「ピュッ」が実は解除してるんですね。不法に持ち出して、「ブー」となるシステムだから、ずっと持つてる時は外には出られない。ところが、それをカバンに隠したりして、解除してないもんだから、「ブーガチン」となる。

ということとは問題がいくつああって、この作業を誰がするんかということやね。何千冊か知らないがものすご

い数の本にそれをはりつけないといけない。あの作業をせねばならない。これが本当に生産的な仕事か？ と言いたい。誰がやるかというのと、この不生産的な仕事を、職員は絶対やるうとしないから、全部下請けに出してしまふ。で、やつぱり、こんな仕事をさせることによって、本を盗まれないことを維持している。もう一つは、きたない仕事、きつい仕事を人にまかせるその構造の上ののっているということと、もう一つは、機械というのは必ず誤作動というのがある。ボクは鉄道なんかも、人がいるところを通るようにしてるけども、ほとんど駅員のところも自動にしちゃったから、通らざるを得ない。パーンと閉まることはやつぱりある。誤作動するから。つまり、二階三階は閲覧室になつとるんだが、もし機械が誤作動すれば、「ワッ、池野、本とりよつた！」ということになる。誤作動でも言われる。その時に職員さんに「あんた誤作動した度にマイクとつてただ今誤作動でしたといちいち謝まるのか。」と聞いたことがある。「そんなん、いちいちやつとれへん」と答えた。見た者からすると、あいつ本盗りよつたんやで、ということになる。そして、そういう問題がある。いわゆる「濡れ衣」の問題やね。要するに三つあって、一つは、ブック・ディテクション・システムが「開かれた大学」にあるという問題。た

またま、カードを忘れて入れないということもある。もう一つは、強烈な単純作業というものを、誰が負担するかという問題。三つめは、誤作業の時はあんたどないしまんねんという問題。その問題を考えてみたら、本を盗る奴に悪い奴はおらん、経大は八〇〇冊盗られるやね。「多いでしょう」というが、何が八〇〇冊ぐらいとボクなんか思う。もしそれが悪いということなら、その防止をするということでもってやるんじゃないに、この本が具体的に盗られました、という貼り紙をすることに、じゃ俺持つてるから寄付するわ——と、お互いにカパーをし合う、そうすれば、盗った奴も悪いなァという気持ちになつてくる。それを、盗られることを前提にして、いかに盗られないことを考えるか、その発想がちよつと貧困なんとちやうかと思うんだが。しかしそれは、盗つてはいけないということを貼り出すことによつて、少しでも対処できる。でも考えたら、貼り出しとらん。なんでかいうたら、盗られた本がどうでもええ本ばつかりやねん。貴重品が盗られたとかあらへん。誰も貴重品なんか触わらすところに置いてない。ということでは、そこにアヤがあつて、考えたら、盗ろうと思うもんは、試験期にしか集中しない。試験に必要なもんは盗られてもええ本、といえは語弊があるんだけど、でもそ

それは問題なんやなア。そう考えると、システムというものは、上から落として下で取るといったそれはものすごく原始的な、ハイテクを解くかぎなんだけれども、工学部は必ずこういうシステムを解くための競争が出てくるのは当たり前なんだ。それよりも良いものが当然出てくる。かぜ薬を飲んだら次のかぜはその薬よりも強いウイルスのものがでてくるのと同じです。そのことを考えると、そんな無駄なことはせんでもええやないかと思う。そんなものに金をかけるぐらいなら、ボクはもつと本を買えばいいのにとと思う。

——最近ニュース番組が多いですが、情報のソースが錯綜して流れるようになって、私達は本当に情報化社会の真つただ中にあるなアということを実感するんです。

でも考えてみたら、どうでもええ情報ばかり。みんながあれを、色んな情報だと思うんだらうけど、ニュースや新聞みてて、本当にあれが情報なんかなアと思うことがある。

——朝七時ぐらいのニュースを見てるとひきつまるような表情でやっているが…。

まあ、情報化社会にあわせてつくっているのか、なんぞ増えたのか、やっぱりみんな忙しくて、考えてる暇も

ないから、まとめて見たいというのがあるんじゃないかなア、また出てくる解説いうたら、だいたい受身形で必ずものを言いよる。何々と言われています、と必ず表現は受身形。つまり受動体にする主語はいらぬ。私はこう思うと言わぬでも、——と言われています、と言うことによつて自分の責任がない。ものすごく楽ですよ。例えば、差別する人が多いですからねエ、と言う場合、お前はどうかんやとなる。最近ボクがテレビを見ていて「クソー」とうなりたくなつたのは、就職特集というやつで、日本の大学がどれだけだめかと言われて、その一人のコメントーターが言うには、「いや今の流行っている産業をにぎつたらあきまへんで、昔優秀な人間が、繊維とか鉄鋼とか言つたとたけど、今あかん。今あかんところは下がり調子で、石炭なんか今ありまへんがなア」と言うつたが、日本にはまだ四つ炭坑がある。ボクは去年の夏見てきたんや。そうゆうええかげんなことが、どんどん言われている。

——カードを持つてることがアイデンティティの保障というかカードを何枚持っているというのがよく話になる。また、そのカードが増えているというのは、こわいことではないでしょうか。

それはそうだ。カードを申し込む時にすごいことを書

く。勿論、住所、氏名、年齢、職業はあるよな。年収、持ち家かどうか、色々書かねばならない。そのことを売って初めて、カードを手に入れるんだね。その入った時に、いろいろな特典がある。そんなみみっちいーもんで自分の情報を相手に渡してしまっている。

私が離婚を申し立てられて裁判所へ行ったとたんに、「あなたの新しいパートナーを見つけませんか」とダイレクトメールがくる。それはすごいよ、今の情報社会というものは。そこらじゅうに網をはるときよる。ボク、そんなことどこの会社にも届けたわけないよ。その時役所へ調停を申し出に行ったらこれやもの。おもわずボクは感動したよ、すごいなア、と。アメリカでは、カードでないと支払いを受けてもらえないのよね。ホテル泊まるのにも。なぜかといえば、物を盗られた時に追求しやすいからやねん、カードやったら。偽名で泊まられた場合は例えばテレビ持って帰ったりしたら、分からなくなるやろ。その時に追求しやすいの、カードやったら本人確認ができてるからね。現金お断りというのは、なにも、泥棒に盗られた時のことやなしに、カードの方がいいということ。企業も楽なんよ。現金を扱わないでいいし、泥棒の可能性も少ない。もう一つは、本人が何回使ったかというのが全部記録に残るもんやから、いろんな

データがある。こいつはよくコーヒーを飲みよる、こいつは中元のセールの宣伝の時にコーヒーだけのものを送ろうということになり、企業にとってはヒット率が高くなる。そういうことで向こうはやっている。でもこっちの方は、家が持ち家かどうか、年収はどれだけかといういろんな情報を明らかにすることによってカードを手に入れる。でもそんなん手に入れて、5%引かれるぐらいなら、別に5%余分に買いたい物しないでもいいわけや。いらぬ物を買わないでいいわけやなア。

——残念ながらお時間がなくなつて来ました。本日はどうもありがとうございました。

(いけの たかみち・大阪経済大学教員)

寄

稿

琿春の開放と北朝鮮の自由港

——最近の朝・中両国の経済開放について——

西 重 信

一、北朝鮮と吉林省の経済特区

昨年末以降、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）と中国吉林省では注目すべきいくつかの動きがみられている。まず北朝鮮では、一九九一年一月二十八日付の政務院の決定として「自由経済貿易地帯（経済特区）の設置について」がある。これは次の四つの内容が骨子とされている¹⁾。

1. 咸鏡北道の羅津、先鋒（かつての雄基）地区に自由経済貿易地帯を設置する。

2. この地域内で外国人は北朝鮮の関係機関の承認を受

けて合作・合併企業や外国人企業を創設し、運営することができる。

3. 羅津、先鋒、清津の三港を自由貿易港とする。

4. 北朝鮮政府は、自由貿易地帯での外国人資本と所得を法的に保護する。かつ投資の性格によつて関税と所得税の減免など各種の特恵と便宜を保障する。

この決定とともに、三つの自由貿易港の貨物処理能力の増大、これらの港と中国の図們市およびロシアのハサンを結ぶ鉄道の複線電化、その内側への環状高速道路の建設などが計画されているといわれる²⁾。

次に中国では、今年一月、延辺朝鮮族自治州の東端に



位置する琿春を「沿海経済特区」に指定し、開発優遇制度の適用を承認した³⁾。それにもまして見逃すことのできない中国の動きとして、昨年の中・ソ国境交渉がある⁴⁾。すなわち中国は、黒龍江(アムール河)の黒瞎子(ヘイシャズ)島をソ連領として認めることの交換に沿海州のポシエツト地区の一部を要求したのである。しかし、一八六〇年の北京条約による国境線の部分的変更にもなりかねない中国側の提案はソ連に拒否されている。このような中国の一連の動きは何を求めようとするものであろうか。いうまでもなく、帝政ロシアに奪われていた吉林省の日本海との出入口を再び手に入れようとするものである。つまり「琿春ルート」の復活の試みに他ならぬ^い。

注

- (1) 一九九一年二月三日『朝日新聞』(朝刊)から要約した。自由貿易地帯の総面積は六二二平方キロメートルとされている。因みに東京二三区の面積は約五九二平方キロメートルである。
- (2) 一九九一年二月一七日から一九日にかけて『朝日新聞』(朝刊)に連載された「開放に踏み出す北朝鮮」を参照されたい。

(3) 一九九二年一月一四日の各新聞が、一三日付の香港の中国系紙『文匯報』の報道として伝えた。なお、この報道は一九九二年三月二〇日の第七期全国人民代表大会での政府活動報告で公式に確認された。

(4) 一九九一年一月二七日『朝日新聞』（朝刊）。黒瞎子島はウスリー河との合流点にある。この交渉で中国側が要求した具体的地名は明らかではないが、筆者は、今世紀初頭迄ジャンク貿易で栄えていたハンシ付近ではないかと推測している。飛び地の租借を要求したのでなければ、北京条約と其後の琿春界約による国境線の変更となる。

二、琿春ルート

かつての琿春の貿易流通路は、大別して二つの期間で大きく異なる。前期は一九〇九年四月以前、すなわちウラジオストックが自由貿易港だった時期である。「琿春ルート」とは、この時期における沿海州南部のポシエツト湾および琿春とを結ぶ陸路を経由して満州（中国東北地方）に出入りする貿易流通路である¹¹。琿春にはこれとは別にもう一本の流通路があった。局子街（延吉）、敦化をへて吉林に至る吉林街道である¹²。しかし、琿春河下流域にひろがる琿春平野を中心とする独自の商業圏

を形成した琿春の繁栄は、大部分が琿春ルートに依存した。それだけに一九〇〇年の義和団事変に乗じたロシア軍の侵入は、戦乱と交易路の喪失という二重の打撃であった。だが琿春の復興には皮肉にもロシア軍が砲車の侵入路として改築した道路が大きな役割を果たした。ポシエツト、ノーキエフスクから国境の長嶺子を越える道路を貨物を満載した馬車の隊列が往復した¹³。自由港ウラジオストックに輸入された各国の工業製品は、ロシア東亜汽船の沿岸航路でポシエツトに陸揚げされ琿春に運ばれた。ロシア更紗、金巾¹⁴、石油¹⁵、燐寸¹⁶、毛織物などである。琿春からは、豆粕¹⁷、豆油、牛、牛皮、豚、木材などが輸出された。ところが日露戦争後、日本の満州侵略が本格化し始めるとともに、琿春ルートにとってあなごどるのことができない競合相手が出現した。清津を海港として会寧を経由し、間島（延辺）の龍井村（龍井）に達する北朝鮮ルートである¹⁸。同種の製谷¹⁹が輸入され、粟、大豆、木材などが輸出された。しかし、琿春は龍井村とは別個の商業圏を有していたことと、何よりもウラジオストックが自由港であった限りにおいて琿春ルートは健在した。

ウラジオストックの有税港化とそれに対抗した清国琿春税関の開設は、従来の対ロシア貿易による繁栄に終り

を告げた。そのうえ一九一〇年一月に徴税を開始した清国税関は、琿春ルートを利用する移出入品への課税や輸出入品への二重あるいは三重課税を実施した。国内税制と関税との不整合に起因するといわれているが、税収入の増大をねらった意図的な徴税とも考えられる。琿春商務会の抗議の同盟休業が起きたのはこの時である。琿春の受けた打撃の深刻さを理解できる。だが同時に、琿春は再度の復興への手掛かりをもさがし当てていた。ポシエットにかわって朝鮮の不凍港雄基に結びつき、対日貿易への転換をはかったのである。すなわち琿春は、かつてのような北朝鮮ルートとの競合関係ではなく、むしろ延長上に位置することで立ち直ろうとしたのである。一九二一年の雄基の開港は復興を決定的にし、翌年のソ連による国境の閉鎖によって琿春ルートは役割を終えた。かつての琿春貿易の盛衰は、独自の海港をもたないという琿春の最大の弱点をはずさずよく表わしている。そこで今日の琿春の貿易流通路にはいくつかの可能性をあげることができよう。第一は、ロシア共和国との交渉によって、あくまでもポシエット湾周辺に自国領を得るよう努力することである。中国にとつては最も望ましい解決方法であるが、近い将来における可能性は決して高くはない。しかもポシエット湾は凍港であるうえ、

ポシエット港を除く他は一般に水深が浅く海底には岩盤が多い。大規模な港湾設備と琿春との輸送機関の整備には多大の資金と時間を必要とするであろう。

第二は、豆満江下流に位置する防川を日本海との出入口にする方法である。一九九〇年に中国は豆満江の出海航行権を回復しており、防川は自国領であるため政治的支障はない。そのうえ冬期を除けば、琿春から防川迄の輸送には琿春河と豆満江の水運をも利用できる利点をも備えている。ところが最大の問題は豆満江口の浚渫にある。上流からの土砂が日本海の東南の風浪によって河口に堆積するという豆満江水運にとつて致命的ともいえる欠陥の克服には、技術と費用においてきわめて大きな困難がある。UNDP（国連開発計画）もこの中国の計画には否定的であるといわれている¹⁰⁾。

第三は、北朝鮮の既設の鉄道と港を利用することである。両国の信頼関係に負うところが大きいとはいえず、現実性と合理性は前二者よりもはるかに高い。再びかつての琿春の貿易流通路に注目してみよう。

注

- (1) 北朝鮮ルートと対比する意味で使用した筆者の造語である。拙稿「北朝鮮ルート論」と朝鮮人の間島移住」

(一九八七年十一月、本学『経済論集』第三七卷第四号)を参照されたい。

(2) 琿春から局子街迄二四里、局子街から吉林迄八一一里といわれた。

(3) 琿春とポシエツト間は一二里半、ポシエツトとウラジオストック間は六七哩といわれた。なお長嶺子は一九九〇年五月に対ソ貿易に開放されている。

(4) カナキンもしくはカネキン。薄地の綿布で朝鮮人の衣服に用いられた。

(5) ケロシン(燈油)である。伝統的な豆油にかわる燈火として需要が増加しつつあり、ほとんどが米国製であった。

(6) 多くが神戸や大阪で製造された価格の安い黄燐マツチである。

(7) ほとんどがウラジオストックから日本へ輸出された。

(8) 前掲、拙稿を参照されたい。

(9) 一九一〇年三月、福記号、福祥号、福慶昌、春成漢、義頭昌の五名の有力商人の発起による。

(10) ポシエツト湾に面したクラスキノ港の開放と琿春とのトラック輸送路線の開設によって、琿春の東方への出入口はすでに確保されているという見解もある。だが筆者は、国境交渉での中国の要求からみてあくまで

も過度的方策ではないかと考えている。小川和夫、小牧輝夫編『環日本海経済圏』(一九九一年、日本経済新聞社)を参照されたい。なお九月一日『朝日新聞』(朝刊)によれば、琿春とクラスキノとを結ぶ鉄道敷設計画が具体化し始めた。しかし、その海港がポシエツト湾ではなく北方のザルビノ港である点に注意すべきである。

(11) 豆満江口は張鼓峰事件もしくは第二次大戦中に日本軍によって閉鎖されたとする説があるが、その根拠は明らかではない。例えば「共存の時代へ・一」(一九九一年一〇月二九日『朝日新聞』朝刊)や小川、小牧編の前掲書がある。また一説では、北朝鮮は中国の出海航行権をまだ公式には認めていないともいわれている。

(12) 前掲、「開放に踏み出す北朝鮮」。

三、朝鮮の鉄道と琿春貿易

ウラジオストックから離れて雄基と結びついた琿春の貿易流通路は、朝鮮の鉄道の発達にもなつてさらに三つの時期に分けられる。第一期は一九二八年迄の期間である。つまり咸鏡北道北東部の豆満江岸には鉄道が敷設されていなかった時期である。従つて、琿春河と豆満江

の水運および陸路を使用した。大豆を主として粟、小豆などの琿春の農産物は慶興郡下汝坪で陸揚げされ、牛馬車で雄基へと運ばれた。雄基に輸入、陸揚げされた金巾綿織物、小麦粉、打綿、砂糖などは、このルートを逆に辿って琿春へ輸送された。下汝坪と雄基間には約二八キロメートルの良好な道路が整備されており、下汝坪は水運と陸運の中継地として繁栄した。だが大豆につぐ琿春の重要な輸出品である琿春河流域の木材は、豆満江口の土里迄流筏され、さらに海上一八哩を雄基に曳航輸送された¹⁾。

第二期は、雄基を起点に豆満江岸に沿って上流方向へと鉄道が敷設されてゆく一九二九年から一九三四年にかけてである。鉄道の延伸にともなう琿春貿易の中継地は下汝坪を離れ、しだいに承良、訓戎、穩城などに分れてゆく。表1は、日本税関下汝坪出張所の対琿春貿易額の推移と「凶們東部線」と称された鉄道の敷設状況とを対置したものである²⁾。鉄道敷設後の琿春の出入口が、慶興、慶源、穩城の三郡にまたがる諸都市であったことがうかがえる。それとともに、豆満江の水運が鉄道輸送にとってかわられていった様子がよく表わされている。さらに、水運にとって最後の頼みといえる木材さえも鉄道に奪われ始めた。表2は、この時期の土里到着木材数

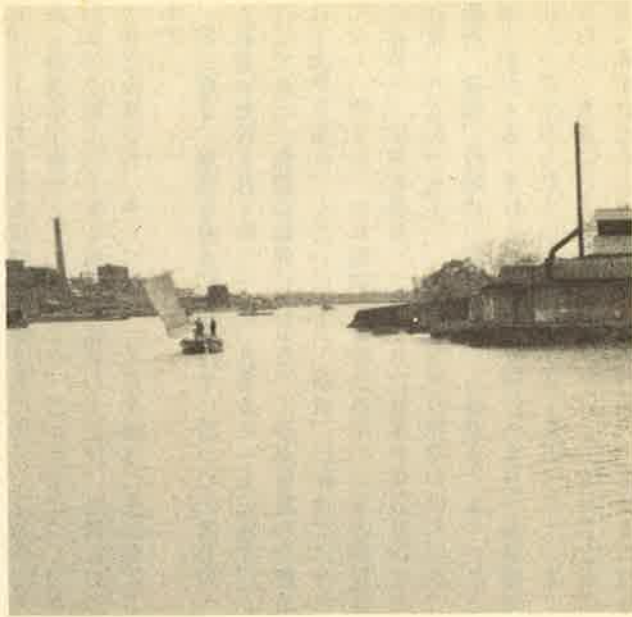
表1 下汝坪の対・春貿易額の推移

年	輸出額 (円)	輸入額 (円)	計 (円)	凶們東部線開通区間
1925	315,088	266,539	581,627	
1926	559,286	670,497	1,229,783	
1927	561,050	856,447	1,417,497	
1928	606,048	786,413	1,392,461	
1929	250,658	279,322	529,980	雄基・新阿山 65km
1930	4,924	7,214	12,138	新阿山・訓戎 39.8km
1931	164	2,011	2,175	訓戎・穩城 24.5km

表2 土里到着木材数量の推移

年	数 (立方尺)	量 (メートル・トン)
1926	1,555,321	38,882
1927	2,116,711	52,918
1928	3,348,992	83,724
1929	2,200,721	55,018
1930	1,562,161	35,054
1931	1,946,501	48,662

備考 (1) 樹種は主として紅松の原木
 (2) 40立方尺を1メートル・トンと換算



量の推移を表わしたものである³⁾。表1に示された下汝坪の衰退ほど顕著ではないが、土里迄の流筏が減少し始めたことは確かである。琿春河からの流筏はいぜん続けられたが、嘎呀河や密江の木材は訓戎で陸揚げされるようになった。訓戎は、かつての下汝坪の繁栄を受け継ぐ

立場となった。冬期の凍結、土里から雄基迄の海上での流失の危険性そして何よりも水量に依存せざるをえない輸送時間の不確実性を考え合わせれば、鉄道が流筏に勝ることは明らかであった⁴⁾。加えて鉄道の割引運賃制の実施は、流筏量の減少に拍車をかけた。訓戎駅では、年間八千トン以上の木材輸送には規定運賃の四五%を割引き、一万二千トンを超えれば半額とした⁵⁾。

第三期は、一九三五年以降である。決定的役割を果たしたのは、訓戎と琿春とを結ぶ一四・五キロメートルの鉄道敷設である。ここに鉄道は琿春河および豆満江下流域の水運と完全に並行することになり、訓戎が琿春の出入口としての地位を占めた。「琿春鐵路股份有限公司」の経営による狭軌鉄道は、一九三四年に敷設工事に着手され、翌年七月に営業が開始された。さらに一〇月には、図們東部線の訓戎駅構内迄延長されて連絡が完成した。一九三七年には「東滿産業鉄道株式会社」の設立、標準軌道への改築、琿春からさらに琿春河に沿って土門子迄の延長敷設が企図された。工事は一九三九年に着工され、訓戎から約七〇キロメートル付近迄が完成した状態で一九四五年八月を迎えた⁶⁾。

注

(1) 豆満江材の輸出については、拙稿「豆満江自由港化論について」(一九九一年一月、本誌第九七号)を参照されたい。

(2) 竹内虎治「豆満江の水運並同流域の木材」(一九三二年一月、『満鉄調査月報』第一二巻第一二二号)、五一頁。

(3) 同上書、五七頁。

(4) 前掲の拙稿を参照されたい。なお当時の琿春河と豆満江を利用した流筏では、琿春から土里迄に五日間を要したといわれる。

(5) 前掲、『満鉄調査月報』、五一頁。

(6) 満史会編『満州開發四十年史(上)』(一九六四年、満州開發四十年史刊行会)、四七八頁。

四、北朝鮮ルートの復活と琿春の開放

戦前、満州と日本との貿易流通路には主として三つのルートが使用された。大連ルート、朝鮮半島を縦貫する安奉ルート¹⁾、そして北朝鮮ルートである。これらのルートは、帝国主義的な日本中心主義のもとに運用された。しかし、今日、中国も北朝鮮も独自の経済発展にとりくんでいる。三つのルートはあらたな考え方で再評価され

活用されなくてはならない。ところが朝鮮半島の南北分断は安奉ルートをも分断し、長い間の日・朝の交流の断絶は北朝鮮ルートをも断つたままである。大連港の負担が過重であるのはむしろ当然である。このままでは、中国東北地方の発展にとって支障をきたすことは明らかである。北朝鮮の自由港と経済特区は、このような現状を自らの発展のためにも見過ごすことがあってはならない。かつて北朝鮮ルートは、大連ルートと比較してきわめて有利な特徴をもつとされていた。すなわち北満州市場を対象とした場合、鉄道輸送距離において大連に勝ることである。長春から大連迄の距離は図們經由清津迄にはほぼ等しい。従って、雄基や羅津は大連よりも近い。北満州の商業流通の中心地ハルビンは、拉濱線²⁾經由ならば北朝鮮三港のいずれの港も大連よりも二〇〇キロメートル前後も近い³⁾。つまり輸送距離のうえからみれば、およそ長春以北と以東全域は大連よりも北朝鮮ルートの背後地であった。今日においても地理的輸送条件に大きな違いはない。そのうえ、鉄道輸送機関がすでに完備されている。北朝鮮の自由港は、大連に勝る条件を備えている。琿春の開放は、北朝鮮ルートのもつ有利性を具体化させるうえで重要な第一歩である。日本海への東北の門戸が開かれたからである。いいかえれば北朝鮮の自由港と

経済特区は、中国東北地方はもとよりモンゴル国との貿易流通さえもになうことが可能である。そして中国もモンゴルも、荷主としても買い手としてもこの貿易ルートに大きな期待をかけている。しかし、もう一つの課題が解決されない限り北朝鮮ルートのあらたな出発は困難である。いうまでもなく日本との貿易流通路、つまり日本海直航路の再開である。この問題は、北朝鮮や中国にとつただけではなく環日本海経済圏の実現をめざすうえにおいても残された課題である。

注

(1) 京釜（京城―釜山）、京義（京城―新義州）の両縦貫鉄道とともに鴨緑江岸の安東（今日の丹東）と奉天（瀋陽）を結ぶ安奉線をも使用するためにこの名称がつけられた。

(2) 図們經由とは別に朝開線經由がある。京図線の朝陽川から龍井村をへて開山屯から豆満江を渡河する路線で、歴史も古く清津にはさらに近い。

(3) 京図線（長春―図們）の拉法とハルビンを結び、ソ連の東支鉄道南部線（ハルビン―長春）の対抗線として敷設された。

(4) 鈴木武雄「『北鮮ルート』論」（京城帝国大学法学会

『朝鮮経済の研究・第三』一九三八年、岩波書店）による。

(5) 小川、小牧編の前掲書によれば、琿春と図們との間に鉄道敷設工事が進められているといわれる。琿春から北朝鮮の三港へは訓戎に渡河する方がはるかに近い。しかし、吉林、長春、牡丹江、ハルビンなどとの連絡や自治州内の流通をも考え合わせればいちがいに非合理的ともいえないだろう。

(6) 戦前の敦賀と清津を結ぶ直航路は、一九二八年に当時の北日本汽船株式会社によって創設され、一九三三年に通信省命令航路となった。直航便は二隻、月六便であった。（にし しげのぶ・本学経済学部卒業生）

(— お知らせ/書評編集委員会スタッフ募集広告 —)



まずは、扉を叩いて下さい…。

(活動内容：編集企画会議、各種テーマの学習討論会、本格的な編集作業etc.)

関西大学生生活協同組合 組織部内『書評』編集委員会
(生協本部3F上る)

TEL (06)387-9998(直通)

おいてけぼり

宮本輝試論 XI

芝田啓治

十、「おいてけぼり」生甲斐を求めて（その二）

(3) 夏目漱石の場合

近年、海外旅行や留学などは日常茶飯事でめずらしくもなければ何でもない。一つの流行といった感がある。通産省がテン・ミリオン計画をたて、一九八七年から五年の間に海外旅行者を一千万人にしようと推進している。実際、正月前後の二週間に何と五〇万人に近い人々が脱出するか。バック旅行や修学旅行、OLの一人旅と世はこぞって海外へ。円高や国際化ブームが一層拍車をかけている。

しかし、明治年間ともなれば少々話しが違う。ましてや選ばれて国費で留学となると、将来を約束された超エリートに与えられたパスポートとも言えよう。

森鷗外は、一八八四年（明治一七年）二二歳の若さでドイツ留学を命ぜられ、意気軒昂として出向いていった姿が想像出来よう。しかし、夏目漱石の場合、それとは少し様相を異にする。彼は、一九〇〇年（明治三三年）三三歳の時、文部省より英国留学を命じられているが、鷗外のようにはいかなかった。

「私は其時留学を断わらうかと思ひました。それは私のやうなものが、何の目的も有たず、外国へ行つたから

と云つて、別に国家の爲に役に立つ訳もなからうと考へたからです。……兎も角も行った方が好からうと云ふので、私も絶対に反抗する理由もないから、命令通り英国へ行きました。然し果せるかな何もする事が無いのです。」(夏目漱石「私の個人主義」)

何故このような相違点が生じるのであろうか。漱石の感じている不安や戸惑いとは一体何なのか。鷗外のようにどうして希望を抱けないのかを考えてみたい。

それは同じ明治とは言つても十数年の違いがあり、又洋行した時の二人の年齢にもかなりの差がある事も事実である。しかし、それだけの理由とはどうしても思えない。そこで漱石の年譜を遡ってみる事にする。

夏目漱石は、大政奉還が成され、王政復古の大号令の発せられた年に生まれている。世は未だ落着かず、江戸で一戦交えるかも知れないといった時期である。

夏目家は、江戸町奉行の支配下にあつた町方名主を務めていたが、当然の事ながら減び行く旧幕府体制側で、時流とは逆らい苦しい立場であつた。ましてや三人の姉四人の兄を持つ漱石の誕生は、手放しの祝福とは縁遠いものであつた。里子に出されたり、養子にやられたりと「おいてけぼり」の人生を歩み始めたのであつた。養子先での家庭不和や養父との後々までのトラブルは、彼の

心を痛め続ける結果となつた事はよく知られているし、「道草」でも一部触れられている。

新しい近代明治の社会を生き抜いていく上で、漱石にとってメリットになる点など何一つなかつたのである。

故郷も出自も彼には味方してくれなかつた。特に、青年期彼にとって家が安らぎの場でなかつたため、この家を避けて自炊を試みたり、精神的独立も欲求として強く沸上がり、そのような中で文学への傾倒が見られたのもこの時期であつた。しかし、第一高等中学校では無理がたたり健康上の理由もあり、屈辱的な留年を味わっている。漱石にとって、この二〇年間は「おいてけぼり」の連続で、ただひたすら耐えなければならぬつらい時期でもあつた。この「おいてけぼり」感を払拭するため学問に打込み、留年以後は卒業までの四年間首席で通した所に、彼の姿勢の一端が窺えよう。又、丁度その頃、彼に大きな影響を与えた正岡子規と邂逅し、一層文学への関心を深めたのであつた。

しかし、この時代は現代とは異なり、文学に対してこれを職業とするにはやはり軽視されており、漱石も踏み切れずにいたのであろう。又、長兄からも文学は職業としては賛成出来ぬとの忠告も受けている。

漱石自身、文学を「人のためにする仕事」ではなく、

「己のためにする仕事」だと分類しているし、留学を迷った時の一つの理由として、「国家の為に役立つ訳もなからう」などといった言葉を残している。これは、「天下・国家のため」といった考えが漱石の根底にもやはり流れていたためであろう。更に、文学は「職業」ではなく「道楽」の範疇に入ると分類しているのである。

漱石がこれらの分類や自己分析を完全に成し終えたのは、迷いに迷い抜いたあげく、文学にこそ、又創作にこそ自分の生きる道があると定めてからの事である。この険しい、がしかし生甲斐とも呼べる道に辿りつくまで、紆余曲折しながら二〇年の歳月を用するのである。

即ち、漱石の人生のうち二〇歳までの二〇年間は「おいてけぼり」の苦悩に陥く二〇年であり、次の二〇年は「おいてけぼり」の第二段階の二〇年である。それは、「おいてけぼり」の傷の癒されるのを待ち、徐々に立上がり、自分の道を生甲斐を必死で追い求める時期でもある。

「私は此世に生れた以上何かしなければならん、と云つて何をして好いか少しも見当が付かない。私は丁度霧の中に閉ぢ込められた孤独の人間のやうに立ち竦んでしまったのです。……所が不幸にして何方の方角を眺めてもぼんやりしてゐるのです。ほうつとしてゐるのです。

恰も囊の中に詰められて出る事の出来ない人のやうな気がするのである。」（夏目漱石「私の個人主義」）

この袋小路の中で、英文学に励み、英国留学を果すのだが、前途は一向に見えて来ないばかりか、一層不安と苛立ちとが増すだけなのであった。「おいてけぼり」の後遺症に悩まされ続けるのであり、精神的にかなり追い込まれてもいる。彼はその解決策、即ち「おいてけぼり」の第三段階への道、産みの苦しみというか新生の甦きを通り抜け、やつとの思いで新天地を目指すのであった。

「此時私は、始めて文学とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作るより外に、私を救ふ途はないのだと悟つたのです。」（同上）

「おいてけぼり」の第三段階に到達した漱石は、二〇年間続けた教員生活に終止符を打ち、不惑の年に遂に真の意味で而立するのであった。

「私はそれから文芸に対する自己の立脚地を堅めるため、堅めるといふより新らしく建設する為に、文芸とは全く縁のない書物を読み始めました。一口でいふと、自己本位といふ四字を漸く考へて、其自己本位を実証する為に科学的な研究やら哲学的の思索に耽り出したのです。」（同上）

「私は此自己本位といふ言葉を手に握つてから大変強

くなりました。彼等何者ぞやと気概が出ました。今迄茫然と自失してゐた私に、此所に立つて、この道から斯う行かなければならない指図をして呉れたものは実に此自我本位の四字なのであります。」(同上)

漱石は、囊を切り裂き、自らを解き放つ有効なる武器として、又我身を守る楯としてこの「自己本位」という四字を高く掲げるのである。時代や出自、故郷や家庭などに迷わされる事のない揺るぎのないそのような自己の主体にかけようとしたのであり、それは彼にとつて信仰に近いものであったのではないだろうか。「おいてけぼり」で受けた様々な傷を癒し、遂に立上がつたのである。

彼は、一〇代から夢に見ていた文学に打ち込んで行くのである。四〇歳で大学に辞表を出し、その後は毎年一作の割合で秀作を創り上げていき、それは彼にとつて眞の生甲斐で有り得たのではないだろうか。今まで塞き止められていたものが、一気に波打って流れ出たのである。やつとの思いで漱石は「囊」を突き破つたのであった。

しかし、人は気付くのである。伝家の宝刀を得て、その切れ味が鋭いものであればある程、もの足り無さを感じるのである。これでいいのかと。本当にこれでいいのかと。

漱石は、又もや行く手を阻まれたのではないだろうか。自己の基盤は強固なものとなつたが、果して次に何処を目指せばよいのか。「心」を書いた頃から、ソトに対する自己という地点から次の段階へと歩み始めるのであった。

「おいてけぼり」の第三段階に入つて行くには、やはり「自己本位」では行き着けないのである。再び、第三段階の入口で立止るのであった。諦念・達観の境地から正しく爽快感漂う地平に達するには、「自己本位」は余りにも人間臭いものではあるまいか。漱石は、そこで「則天去私」の地平を目指すのであった。

彼が「おいてけぼり」の第三段階の入口に辿り着き、次なる目標「則天去私」に向けて歩を進めていた時、又もや病魔が彼を襲つたのであった。眞の生甲斐を見出し、志半ば去つて行く口惜しさを感じずにはいられない。

(しばた けいじ・本学経済学部卒業生)

連

載

都立朝鮮人学校の廃校

—— 在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート

XVI

梁 永 厚



近代日本の百数十年にわたる公教育の歴史のなかには、戦後の一九五〇年代に、一部の朝鮮人学校をまるごと公立の朝鮮人学校にかえて管理運営をしていた事実がある。それはアメリカによる占領時代、在日朝鮮人はまだ日本国籍をもっているときめつけ、その子女に日本の義務教育を課す、という同化教育の復活と、それを拒む在日朝鮮人の自主的な教育運動との妥協に発したものであった。なお妥協を可能にしたのは、被占領時代にやってきたアメリカの第一次教育使節団の勧告により、一九四八年に制定された教育委員会法に基づく各地方自治体の教育委員会が発足していたからだといえる。

あたらしく発足した教育委員会は、戦前の中央集権的で官僚主義的な教育行政を改め、教育基本法の精神を実現する公選制の教育行政機関として、地域の実情や住民の教育要求に基づく教育行政を行うことよって、教育の民主化をすすめる任務と役割を担い、専門的な指導助言をうけるほかは文部大臣の指揮監督をうけないものとされ、地方自治体の首長にたいしても、ある程度の教育財政上の独立した権限をもっていた。

それゆえ一九四九年十月、日本政府の閣議決定による「朝鮮人学校閉鎖措置」の執行後、一部の教育委員会は、政府当局の在日朝鮮人子女にたいする同化教育政策復活といった脈絡のなかで、朝鮮人側と互いに折れ合い独自の決定で公立の朝鮮人学校設置に踏み切ったのである。

公立朝鮮人学校の設置数は、東京都立として一五校（小学校一二、分校一、中学校一、高等学校一）。神奈川県、愛知、大阪、兵庫、岡山などに二〇校（小学校一九、中学校一）、都合三五校にのぼった。そして朝鮮人学校を設置した教育委員会と朝鮮人側が、互いに努めて協調すれば学校を発展させていく途も開けたはずであった。しかし教育委員会側は学校教育法の枠に固執し、朝鮮人側は公立学校移管時に受け入れた条件をなしくずしにくずしていくかたちの対応を続けた。

一方、日本政府は公立の朝鮮人学校が発足してまもなく、内閣委嘱の政令改正諮問委員会を設け、地方教育行政の検討を諮問した。その結果、地方教育行政の中央集権化をはかる答申が一九五一年に出された。そして一九五六年に「地方教育行政の組織および運営に関する法律」が、教育界と世論の強い反対を押しきり、国会に警官を導入して制定され、教育委員会法は廃止となった。かくて教育委員会の名称は同じでも、委員の公選制はなくなり、地方自治体の首長が議会の同意を得て委員を任命する制度に変わり、さらに文部大臣の監督上の権限（「違反調査権」「違反是正命令権」「文部大臣の直接是正措置権」）も復活され、教育委員会法に拠っていたときは根本的に異った教育行政となった。

この教育行政の戦前への逆行過程と並行して、公立朝鮮人学校の廃校措置が強行されていったのである。その経緯を東京都の場合を中心に見ていくことにしよう。東京都教育委員会は、朝鮮人学校管理組合との話し合いの上で、一九四九年二月二〇日に「東京都立朝鮮人学校設置に関する規則」を定め、同時に次の内容の「朝鮮人学校取扱要綱」の枠をはめて、公式に都立朝鮮人学校を設置した。

(1) 朝鮮人子弟は原則として自己の居住地を通学区域とする公立学校に分散入学せしめるのであるが、このさい暫定的な措置として従来から存する各朝鮮人学校の児童、生徒は、その学校を昭和二四年一月二日現在の状況を以て都立学校として運営する各学校に入学せしめる。

(2) 朝鮮語、朝鮮歴史などは課外授業とする。課外授業以外の教育用語は原則として日本語とする。但し、中学校、高等学校においては、朝鮮語は外国語として生徒の選択にまかせる。

(3) 学校長は原則として日本人有資格者をあてる。その他の教員の組織は学校長の意見を徴して編成するが、朝鮮人は教育職員適格審査に適格の判定をうけ、且つ資格を有する者のうち選考のうえ採用する事がある。

この要綱によると、都教育委員会は、公立学校に分散入学させたときの現場の混乱を避けようとする自国民本位の発想から「暫定的措置」、いわば分散入学のための経過措置を前置きしている。そして何んらの投資もせずに朝鮮人学校の管理権を手にいれ、教育内容は学校教育法にもとづくカリキュラム即日本の公教育課程（在日



朝鮮人子女にとっては同化教育の枠をはめ、日本人有資格者の校長と日本人教師による朝鮮人教育を原則とし、朝鮮人教師は課外を担当するごく少数を「選考の上で採用する」という朝鮮人側にとっては、これといったメリツトのないものであった。

それを朝鮮人側が受け入れたのは、同胞子女の集団教育を守ろうとする第一義的要求があつてのことであり、また同化教育の枠を少しづつ外しながら、民族教育の実践を広げようとする朝鮮人教師と生徒たちの強い意志によつたものといえる。

都立としての発足もない一九五〇年四月の朝鮮人

中・高等学校の教員構成は、日本人教諭三〇名、専任講師一名、時間講師一名であり、朝鮮人は専任講師七名、時間講師二六名であった。この構成で中学校生徒一〇〇〇余名、高等学校生徒四〇〇余名の授業を担ったのである。そして少数の朝鮮人専任講師は生徒たちの要求を組織し、それをバックに日本人の校長や教師と確執しながら、朝鮮語、朝鮮歴史、朝鮮地理を正課の授業にもりこませようと努めた。この民族教育的実践の拡大過程は、日本人教師の担当科目や担当時間を圧縮するものとなり、朝鮮人教師は過重な担当時間を負うことになった。さらに日本人教師のなかでは朝鮮人教育の支持派と、教育委員会との要綱固守派といった分化をもたらしつつあった。

都立朝鮮人学校が発足して半年余り経った一九五〇年六月、戦後世界の冷戦構造は局地的な熱い戦争・朝鮮戦争を引き起した。北朝鮮支持の在日朝鮮統一民主戦線(民戦)の傘下にあった都立朝鮮人学校の朝鮮人教師たちは、祖国の戦乱に断腸の想いを抱き、民戦の方針に従って反米反戦の運動にとり組んだ。もちろん児童、生徒たちも動員された。そして体育祭の仮装行列などでは父兄、同胞を祖国防衛闘争に奮い起たせようと、反米、反戦の出し物を登場させ、さらに一九五一年六月の朝鮮戦争勃発一周年に際しては、戦争の平和的解決と原子兵器の使用

に反対するストックホルム・アッピールの署名運動に児童、生徒を動員し、五〇万余名の署名を集めもした。これは世界のいわゆる平和陣営から多大な評価を得た。こうした取りくみは、一九四八年以来、朝鮮人学校の存在を敵視し抑圧してきたGHQと日本政府の心象を一層悪くさせた。したがって朝鮮戦争下の都立朝鮮人学校を治安当局は、反米、反戦の拠点とみなし、日常的監視

とことあらば弾圧を加えようとした。その最たるものとしては、都立朝鮮人高校の一生徒が反戦ピラをもつていたという理由で、一九五一年二月二十八日の早暁、警察予備隊(現自衛隊)を含む警官隊五〇〇名が学校へ踏みこみ、生徒寄宿舎や職員室を搜索し、学年末試験の答案や生徒の作品、作文などを押収する暴圧を加えた。その搜索にたいし抗議をするPTAの集会(約二〇〇〇名参加)が三月七日に開かれた。このときには三〇〇〇名の警官が、学校の周りを囲み、集会後に父母たちが分散して関係当局へ抗議に出向いたのを見はからって、警官隊が学校内へ踏みこみ中学生、高校生に暴圧を加え二百数十名におよぶ重軽傷者をだした。その状況をカメラに収め報道した『サン写真新聞』はGHQより停刊処分をうけた。ところが一九五一年九月、サンフランシスコ講和条約が調印され、翌年四月に条約が発効すると、それまで在

日朝鮮人は、「日本国籍を保有する」としていたのを一方的に外国人に変更し、教育政策においても「就学義務なし」と方針の変化をみせた。それは講和条約の次の条項にちなんでのことであつた。

第二章 第二条

(a) 日本国は、朝鮮の独立を承認して、済州島、巨文島及び鬱陵島を含む朝鮮に対するすべての権利、権限及び請求権を放棄する。

講和条約第二章第二条の規定にもとづく国内法の改正によつて、在日朝鮮人は「日本国籍を離脱する者」と一方的に法的地位を変更された。この変更にもとづいて、日本当局は、それまで在日朝鮮人子女に就学義務を課してきたのを一変させて、こんどは「恩恵」として日本人学校への就学を許可する方針を定めたのである。その方針が公然化するのには、一九五三年の新学期からで同年二月一日、文部省は初等教育長の名でつぎの「朝鮮人の義務教育学校への就学について」という通達を都道府県の各教育委員会へ下した。

一、(イ) 朝鮮人子女の就学については、従来日本の法令が適用され、全て日本人と同様に取扱われて来た。しかるに平和条約の発効以降は、在日朝鮮人は日本

の国籍を有しないことになり、法令の適用については一般の外国人と同様に取扱われることになつた。

(ロ) 従つて就学年令に達した外国人を学令簿に記載する必要はないし就学義務履行の督促という問題も生じない。なお外国人を好意的に公立の義務教育学校に入学させた場合には、義務教育無償の原則は適用されない。

(ハ) しかし朝鮮人については従来からの特別の事情もあるので、さし当り次の様な措置をとる事が適当と考へる。

二、(イ) 日韓友好の精神に基きなるべく便宜を供与する事を旨とすること。

(ロ) 教育委員会は朝鮮人の保護者からその子女を義務教育学校に就学させたい旨の申し出があつた場合には、日本の法令を厳守することを条件として、就学させるべき学校の意見を徴した上で事情の許す限り、なお従来通り入学を許可すること。

この通達を受けた都道府県の各教育委員会は、それ以降の措置を細かく市町村教育委員会宛に指示した。東京都教育委員会の場合は次の如くであつた。

一、学齡簿の調整 市町村は、従来義務教育該当児童に対しては、日本人同様就学義務を施行していたが、

今後は行う必要はないし、学齢簿は調整しなくてよい。

二、現在公立小・中学校及び高等学校に在学中の児童・生徒の取扱いは、その者が学校を卒業するまで是在学させることが出来るがそれは児童生徒の保護者の任意とする。但しその学校の教育方針に従わせること。

三、新に公立小・中学校及び高等学校に入学を希望する者の取り扱い、その学校の設置者において、次の条項により学校長に意見を出して入学を許可して差支えない。

イ、入学後は日本の法律に従って教育を受ける事を承認した者に限る事。

ロ、朝鮮語、地理、歴史等の所謂民族課目は教育しない事を承認した者のみに限ること。

ハ、学校設備に余裕があり、かつ学校の運営に支障が無い事を認定した時。

ニ、入学希望者を入学させて学校の秩序が乱れない事を認定出来る時。

この都教育委員会の指示は、三点目において文部省通達よりも具体的に在日朝鮮人子女の就学の許可、不許可のラインを明らかにしている。そして次のような誓約書

の書式まで示した。

一、入学後は日本の法令に従って教育を受けることを承認します。

二、朝鮮語、朝鮮歴史、朝鮮地理等所謂民族課目は一切教育しないことを承認します。

三、学校の秩序を乱すようなことはしません。
四、学校の管理、経営に支障を来す様な場合退学を命

ぜられても異存ありません。

(大阪市立の一中学校が求めた誓約書の文例は、「下記の者は……中学校に入学を希望しています。入学許可の上は日本国の法律を遵守することは勿論、校則を守り、学校当局に迷惑をかけません。万一学校長において、他の生徒の勉学の邪魔になる行為のあったと認められた場合、退学の申付けがあれば何時でも異議なく、退学させていただきます。いささかの異議も申立てないことを誓います。」であった)。

以上、講和条約の発効にちなむ、一連の通達と指示は日本の教育行政当局が、朝鮮人子女を「煮て食おうが、焼いて食おうが、当局の勝手である」と、朝鮮人側に屈辱を強いる以外のなにもでもなかった。そして次ぎには、公立朝鮮人学校廃校の挙にでたのである。



東京都においては、一九五三年一月八日に都教育委員会が、都立朝鮮人学校PTA連合会代表を呼びだして、次の六項目をつたえて、「もし受けいれなかつたら一九五四年度の学校予算を打ち切る」から、と文書による回答をもとめた。

一、イデオロギー（思想）教育をするな。

二、民族教科を課外にせよ。

三、定員制を守れ。

四、生徒の集団陳情をやめよ。

五、未採用の教員を教壇にたたせるな。

六、教職員以外の者を教職員会議に参加させるな。

この六項目にたいし、朝鮮人側の公式的な考え方は、
（一）「教育基本法に書いてある「良識ある公民に必要な政治的教養をあたえる」を朝鮮の子どもにあてはめて、なにをどういふふうにおしえるべきか、教育をつかさどる当局は公立朝鮮人学校に指示すべきであるのに、過去四年間いちどもそれをやっていない。ただたんに、「イデオロギー教育をするな」では、教育委員会はなんのために存在するのか、わからない。

（二）教育委員会がだした四九年一月二〇日づけの朝鮮人学校とりあつかい要項のなかに、「民族教科は課外でおこなうこと」とあるのを承知しているのだが、学校

長、教職員は、もし民族教科が課外でなされるなら、朝鮮人学校としての存在意義がうすらぐと考えて、正課なみにあつかって来た。朝鮮の子どもたちは、民族教科が正課にあるゆえに、朝鮮人学校にかよっているのである。このことは、教育委員会も承知しているはずであり、また、川崎教育長も朝鮮人教師とはなしあいひのなかで、現状を黙認するといった。

いまになって、あらためていいだすのは、どういうわけかわからない。

(三) 教育委員会は、朝鮮人学校を都立にうつしたときの学級数を定員の規準にして、生徒の自然にふえていくのみとめなれないという態度をとっている。年とともに自然に生徒の数がふえるのは一般的なことであるが、朝鮮人のばあいにはそれだけではない。民族教育への自覚がたかまっていくので、生徒は朝鮮人学校のほうへはいってくる。朝鮮人としての教育をのぞんでくるばあい、ほかでそれが得られないなら、学校としてはことわるわけにはいかない。そのため、やむをえず定員以上の生徒をいれて、とくべつの教員をつかったり、教室をふたつにわたりして、なんとかまにあわせてきた。定員の増加については、教育委員会に再三、再四おねがいましたが、ことわられた。このさい、定員をふやしていただきたい。

(四) 学校の設備があまりにみじめなので、生徒は集団陳情をするのだが、これに腹をたてないで、すくなくとも学校という名にあたいするだけの設備があたえられるべきだろう。

(五) 定員以上の生徒を学校にいられているのだから、教師がたらないのはあたりまえで、それをおぎなうためにPTAが経費をだして教員をやとっている。教員の問題が実情にそってかたづけば、教育委員会がみとめない未採用教員もなくなるだろう。

(六) 教職員以外のもので、教職員会にでる人は、未採用教員とPTAの役員である。PTAがなければ、未採用の教員がいなければ、学校経営がなりたない現状において、必要があれば、これらの人が職員会議にでるのも、やむをえないことである。

などであった。この考えをベースにした上で、都立朝鮮人学校PTA連合会は、一九五四年二月九日に次の文書を教育委員会に提出した。

「われわれは、教育基本法の精神にしたがい、貴委員会の運営する都立朝鮮人学校に子弟をあずけているのであり、六項目のわれわれにたいする提示は、教育基本法、ならびに憲法に違反するとおもうので、これを受諾できない。」

しかし都教育委員会は「このような抽象的な文書では受け付けられない。もつと具体的に出してくるよう」に」と受け付けを拒んだ。その後、何度か両者の話し合いが行われたが平行線でも歩み寄るところとはならなかった。そして三月十五日には、教育委員会から朝鮮人学校PTA連合会へ、「三月二〇日の午後五時までに六項目を受諾しなければ、ただちに廃校にする」と通告してきた。それでPTA側は廃校を避けるために、涙をのんで六項目を受け入れた。すると教育委員会はすかさず九項目にわたる細目を示し、これを認めなかったら新学期の開校は延期する、と追い打ちをかけてきた。

九項目の細目は次の通りであった。

一、昭和二九年四月一二日以降なるべく速かに授業を開始すること

二、児童生徒の定数については次の通りとする

(小学校)

四月一日現在の施設設備に余裕のある範囲内で、予算に影響を及ぼさないことを条件として、増員しても差支えない。

(中学校) 一二二級 一、二二八〇名

但し一年は二五〇名とする

(高等学校) 六学級 六四一名

但し一年は二〇〇名とする

但し、四月一日現在前学年から引続き在学する生徒に限り予算に影響を及ぼさないことを条件として除籍はない。

三、入学者の決定については次の通りとする

イ 東京都内に外人登録をした学齢相当者であること。

ロ 入学志願者が定数を超過した場合は、抽籤等適宜の方法により決定すること。

四、教職員については次の通りとする

イ、教員の定数

専任教員 中 三三名(事務職員を含む)

高 一三名

時間講師 中 二五名

高 五名

ロ、教員として発令されないものは一切教壇に立たせないこと。

ハ、教職員の任免、異動についてはPTAその他に干渉させないこと。

ニ、学級担任は日本人教員を以てあてること。

ホ、教職員の休暇、欠勤、出張等は必ず学校長の許可をうけさせること。



五、教育目標については、次の通りとする

「吾々は朝鮮民主主義人民共和国を守護防衛し在日朝鮮人青少年を祖国に忠誠なる子弟に育成する」等の育成目標を掲げたり、校舎の内外及び諸行事の場合、北鮮旗を掲揚したり、金日成の写真、図画等

を掲げるなど特定のイデオロギー又は政治思想に偏したと認められるような教育はしないこと。

六、教育課程については、次の通りとする

イ、学科目及び教授時数は学習指導要領の基準によること。

ロ、正課は日本人教員が担当し、朝鮮語及び朝鮮語による地理、歴史等の学習は課外とし、その指導は次に示す時間の範囲内で、朝鮮人教員を以てこれに当てる。

小学校 一、二年 週六時間以内

三、四年 〃七 〃

五、六年 〃八 〃

中学校 一、二、三年 〃八 〃

高等学校 一、二、三年 〃十 〃

但し、児童生徒の負担を考慮し、都教育委員会の許可を得て、課外授業時数を正課の授業時数に繰入れて差支えない。

ハ、授業時間割は予め都教育委員会、教育庁と協議の上作成すること。

七、教科用図書の取扱いは次の通りとする

イ、正課に使用する教科用図書は、正規の手続を経て許可されたものであること。

ロ、課外学習に使用する教材は、都教育委員会の承認をうけたものであること。

課外学習以外の教授用語はすべて日本語とすること。

八、職員会議については、次の通りとする

イ、職員会議は学校長が主宰し、教諭及び講師を以て組織する。用務員、作業員及び事務助手その他父兄等教員以外のものは参加させないこと。

ロ、学校長の承認しない職員会議の決定は効力を生じない。

授業時間中は如何なる場合でも児童生徒の集団陳情をさせないこと。

九、次の諸項を遵守すること。

1、校長以外のものを「われらの校長」などというような呼称は一切させないこと。

2、日本の祝日には必ず休業し、所定の休業日以外に許可なく授業を休まないこと。

3、学校におけるすべての行事に、学校長の許可しない部外者は参加させない。

但し、許可した場合でも学校長の指示に従わること。

4、校舎及び学校施設の使用は必ず使用前四八時

間前までに、学校長の許可をうけさせること。

5、校舎内外の掲示物は原則として日本語を用い、朝鮮語を使うときは学校長にその訳文を提出させ許可をうけさせること。

6、児童生徒の自治会等は必ず教員の指導による

ものとし、用語は原則として日本語とすること。

7、授業時間中は学校の主催する行事以外の行事に学校長は許可なく児童生徒を参加させないこと。

授業時間外といえども、学校の名において行事に参加する場合は学校長の許可をうけさせること。

8、学校新聞、学級新聞、自治会機関紙等学校で発行するパンフレット類はその都度学校長の許可をうけさせること。

そして都教育委員会は、四月七日に再度「四月九日の午後五時までに、今後は教育委員会の指示をすべて無条件で従うことを受諾せよ、受諾しないときには廃校にする」という最後通告をしてきた。通告期限の当日には警察の装甲車と警官隊が、東京都教育庁（教育委員会庁舎）の周りを埋め尽くしているなかで、都教育委員会委員長とPTA連合会会長の会見が行われた。教育委員長は「イ

エスカノーだけを聞かしてもらいたい」と求め、PTA代表は、再び一九四九年十月の学校閉鎖のむしかえしになることを避ける一念から、涙ながらに「教育委員会の善意を信じて受諾する」と答えた。同席していた都教育長は、横合いから「善意を信じてとはなんだ、無条件受諾ではないのか」と、いきりたった発言をした。

この受諾のすぐあと、都教育委員会の一課長は、「困った。まさか受諾するとは思わなかったのに。」と思わずつぶやいた。なお同日、東京都立の各朝鮮人学校はものもし警官隊にとりまかれていた。もしPTA側が受諾しないときには、即閉鎖をする態勢をとっていたようである。

さて、都教育委員会の指示を受諾して以後の都立朝鮮人学校には、毎日のように都教育委員会の指導主事がやってきて、指示が守られているかを監視、点検した。とくに中学校の場合、五五〇名の入学者が決っていたのだが、定員制の枠のために再選抜をしなければならなかった。それは民族教育の立場からは困難なことで、五五〇名全員での入学式を挙げることも、正規の授業を行うこともできない事態となった。高等学校も同様な状況であり、他の都立朝鮮人小学校は指示通りに民族教育の縮少へとおいやられた。こうしたさなかの一九五四年八月

六日、大達文相は「朝鮮人学校は廃校にすべきであり、朝鮮人の集団教育は認めない」という談話を発表した。その後をおって都教育委員会は十月五日に、「都立朝鮮人学校は昭和三〇年三月三十一日限りで廃校にする」と、次のような理由でPTA連合会に通告してきたのである。

終戦後在日朝鮮人は朝連学校を設置して、その子弟の教育を進めてきたが、昭和二四年九月八日学校設置者である在日朝鮮人連盟は団体等規正令違反により解散を命ぜられ、そのため各地所在のこれらの学校は閉鎖あるいは廃校となった。東京都においては昭和二四年一〇月二三日の在日朝鮮人子弟教育に関する閣議決定に基づき、都立朝鮮人学校設置運営に関する方針を樹立し、昭和二四年一二月二〇日朝鮮人子弟のみを集団收容して教育する都立朝鮮人小・中・高等学校を設置した。しかしながらこの措置はあくまで占領下という異常な社会情勢下における極めて特殊なしかもやむを得ざる暫定措置であった。

元来都立学校によって外国人のみを收容し、外国人のための特殊教育を行うことは極めて変則であり、講和条約が発効した昭和二七年四月二八日以降は速かに朝鮮人子弟のための特殊教育も朝鮮人の負担と責任とにおいて

行い都立朝鮮人学校は廃止せらるべきであった。講和条約発効後すでに二年有余依然として従前の状態を継続し都民の負担において過去と変らない都立朝鮮人学校を運営することはもはや許されないものといわなければならない。

かえりみるに過去五カ年に涉り、東京都は暫定措置とはいえ、在京朝鮮人子弟の教育のために、特に都立朝鮮人学校を経営し、幾多の批判を受けながらも、これが正常に運営されるようあらゆる努力を続けて今日に至つた。しかるにこの間朝鮮人側の協力が得られず、都立学校として所期の成果をおさめることができなかったことは誠に遺憾とするところである。

以上のような経緯にかんがみ、朝鮮人学校を都立学校として引続き経営することは全く不可能と認めざるを得ない、よつて都立朝鮮人学校は昭和二九年度限りこれを廃止する。

昭和三〇年四月一日以降の在京朝鮮人子弟の教育は朝鮮人自らの手による私立の学校において行われることを期待するものである。

昭和二九年一〇月五日

東京都教育委員会

この通告をうけた朝鮮人側は「朝鮮と日本の国交が開

かれるまで廃校を見合わせて頂きたい」と都教育委員会に陳情をかさねたが、当局からは無視された。それで翌一九五五年二月十日に「教育費は都が負担し、私立学校として続けていく」という提案を出し、同三月一五日に当局側から「学校法人東京朝鮮学園の設立」と「爾後、都立朝鮮人学校に在籍する児童、生徒が卒業するまでの五年間にわたつて、一億二〇〇〇万円の教育費を保障する」という回答を得て、同年四月一日より自主的運営へと移行した。ここで設立をみる私立学校は、当時施行されていた学校教育法第八二条の各種学校で、上級学校および大学の入学資格や、中学、高校、大学の各種競技連盟の加入、通学定期の割引、生活困窮家庭子女の教育扶助費などに制約をうけることになつた。

東京都につづいて、他府県にあつた公立朝鮮人学校も一九六〇年代の初期までに、東京都と同じような条件で廃校され私立化していった。

さて、今回は紙数をオーバーしたこともあつて、都立朝鮮人学校の廃校に至るまでの経緯の紹介にとどめ、かつての公立朝鮮人学校についてのクリティークは、このノートの終章で扱うこととする。

(ヤン ヨンフ・文学部非常勤講師)



ラフォルグの肖像画

連

載

△研究余滴▽ 象徴主義 9

第3章 象徴主義運動

Ⅱ 運動の中の詩人たち

1、ジュール・ラフォオルグ（一八六〇—一八八七）

山村嘉己

前章で紹介した（デカザン）「頹廢」状態の混沌を、J・K・ユイスマンス J. K. Huysmans の『ユカシマ』 A. Rebours（一八八四）ほど明確に写し出しているものはない。魅力的な手記とほとんど読解不能な詩句とをものしている美学者、J・F・デ・ゼッサント Des Esseintes 伯爵がその主人公であるが、かれは自分の理論を創出し、その理論にふさわしい生活をするためにこの世を放棄するものである。《ブルジョワ的、合理主義的、資本主義的フランスから、デ・ゼッサントは逃亡する。彼のつつましいゆ

とりがこの逃亡を容易ならしめる。彼の逃亡は気まぐれや恨みや突然の怨恨の発作などの結果ではない。ひじょうに明確な一種の哲学的理解がこの逃亡を決定するのである。」とA・シュミットもいつている。(『象徴主義』クセジユ文庫) この哲学の基本がショーペンハウエルの厭世主義であることはいうまでもない、頽廢的な世捨て人として、かれは文学や芸術を利用し、《幻影実験室》をつくり、そこではげしい感覚の燃焼にいそしむ、まさに《さかしま》の生活を営むのである。

ジュール・ラフォルグはこの頽廢の精神の実践者として、もつともすぐれた作品を残した詩人といわれている。ただ、かれにはデ・ゼッサントのようにリキユールや麻薬に酔い痴れる人生の余裕はなく、香水や宝石にはほとんど無縁であった。かれはあまりにも貧しく、パリにいることも少なかった。あの「シャ・ノワール」や「イドロバット」などの集団にもそんなに出入りする事はなかった。皮肉と洗面はかれのもつとも好んだ飯面である。かれは一八六〇年、モンテヴィデオで生まれ、後にピレネに近いタルブで学校生活を送った。父はじめ教員であったが、後に銀行の職員となっている。十人に近い兄弟があったようで、しかも母を早くなくしている。かれの家庭生活がどんなであったかは想像に難くない。

さらにパリに移住し、フォンターヌ中学(後のコンドルセ)に入るが、結局、バカロレアに失敗し、文学的な生活に入り、シャルル・クロス、ギュスターブ・カーンなどと知ることになる。その他、日・ペールによれば(『象徴主義文学』クセジユ文庫)、ポール・ブルジェ(『現代心理論叢』(一八八三、八五)で当時の文学者、思想家を詳細に分析)や、シャルル・エフリッッシュ(当時の美術収集家)も友人であったという。かれが思想的にもつとも影響を受けたのは、ショーペンハウエルではなくて、ハルトマンであった。かれの『無意識の哲学』(二八九)は七七年には仏訳されていたことはすでに述べたが、《無意識は絶対の一形式である》とし、その無意識のなかに人間の未来への絶望をくみとり、世界は存続するなごという考えは妄想に過ぎないと諭すハルトマンのペシミスムは、やがて、ラフォルグに『地球のすすり泣き』(死後に友人の手によって一九〇一に発行、しかし作品は初期のものが多い)などの佳篇を生ませるのである。

——そりゃあ眞まことの生活もしてはみたいさ、
だがね、理想といふものは、あまり漠ぼろとしてゐる。

——そこが理想なんだ、理想の理想たる所だ。

訳が解るくらいなら、別の名がつく。

——しかし、何事も不確な世の中だ。哲学また哲学、生れたり、刺違へたり、まるで筋のが立ってゐない。

——さうさ、眞とは生きるといふんだもの、絶対なんざあ、たつ瀬があるまい。

* * *

(「月の出前の対話」 上田敏訳)

一八八一年から八六年にかけてベルリンで職を得ていたがその間八五年、『嘆きぶし』を發行し、八六年『ノートルダム・ラ・リュヌの模倣』をつづいて發表した。かれの作品は、その後、友人の手によって出された『最終詩篇集』(一九〇〇)や散文集も含めて、當時はそんなに大きな評価は得なかった。この問題については後ほどふれたい。ベルリン時代に知った英国女性リー・Leah Leeと結婚もしたが、すでにかれを冒した。妻リーも間をおかず、同じ病でこの世を去ったという。

2

《孤独な人間》、かれはいつもそうであった。タルブの中学でも、ドイツの女帝の宮廷のなかでもいつもそうであったと、G・ミシヨールもいつている。《おれのなかでは二つの疑問が闘っていた。人生への愛と人生への悔蔑とが》といったのは、レミ・ド・グールモンである。かれは《自分の行為を大げさにとったり、自分自身に欺かれることを望まなかった》(ルーシオン) そのかれの偏愛するイメージはハムレット、それも剣を持たない憂愁



「日曜日」の原稿

Brouillon de « Dimanches », pièce XLIV des « Fleurs de bonne volonté ».

の王子であった。「日曜日」という詩はつぎのような傍題を附して始まっている。

ハムレット お前に娘があるか。

ポロニアス はい、王子様

ハムレット その娘に表を歩かせてはならぬ。みごもるのはよいことだが、お前の娘がそうなるようではのう。

あてなく天から雨がふる。何に感じたというのでなく、雨が降る。羊飼の娘よ。河の上に……

河は天主のお休みで眠っている。
上手にも、下の方にも、はしけ一つ動いていない。

夕べの鐘が、街の上に、なりわたる。
河岸には人っ子ひとりいず 牧歌も聞こえてこない。

塾生たちが通りすぎる（ああ何としおつたれた姿）。
何人かはもう冬のマフをつけているというのに。

マフも持たず、毛皮も持たぬ一人の娘。

灰色づくめの、何とも哀れな姿をして、

ああ、列を離れた。あの娘、

そして、走る！ 大変だ。いったい何が起つたのか？

それで、その娘。河に身を投げる。

船頭もいなけりや、救助犬も見当らぬ。

夕やみが訪れる。小さな揚場に灯がともる。
灯がともる。（もつとも、よくある書割だ。）

雨は降りつづき、河面をぬらす。

あてなく、天から雨がふる。何に感じたというのでなく。

この詩にはまだ少いが、かれの作り出す言葉は雑多であり、《哲学用語辞典や、専門用語辞典や、伊達好みの特殊な言葉や、パリのよた者たちの隠語や、年齢の低い子どもたちのつまりがちな言葉づかいなどから広く語を借り受ける。》（シュミット、前掲書）また、韻律についてもアレクサンドランを巧みに細かく区切って料理してみせたり無音のeを独特に操ったり、民謡や、弔い歌、婚札歌などのリズムを控え目にもじってみたりする。その

意味で『嘆きぶし』という詩集の題は象徴的である。そして、かれのこの嘆きぶしがただの戯れ唄にならないのはかれの誠実さのゆえだ、かれはピエロにもなるが、そのピエロはウエルレーヌのそれとちがつて月のようによろやかで沈んでいる（『形式上学的ピエロ』（A・シモンズ）である。

またまた一冊の本が出た。ああノスタルジーだ。

あまりにもがさつな人々を離れ、

挨拶や、お金などの面倒もなく、

つまらぬおしゃべりから離れてみたい。

また一人悲しみのピエロが死んだ。

慢性孤独病にかかって死んだ。

見てくれはよくなかったが、心には、

月の光のような心意気があった。

神々はもういないのだ、あるのは猪の頭ばかり、

ああ、世の中は日々々々悪くなって行く、

ほとくの時間は終わった。これからは引き下り、

「絶対的な安楽界」を目ざすだけ。

（ピエロの言葉） VII

3

「目的もなく証人もなく、永遠の天空を束の間さまよう無益な惑星の苦しみを凝視すること。あらゆるものの無用性、不完全、むなしさ、万有の現実、こういうものを感じること。幻影を望み……時に沈思、その瞬間にも地球上で叫んでいるあらゆる苦痛を想像力を働かして切実に思い描くこと。何も知らず、何も出来ないことに諦めを見出そう、……そして我々の惑星のかけらうのむなしさを意識し、流れ寄せ流れ去る無数の星くずの、荘重な、普通の、永遠な、そして心を持たぬ狂奔を熟視することによって、諦めに到達しよう。」

このようなヴィジョンをもって、（悩んで疑ってそして虚無にたどりつく一八八〇年の一パリジャンの物語を日記を、しかも、日没、セーヌ河、驟雨、油ぎった鋪石などパリを背景にして……生だ、気がおかしい、宇宙論的大風呂敷だ、グロテスクだ、等々といわれることを恐れず、手のこんだ現代的芸術家の言葉をもって）生み出そうとしたと、マルチノはラフォオルグ自身の言葉を巧みに使ったかれの意図を説明しているが（『高踏派と象徴主義』）、つぎにあげる「冬が来る」（『最終詩篇集』）は、



Dessins de Jules Laforgue pour « La Complainte de l'oubli des morts ».

その出色の例の一つであろう。これは八十四行とあまりにも長く、ここで全編を引くことは難かしいが、この詩があつてこそ（頽廢）の真髓が残されたのだと解説する人の数は多い。

感情の封鎖だ！ 中近東行の郵船だ……

ああ、雨が降る！ ああ日が暮れる。

ああ、風が吹く！……

万聖節が来て、ノエルが来て、そして新年だ。

ああ、霧雨の中に、ぼくのすべての煙突が……

それも、工場の……

もう腰を掛けることはできない。ベンチがみんな濡れているので。

いいかい、来年まではもうどうにもならぬ。

それほど、どのベンチも濡れていて、木がぼろぼろ、

そして、とんとん、とんとんと角笛は鳴ってしまつた

のだ。……

ああ、海峡の彼方から駆けてくる雲よ！

お前たちのおかけでぼくたちの前の日曜はまるつぶれだった。

霧雨が降っている。

ぬれそぼった木立ちのなかで、くもの巢が、
滴にたわみ、とうとうこわれてしまった。

豊年祭で、黄金のバクトロス河の働きの

全権委員だった太陽よ

お前たちはどこへ隠れてしまったのか？

今宵は、しおつたれた夕陽が丘の上に泊っている。

金雀花のなかで、マントをかぶって横たわっている。

まるで居酒屋にはきちらした痰のように白っぽい太陽
だ。

黄色い金雀花の敷藁の上で、

秋の黄色い金雀花の。

そして角笛が太陽に呼びかけている！

帰って来いよ……

自分にもどれよ！

タイオーノ タイオーノ アラリと。

おお、悲しい繰り言だ。やめてくれ！……

そういつては角笛は、また、はしやぎ廻る！……

一方、太陽は丘に寝て、首からむしりとったリンパ腺

のようだ。

それは慄えている、ひとりぼっちで……

さあ、さあ、アラリ

やって来るのはおなじみの「冬」だ。

ああ、大きな街道の曲り角という曲り角には、

通りすぎる「赤頭巾」ちゃんの姿も見えず……

ああ、先月の荷車のわだちが

ドンキホーテ風の道をつけて

算を乱す雲のパトロールの方へ昇って行く。

その雲を風が大西洋のかなたの故郷へと追いつ立てる

……

スピードをあげよう、さらにあげよう。この度は、お

なじみの季節が来たのだから。

(……四〇行まで……)

原文を提示できないので残念であるが、ここにはすでに
にふれている多くの大胆な韻律の分解とオノマトベの使用
による冒険的な音の組合せが、俗語や単語の多用と相
まって独特な不協和音をかもし出している。まさに《神
経の芸術》(A・シモンズ)であろう。

4

ハムレットを気取ったり、自らをピエロに擬したこと
からも推測されるように、ラフォルグにとって《女性》



モリゾ「舞踏会の少女」

は最大の《問題^{プロブレム}》であった。母を早く失い、妹にやさしい愛情を注いだかれは、単純に女性の愛を欲する男性であった。《いくら美しいことをつらねたとしても、つまりは嘆きに立ちもどる、愛し愛されたいとの。》《『やさしい死んだ女への嘆きぶし』とうたうかれはほんとうは一度出会った女性の、たとえわずかな匂いでも、それを熱情を込めて夢のように永続させようとするよう

な若ものだった。しかし、神経質なかれの《無意識》はいつも女性の計算を、あるいは冷酷な視線を敏感に感じとる。女性の身振りや声や歩きぶりや匂いなどがかれにとりついて離れないが、それでも女性とうまく合わないのは女性側に問題があるのではないか。ショーペンハウエルの哲学がかれをとりこにし、かれのなかには《女性ぎらい》が顔をあらわす。むしろ《永遠の女性》のイメ

「ジが、かれの眼前にいる平凡な女性たちを信じがたいものにするといつてもいい、シュミットもいつているように〔象徴主義〕クセジユ文庫」、ラフォオルグにとつて、「敵は実利的なブルジョワではなくて〔女〕なのである。……〔女〕は生きる意志を体現しており、この世にただひとつしか目的を持っていない。つまり、生命を生み、悪しき生をなからえさせる目的しか持っていないのだから。」

女？

——おれはそこから生れて来てる。

魂の中に、

死を抱いて……。

本当を云へば、方角ちがひの二人が一番よく愛し合ふ事が出来るのだ。

* * *

〔最後の一つ手前の言葉〕堀口大学訳

かれの自然な愛への率直な傾きと、禁欲的なばかりの自己制御とは、そのままラフォオルグの全生涯、全作品を通じての基本的な姿勢であった。〔頽廢〕派のなかでか

れを一際目立たせるのはその一点であろう。しかし、同時代においても、現代においても、ラフォオルグがフランスの読者の人気を易々と手に入れたということはない。H・ペールが指摘するように〔象徴主義文学〕クセジユ文庫)、かれらはいつてもセンチメンタルで、「冗談や冷やかしを言う詩は気に入らない、かれらの心の琴線を逆なでするからである。ラフォオルグを認めた人はアメリカ人エズラ・パウンドであり、イギリス人で後にアメリカ人となったT・S・エリオットであった。パウンドは「読者が何を考えるべきかを示唆する」ことを敢えて行つたのだと讃え、エリオットはかれのなかに「感性と倫理のある一つの姿勢、体系」を発見したといっている。ペールの結びの言葉は印象的である。

〔ラフォオルグは同国人にとつては相変らずの小詩人だったが、あらゆる点からみて、ちょうど英語の読者からほたいして評価されないエドガー・ポーがヨーロッパに与えたと等しい影響をフランス国外に与えた。〔デカダンス〕つまり墮落、終焉、涸渇とみなされたものは、またしても驚くほど実り多いものだったわけである。〕

(やまむら よしみ・文学部フランス文学科教員)

連

載

日本中国ことばの来往ゆきぎ

その45

旧漢字・簡体字 カキにせめぐ

芝田 稔

前号の「漢字統一へのアドバルーン」の中で「海峡兩岸書同文促進会」という漢字文化研究グループが、漢字の統一を促進することによって、ゆくゆくは中国・台湾の接近統一を図ろうとする動きを開始したことを伝えたのであるが、この促進会の主要メンバーである「漢字文化派」^①が作製した教育テレビ映画「神奇的漢字」(「不思議な漢字」以下「映画」と略称す)をめぐって、いま

北京では中国文字学者、国語学者や文教界の上層部で、いよいよその見解が対立し「漢字文化派」と「文字改革派」^②との間に熱い論争が始まっている。

もともとその切っ掛けをつくったのは、いうまでもな

く「漢字文化派」が作製した「映画」にあるわけだが、今年一月二五日に「国家語言文字工作委员会文字応用管理司」が北京師範大学で開催した、映画鑑賞後の座談会において聴取した専門家の「映画」に対する意見(「神奇的漢字」專家座談会紀要^③ II 以下「紀要」と略称)がその敵矢となったのである。

この座談会には北京大学をはじめ中国社会科学院語言研究所、南開大学(天津)、中国人民大学、北京師範大学、北京師範学院、中央民族学院の専門家や教授ら二〇余名で、中国文字学会会長裘錫圭、北京語言学会会長張志公らも参加している。

これより先、昨年十月二三日には北京で「映画」の試写会が催されていた。これには各界から百余人が参加し、多くの専門家や文教関係の指導者らが、この「映画」を支持し、激励したと「漢字文化派」は報じていた。

中央宣伝部副部長徐惟誠：「映画は豊富な資料を用いて漢字の歴史的由来を述べ、長期にわたる中国文化形成の過程で漢字が果たした役割を鮮明にし、また漢字の芸術性を明示し、特に現代の科学技術の発展における漢字の今日的役割をも明らかに示している。またこれは国内大衆はもとより世界の人びとにも中華文化を理解してもらい、殊に漢字の役割が大きかったことを理解してもらえらるることであろう」

文字学者胡厚宣もまた：「漢字は中国古代文明の一つの目じるしであり、且つ今日まで四、五千年にわたる引き続き使用されている世界唯一の文字である。この映画は広泛なる大衆に対し伝統文化の愛国主義教育を行う上で、大へんよいことである、と私は考える」また「人民日報・海外版」は一月一日から一五日まで「映画」の解説記事を連載したのであった。

さらに「中国テレビ新聞」は一月二六日から三日間「映画」を連日放映する予告まで発表したのであった。ところが放映当日の二六日、中央テレビ局は事前に何

の説明もなく、いきなりその放映時間帯を海外の風景写真で埋めてしまったのである。

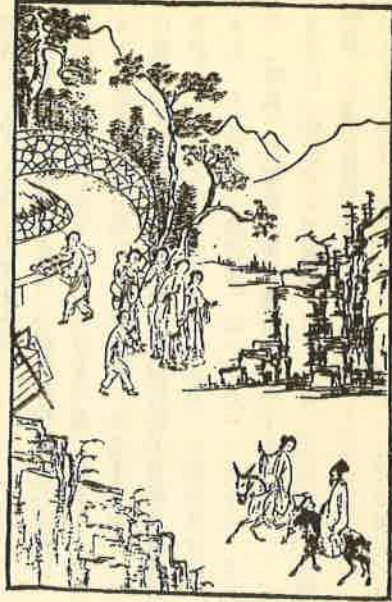
「映画」を待ち構えていた専門家や教師、学生たち、殊にビデオ録画の準備までしていた機関の人たちの不満が爆発し、問い合わせの電話が中央テレビ局に殺到したことはいうまでもない。そこで判明したことは「国家語言文字工作委员会」の別の指導者が「文字改革派」の意見を取り入れて、書簡を中央テレビ局に送り、放映反対を申し入れたからであった、ということである。

「映画」に対する「紀要」の見解

まず国家語言文字工作委员会弁公室（事務局）が「漢字文化」編集部に送ったという「紀要」の内容を明らかにしておこう。

これは次の五項目から成っており、最後に五つの提案を行っている。その要点を述べよう。

(一)「映画」は漢字の効能や役割を誇大視し、理論的根拠が薄弱であり、政治的影響が良ろしくない。その第一は、漢字を神秘化し、トートেম化していることである。この「映画」はまず「中国は広大であり、不思議な事がいくらかでもある。……しかし、その中で最も奥深くして測り難く、不思議と変化が多いのは神秘的な漢字である」「常用字三千は、生きた神秘的な文字であり、積木であり、



ルービック・キューブである」と解説する。また「作家の韓素音は、常に不思議な漢字から大切な創作靈感を得ている」等というのである。これに対して天津語言学会名誉会長邢公畹は：「この映画の解説は総括して印象を述べれば、中国名勝を説明する下手なガイドブックであり、或る人の寝言を聞いているようで、見ているうちにますますわけが分からなくなってくる」と手厳しく批判する。

第二は漢字の歴史的功績を誇張し過ぎる。「映画」は：「漢字は中国において終始中華統一の構成要素と成つて来たし、比類のない凝集力を發揮し中華民族を永久

に分離させないのである」という。これに対し人民大学語言文字研究所長胡瑞昌らは：「漢字を国家統一の唯一の原因としているが、これは奇怪な見解である」と反駁し、また文字文学者北京大学教授蘇培成は：「中華民族は多民族の聚合体であり、幾十の少数民族は漢字を使用していない。どうして漢字によって一つに凝集しているといえるだろうか？」

第三、「映画」は大漢字主義、大漢族主義および文化的ショープニズムを大いに宣伝し、漢字は「自尊、自信、自立、自強の民族精神を増強する」役割を果たしているとし「王朝が更迭しても漢字は消滅することはなかった。ジンクスカンやヌルハチの子孫が天下に君臨すること数百年に及んだが、その宮殿の正面には漢字の扁額が高くかがげられ、壮大な紫禁城を見下している」などと解説する。

これに対し文法学者張志公らは：「このような宣伝はわが国のイメージを損ない、外国の友人や国内少数民族の感情を害するもので、民族の団結を進めていく上で不利である」と批判する。

(二)「映画」が示す多くの結論は科学的でなく、また事実に符合していない。「漢字は中華民族文化の根源である」「漢字は科学的、学び易く、智能的、国際的で、

優美な上品な文字である」という考えで貫いているが、どの結論も一方的で大いに検討の余地がある。

また漢字の効用として外国で行われた漢字教育の例をあげて、漢字は智能指数を高め、読書力では日本の仮名の十倍、ローマ字の二四倍も速いと述べているが、それらの測定方法も時間、地点および被測定者児童の年齢、人数、識字の有無等は一切述べていないので説得力に乏しい。

また漢字は「明確簡潔」であり閲読の面で「一目十行」の奇跡まで産むことを強調する。この見解は認められるとしても、映画の製作者は言語学・文字学の基本常識に欠け、常に言語と文字の関係を同列に論じ、したがって非科学的であり、多くの常識的な誤りを犯している。

『映画』はコンピュータへの漢字のインプリント速度が、毎分平均二百字から最高四百五〇字までに達しており、印欧文字のインプリント速度を遙かに抜いていると述べているが、北京大学教授蘇培成らによると、これは無責任な宣伝であり、実際には漢字のコンピュータへのインプリント速度は、表音文字に比べて遙かに及ばないのである。また『映画』は漢字の表音化はラテン化につながり「漢字文化の席をラテン文化に譲らせようとするものだ」と曲解している。

(三) 文字改革の成果を否定しているが「普通話」(共通語)の普及は憲法に規定されているし、「漢字簡化方案」は国務院から公布された。「漢語表音方案」は全国人民代表大会で採択され、国連でもこれを用いて中国人名、地名を表記することが批准され、いまや世界公認の字母となっている。

『映画』は「識繁写簡」を主張しているが実質は繁体字を復活することであり、これは現行国家の言語文字政策に対する防害以外にはない。もしもこれを認めるとすれば、それこそ数十年來の文字改革の成果は、一朝にして崩れ去るのである。

(四) 『映画』は文字改革に携わった人びとを嘲笑する一方、言語文字の専門家でない「著名な専門家」たちを宣伝に使っているので、商業広告の臭いが濃厚である。

(五) 『映画』は数人の教授の指摘によれば、版權所有機関の同意を得ず、無断で多くのシーンを資料として利用している。また映画の最後に「国家教育委員会に感謝する」との字句が見えるが、この映画製作に当って教育委員会事務局は一切何の相談も受けていない。依ってこの字句は正当なものではない。削除すべきである。

『紀要』は以上の五項にわたって『映画』の不当性を批判した後、次の五点を提言している。

(一) 中央は新たに言語文字活動班を結成し協調と計画の案配によって重大決議を策定することを具申する。

(二) 各級の指導者、とくに重要責任を負っている指導幹部は、国家の言語・文字活動の方針、政策をよく理解し、随時随意に態度表明を行つてはならない。

(三) 言語文字活動強化の宣伝工作は、中央と地方がその歩調を一致させ、全社会に広範な学習活動を展開し、国家当面の言語文字活動方針、政策等を周知徹底させる。

(四) 関係部門では民間言語文字学術団体の指導と管理を強加し、国家の既定方針と政策に違背しない情況の下に、学術研究と交流活動をよりよく展開させる。

(五) あらゆる力量を集中して全面的、科学的で正確な漢字紹介の教育テレビ映画を作製すること。その完成以前に在つては中央テレビ教育館監修作製になる『漢字』を暫時放映すること。

以上『紀要』の『映画』に対する批判の内容と今後の対策について、その要点を紹介したのであるが、一方『映画』側も『紀要』に対し六項目に分けて真向から挑戦の態度をとつてゐるのである。

『紀要』に答える『漢字文化』

『漢字文化』の編集部は、『紀要』の作者に答える“という形をとり、『言語文字活動は実践を堅持してこそ真理

を検証する決め手である」と題し、『紀要』を参照し、討議した結果、『紀要』はわずか一時間ほどの『映画』に対し、『文化ショービニズム』『大漢族主義』『大漢字主義』『愛国に非らず』『国粹主義』『国内各民族の団結に重大な影響を与える』『外国の友人や国内の少数民族の感性を害する』『文字改革の成果を歪曲し、否定する』『新時代の言語文字方針政策を妨害する』等十数種の罪名をつけたと断じ、『映画』が毒草であるか否かは人民大衆が実践によって決めることである。故に敢えて『紀要』の全文を公にし、『紀要』の作者が『映画』の放映を極力禁止しようとしている封鎖措置と抑圧手段を取り入れないことにした、とその冒頭で述べている。これは、『漢字文化派』が、わが道を強行する意志の強さを表出したものとして注目されるのである。

したがって『紀要』の『映画』批判に対する反批判は当然のことであり、その大要は前節で述べたので、再度触れる無駄を省く。ただ真向からでなく些か斜めに取り組んでゐると思われる点を取り上げて、尚歩み寄りの余地のあるところに触れてみることにする。

その一、『映画』の主題は、漢字および漢字文化を讃えることである、したがって、全ての文字改革事業について論評していないし、また論評することもできない”



と述べているところである。

その二、「漢字落後論」を否定し「漢字廢除論」を否定し「漢字のラテン化」を否定するのは先人の実績から見ても正しいことである旨主張している点である。

この二点から容易に感得できることは、いずれの場合も中国近現代の言語文字政策と深い関連があることだ。

漢字は中国語音、語義を表出する文字である以上、漢字をその他の文字で表出するのは至難の業である。だがアヘン戦争後、特に日清戦争後の西方科学の吸収と自立自強、さらには民主と科学による救国思想への発展は、一方では中国の近代化を促進することになった。

中でも漢字について考えると、いわゆる「漢字三難」

——読みにくい、書きにくい、覚えにくいことが、教育不振の原因であることに気付き、これを如何にして克服するかが当初の緊急課題であった。注音字母が考案されたのもそのためだし、ラテン文字化も試みられたこともあったが、ここ数十年の試行錯誤の結果「漢語表音字母」が制定されたのであって、これが漢字に替る文字である、とは誰もまだ信じていないはずである。なるほど七〇年代までは往々にして先き走りする傾向もなくはなかったが、八〇年代に入ってから、漢字をなくしてローマ字化する等の考えはすでに消滅したものと理解してよい。それを今日も尚疑心暗鬼でいるのは腑に落ちない点である。

また漢字の三難は、漢字の簡略化によって或程度解消されたことを認めねばなるまい。もともと簡略化も曾ての第二草案のように行き過ぎて、一部創案者の恣意に牛耳られると乱れてしまう。これが廃棄されたことは良かった。一九五五年一月「漢字簡化方案草案説明」が発表されてからでも三七年になる。とすれば現在四〇才以下の人は全て簡体字で教育を受けた人たちであり、「映画」が主張するように、この人たちにさらに旧漢字を学べというのは、古典研究者や書家を除いては酷であり、現実

性の無い考えであり、実用性に乏しいのである。

こう考えてくると、双方の対立も文字改革の歴史的事実、生活上の実用性、漢字の有する芸術性等多角度から慎重により深く論議を尽すことが必要である。是非そうあって欲しいのである。

ただ一つ気掛りであるのは、文教行政面での最高機関の中に両派が存在し、一方が「映画」を支持激励すれば、他方はこれを批判する立場に立ってその放映を差し止めたことである。「映画」を「中国の名勝」として放映するには、そのガイドさんの説明が余りにも「下手くそ」だといふのであれば、「紀要」が提言しているように「全面的、科学的で正確な漢字紹介のテレビ教育映画」を早急に作製して、その優劣を公の場で競うことであろう。と同時にまず最高機関内の意志の統一を図られることこそ肝要である、と考えるのである。

注：

① 北京国際漢字研究会のメンバーを指す。会長袁曉園、副会長徐徳江、名誉会長錢偉長、趙樸初、安子介、周祖謨、顧問胡厚生、啓功、許嘉璐らを指導者とする繁体字を重視する古文学者のグループで「漢字文化」を中心に二二世紀に向け漢字漢語の威力を発揮さすべく

活動している。

② これはテレビ用芸術映画で、北京国際漢字研究会、江西師範大学、江西テレビ局の製作に成り、責任者は副会長徐徳江、邱尚仁、顧問には趙樸初、錢偉長、安子介、袁曉園、張友漁、周祖謨、胡厚生、ら十一名。解説文章は約六千九百字で、第一集は漢字の歴史的回顧、第二集は智慧の光、第三集は美の旋律、第四集は未来に向けて、の四集から成っている。テーマは「漢字は中華民族文化の根源である」ことに絞る。「この映画は中国人の志気を高揚する立派な映画である」とも評されている。

③ 五四文化運動以来文字改革を推進して来た先人たちの偉業を継承し、特に四九年以降文字改革に直接携わって、漢字簡略化の策定、共通語の制定、漢語表音字母の制定等に尽力した人々たちを指す。

④ 『漢字文化』九二年第二期所載の附録『神奇的漢字』專家座談會紀要（約六千五百字）

⑤ この試写会は一九九一年十月二三日北京国際漢字研究会（会長袁曉園）が北京釣魚台國賓館で開催されたもので袁会長の開会挨拶、中央宣伝部常務副部長徐惟誠、中共江西省委副書記劉方仁、著名な文字学者胡厚宣らの挨拶があり、香港の安子介、北京大學教授周祖

謨、北京師範大学教授許嘉璐より祝電あり。参加者は国家および北京市の指導幹部、専門家、知名人、テレビ・新聞の報道関係者ら百四〇余名。この映画は広州音像出版社から発行されている。

⑥ 『映画』の解説文は「日本の学者によると幼児に對し五才から漢字を教えると智能指数は一一五に達し、四才から漢字教育をすると一二五、三才からでは一三〇に達する。このような例は枚挙に暇がない。漢字の發明者である故郷において、われわれが漢字はむずかしい、漢字は遅れている、科学的でないなどといえるだろうか？」また「森本哲郎は漢字の情報量はとても奇妙であり、それ自体が一種の集成回路になっている」と青年たちに教えている。「日本の幼児国語教育会名誉会長石井助は「川崎」という二字を例にあげ、これを読むのに漢字は日本の仮名に比べて一〇倍速く、口一マ字に比べて二四倍も速い」——この三例をあげている。

⑦ 『映画』側の説明によると、「これは大陸の青少年が繁体字を学んで覚えること、また台湾や海外華僑が簡体字を覚え、簡体字で文章を書くことを希望している」のであって、「この提案は党の基本路線に合致するものであり、国家現行の言語文字政策と完全に合致する

ものである」（以上『漢字文化』九二年第二期）『紀要』の作者に答える”より」としている。

⑧ 版權所有機関は中央テレビ教育館であり、著作権は瀋陽市テレビ教育館に属し、監督、張崗勤が作製した映画『漢字』である。この部分シーンが無断使用されているとの指摘である（『漢字文化』九二年第二期所載附録『紀要』より）

（しばた みのもる・元文学部教員）

■ 短評 ■

最新日本語読本

(新潮社/定価 780円)



今年の夏は就職のための面接をいやというほど受けたのだが、なかなか表現したいことが相手である面接官のおじさんに伝わらなくてひたすら汗をかいた。もうそうなつてくると、会社のデータや待遇の研究よりも、「他者」に自分の思いをいかにわかるように伝達するかだけを考えるようになる。

個人的に行きついた結論は、考えていることをひたすら「言語化」することだった。そこでは、「こんな感じ」だとか「ああいったニュアンスの」といった感覚的なやりとりは完全に排除して、頭に思い描いてからそれをひとつひとつ言語にしてい

く作業を強いられた。そんなの当たり前やんか、とまたまたおじさんたちに怒られそうだが、かえりみると私達の会話はいつの間にか「感覚的」に話されているのではないだろうか。おまけに本来ま

がった使い方の日本語であっても、ニュアンスさえわかればOKで知らず知らずのうちに話し言葉も書き言葉もそれが慣用化されてしまう。

「最新日本語読本」はあらゆる場面面で使われる日本語を検証していて興味深い。文学の言葉、政治の言葉、新聞の言葉、辞典の言葉、恋愛の言葉、ワープロの言葉等々。私達が日々営んでいる生活の中でかくも様々な言葉が無意識に使われ、乱用されているのがわかる。

巻頭の大岡信氏の「日本語状況」分析は読んでいて身につまされる思いがした。たとえば、人の呼び方ひとつとつてみても、現代の言葉の揺らぎがわかる。最近、職場などで相手を「ーさん」というふう

に役職名で呼ばない動きがあるが、そこどれ程の敬意が込められるかなど、人間関係を示す言葉がじつに曖昧で不安定であるかが指摘されている。

もう一つ、言葉に関して重要な影響力を持っていると思われるのは新聞やテレビなどのマス・メディアであろう。テレビのバラエティ番組に象徴される「馬鹿っぽい言葉」はそれが芸人の手にある時までが許容範囲であって、私達の日常会話にまで頻繁に使われ出し、「一億総芸人」になりだすと客観的に見ていて気持ちが悪いくらい。

書き言葉の「ランボー」者はスポーツ新聞や写真週刊誌に違いない。これらの類の見出しは時々いやおうがなしに目に飛び込んでくるが、見るたびに驚かされる。分かりやすさを通り越せば、下品なまでの語呂合わせや軽薄きわまりない無残さだけが残るのである。最近では三大新聞紙までがそういう悪趣味な傾向にあると思うのだがいかがなものだろうか。

政治家の言葉も日々わかりづらく

なってきた。例の金丸信氏の五億円献金問題の背景だけ見ても、「ノーコメント」「誠に遺憾です」などの言葉が平然と乱用されていて、「またか」と思ったはず。この「またか」が問題で、彼ら政治家が発言する「ノーコメント」の無意味性を目をつぶってしまいかねない。一国を代表する政治家が金で政治を腐敗させたうえに、言葉をも腐らせていることに憤りを覚える。

以上が現代日本語の危険な方向だとすれば、その反面で面白い状況も生まれてきつつある。たとえば、『ピートたけしの『だから私は嫌われる』（新潮社）は抑制の利いた切れ味のよい口述体がうけてヒットした。新たな言文一致運動の兆候さえ思わせるその読みやすさの背景には、書き手と読み手の距離を格段に押し縮めたということが隠されている。高橋源一郎によれば、「言文一致が完

成してようやく、作家は「内面」を手にいれることができる」とらしい。「内面」イコール「言わんとすること」をストレートかつ瞬時に読み手に伝えることができることに気づいた若干の作家たちが、最近統々と口述体の小説を書いている。ただ、一歩間違うとマンガになってしまいうのが――。

日本語は実に難しいが、それでいて他国語にはない味わい深い表現が可能なのも日本語の特質である。やたらな乱用や誤用は避けたいものだ。本書は日常の言葉を総点検する意味で、またひとつひとつの言葉がもつ内容をさらに豊かなものにするためにも価値のある読本である。

(法4・三田 曉彦)

■短評■

ゲイ・リポート 同性愛者は公言する

動くゲイとレズビアン会(OCCUR)編
(飛鳥新社/定価 1,900円)



もし、異性を好きなたが、ある朝突然目を覚ますと、「同性を愛することが当然」の社会になっていたらどうするか? どこをどう見回しても、同性愛者、ゲイとレズビアンしかない。異性愛者は自分だけらしい。妹が言う。「お兄ちゃん、ここんとこの人からひんぱんに電話があるけど、まさか女の人が好きなんじゃないでしょうね。イヤだからね」。どの本を開いても、『異性愛はイケナイことです』と書いてある。僕は病気ののだろうか。「普通に」御飯も食べるし、テレビも見ると、テニスもする。でも、女の子が好きなんだ。理由なんてわからないけど、大多数の同性愛者の中で、僕は「異端者」の同性愛者なのであって、これは誰にも言ってはいけない秘密なんだ……。

現在の社会は、ゲイ、レズビアン

を許容しない。「異端者」のレッテルを貼り、暗く、マイナスのイメージを植え付けて来た。時には迫害の対象となり、多くのゲイ、レズビアンは、自分の事を前向きに認める事なく日々を送っていた。過去形で書いたからといって、今のその状況が変っているのか、と言えば、変っていない。

例えば、「ゲイIIエイズ」という図式はかなり一般的である。もちろん、これは間違いである。極端に言えば、セックスをする人なら誰でもエイズに感染する可能性はある。なのに、そこは捨象され、ゲイに対する偏見と差別だけが残っている。

そして多くのゲイ、レズビアン達は、自分のセクシュアリティを肯定することができず、自分を隠し、おびえながら生きている。

一九八六年三月に結成されたOCCUR(アカカー・動くゲイとレズ

「ピアン(の会)」は、「私たちは、自ら
が同性愛者であることを偽らずに生
きて行きたいと望んでいます」(ア
カー規約前文より)と、声をあげた。
一九九〇年二月に起きた「(東京
都)府中青年の家使用拒否事件」と
いう同性愛者に対する差別事件は、
アカーによって現在東京地裁で裁判
が闘われている。この裁判は、いか
にゲイが、いや少数者が日本で生き
にくいかを如実に表している。国家
権力の対応もそうだが、大多数の私
達の意識もゲイを追いつめているの
ではないか。

本書「ゲイ・リポート」は、アカ
ーの編集した、三百人のゲイによる
声の集まりである。そこに居るのは、
「普通の」男性であり、共通してい
るのは「男性が好き」ということだ
けで、各々が自分なりの生活を抱え
ている。

しかし、「へー、ゲイの人って「普

通」なんだ」と素通りするほど、簡
単なテーマではない。カミング・ア
ウトとは、自分が同性愛者であるこ
とを公言することだが、それが、彼
らにとつて、どれだけの勇気を要す
のか、想像を絶するのではないだ
ろうか。

本書以外でもカミング・アウトの
文章を読んだことがあるが、何度読
んでも心臓をつかまれた気がする。

「僕を、私を、認めてほしい」と
いう思いが、痛いほど私に伝わつて
くるからだ。どれだけ、自分自身と、
自分の周りに真剣に対峙しているか
が伝わって来るからだ。

「じゃあ、私はどうした、えるのか」
を、私は未だにもちえていない。自
分では、同性愛者に差別的ではない、
と思つているが、それだけなのだ。
おそらく私の隣人として、存在し
ている同性愛者が、同性愛者である
ことを公言できないでいる社会が、

今あるのだ。それを「私は差別的で
はない」と思つているだけで変えて
いくことができるだろうか？

社会が変わるといふことは、私達
が変わる、ということだ。

アカーを始めとした同性愛者達、
被差別者達の行動を、「彼らは頑張
つている」と考えるだけでは何にも
ならない。

自分が今まで持つてきた、持たさ
れてきた差別観を認め、変革するこ
とが、「私が変わる」ことなのだ。
自分が変わることは、大変な作業だ。
何も考えなくてすむ、安住の地から
抜け出すことなのだから。

ただ私は、差別のない社会が必要
だと思つたら、変わりたいと思つて
いるし、被差別者と向きあい、共に
結びあつて闘つていきたいと思つて
いる。

(社会学部四回生 山本 亮)

《書評》 バックナンバー ■ 総目次 ■

第一号(一九六五・十) 第九十九号(一九九二・四)

助)

第一号

(一九六五・十・十五) B4・2頁

「書評」発刊にあたって……関西大学協書籍部書評編集委生協取扱「新刊書」

【書評】ドイッチャー「毛沢東主義」……

武谷(一経三)

旗田巍「元寇」……小川 悟(独文)

第二号

(一九六五・十一・十) B4・2頁

対話の断絶の止揚——自己の思想の確立を……書評編集委生協取扱「新刊書」よく売れた本・読まれた本

【書評】金哲「韓国の人口と経済」……市

原亮平(経)

ヘンリー・ジェイムズ「智恵の樹」……

小西愛之助(経済政治研究所)

クロード・エドモンド・マニー「現代

フランス小説史」……重本利一(弘文

第三号

(一九六六・二・十一) B4・2頁

書籍部推薦図書／よく売れた本・読まれた本

【書評】柴田高好「政治学の課題と政治思

想」……田島克巳

植田逸雄「異端宣言」……大貫照一

清水義弘「現代日本の教育」……植松

健郎(独文)

第四号

(一九六六・七・一) B4・4頁

「書評」の合同発行に当って……関大・経大生協書籍部合同編集委現場からの報告

——教科書一元化闘争の問題点……生協書

籍部企業からの資本構成是正、その背景と

性格問題点……浜本泰(大阪経済大学)

危機に立つ大学制度——自主性にもとづく

解決を——(大学設置基準改善要綱の問題点)……友松芳郎(文)

【書評】篠崎五六「小繋事件の農民たち」

……石川ひろし

堀 健三「ソ連経済と利潤、社会主義経

済の方向」……上島 武(大阪経済大学)

第五号

(一九六八・五・二十九) B4・2頁

「書評」復刊宣言——組織部「書評」編集委員会

【書評】ヴァルター・ベンヤミン「複製技

術時代の芸術」……小川 悟(文)

佐伯彰一「文学的アメリカ」……田村

民夫(文三)

【隨筆】すれ違った人々①……小野 勇(文)

第六号

(一九六八・七・五) B4・2頁

【書評】阿部二郎「三太郎の日記」……小

山仁示 (文)
コレドール「カザルスとの対話」下程
息 (文)

第七号

(一九六八・十・四) B4・2頁

状況と現代マルクス主義——ロシア・マルクス主義と「ドイツ・イデオロギーの周辺」……市原亮平 (経)

【書評】ウイリアム・モリス「ユートピアだより」……杉原四郎 (経)

C・H・シンガー「科学思想のあゆみ」……島尾永康 (文)

【新刊紹介】「ゲバラ日記」朝日新聞社・みずず書房

第八号

(一九六八・十一・十二) B4・2頁

〈未来社〉注文制に踏み切る——企業防衛方法として——

【書評】内田芳明「ウェーバー社会学の基礎研究」……石尾芳久 (法)

H・マルクーゼ「エロスの文明」……八木俊樹 (京都大学病生)

【新刊紹介】「講座・日本資本主義発達史

論「日本評論社」/「ルカーチ著作集」(全13巻)白水社/「国境を越える革命」レポルト社

第九号

(一九六八・十二・九) B4・2頁

編集者への手紙……内田芳明(神奈川大学)

【書評】羽仁五郎「都市の倫理」……庵谷寿男(生協職員)
福田恒恒存「解つてたまるか?」……名取榮史(文)

第十号

(一九六九・五) B5・25頁

新しい地平への出発……組織部「書評」編集委員会

特集・学園闘争とわれわれ……編集局
◆全共闘バリケードを構築せよ……滝田修(京大全共闘)

◆自己否定の倫理……花房勝治
一九一八年二月革命……西ドイツSDS(ファーストウン) 誌大学闘争の発言——

雑誌と単行本——
【書評】日大全共闘編「バリケードに賭けた青春」……中村宏一(文三)

日大文理共闘編「叛逆のバリケード」……S
日本共産党中央委員会出版局「当面する大学問題」……三位田耕(大阪労働者学園)

第十一号

(一九七〇・一) B5・24頁

「機械文明」の終末について……組織部「書評」編集委員会69僕たちの意識の周辺——出版の傾向と思想状況——……編集委手記 No11-3 (……)

告発された者の自己弁明……ひとりの高校教師

【書評】結城光太郎「ゲバルトの論理と抵抗権」(ジュリスト)「法とは何か」……山根 暉(法学ゼミナール会員)

【新刊・旧刊】F・ファノン「革命の社会学」みずず書房/庄司 薫「赤頭巾ちゃん気をつけて」中央公論社……山下 則子(千里高校)/江夏美千穂「国際資本戦と日本」岩波新書……庵谷寿男(生協職員)/鎌倉 昇「経済生活を動かすもの」講談社……庵谷寿男(生協職員)

職員

編集後記……編集委員会

第十二号

(一九七〇・十・十五) B5・24頁

世界転換期のドイツ・マルクス主義……久松俊一

大正デモクラシーへの胎動……小山仁示(文)

【書評】飛鳥井雅道「幸徳秋水」……小林良彰(同志社大学)

河野健二・飯沼二郎編「世界資本主義の歴史構造」……荒井政治(経)

滝村隆一「革命とコンヒューン」……林一

【私の研究ノートから】古代のなぞに挑む I……網干善教(文)

手記——死への郷愁——……小田原修次
巻頭言／編集後記／書籍サークルの活動報告

第十三号

(一九七〇・六) B5・20頁

いわゆる「マイホーム主義」について
【書評】有坂隆道編「日本洋学史の研究」……鳥尾水康(社)

星野芳郎編「日本の技術者」……原田二郎(現代技術史研)

E・J・キング編「社会主義の教育」……海老原治善(文)

【私の研究ノートから】古代の謎に挑むII ……網干善教(文)

巻頭言／編集後記

第十四号

(一九七〇・十) B5・23頁

仮りの姿と真なる風景との出会いへ
◆私の親た風景II映画表現……篠田正浩

◆〈表現の美学〉形成について……川桐信彦
マルクス主義の再検討について……下程息(文)

「思考の原理」の確立を——人間疎外恐慌の展開期……力石定一(法政大)

【書評】丸山松幸「五・四運動」……はやし はじめ／中国近代史関係出版文献

目録

【私の研究ノートから】古代の謎に挑むIII ……網干善教(文)

巻頭言——文化についての断章——／編集後記

第十五号

(一九七〇・十一) B5・28頁

沖繩——72返還——と公・災害型コンピナートの進出……末吉栄三(三)

おきなわ・沖繩・オキナワの旅……沢井良政(関大公害研究会)

【書評】坂本慶一「マルクス主義とユートピア」……川崎一郎

梅本克巳「唯物史観と現代」……隅田一
黒田寛一「毛沢東神話の崩壊」……久礼勉(社二)

高島善哉「民族と階級」……林一

【私の研究ノートから】古代の謎に挑むIV ……網干善教(文)

巻頭言(国家論)に関する断章——／沖繩関係出版文献目録「書評」バックナンバー・掲載論文一覧

第十六号

(一九七一一・二) B5・23頁

ロシアの革命運動と革命思想関係から……松岡保(経)／ロシア革命運動思想関係図書一覧

公害調査からの告発——水島コンピナート

の実態から——… 沢井良政 (工学部公書
を粉砕する会)

宇野経済学の歴史的意義と限界 (上)……
はやしはじめ (国際共産主義運動研究会)

【講演記録】唯物史観と経済学……佐藤金
三郎 (大阪市大経)

【私の研究ノートから】古代の謎に挑むⅤ
……網干善教 (文)

巻頭言——(反近代) が透視するもの—
／編集後記

第十七号

(一九七二・十) A5・33頁

共同性と天皇制——大正期における近代化
の意味——… 米村喜久男 K・コルシュ
「革命スペインの経済と政治」 「スペインで
の集産化」 (リヴィング・マルクシズム誌
より)——野村修訳

【書評】永山則夫「無知の涙」……福岡信孝
ルイ・アルチュセール「甦るマルクス」
……渡辺幸博 (文)

【私の研究ノートから】古代の謎に挑むⅥ
……網干善教 (文)

巻頭言——主体と歴史——／編集後記

第十八号

(一九七二・四) B5・26頁

百済救援の船旅……吉永登 (文)
青春時代の読書——知的彷徨のすすめ——
……横田健一 (文)

【書評】板倉聖宣「科学と仮説」……鈴木
祥蔵 (文)

内なる海——C・ウィルソンの新実存
主義から……上村哲彦 (京都女子大)

【私の研究ノートから】古代史の謎に挑む
Ⅶ……網干善教 (文)

【投稿】障害者会報の基本的視点……関大
障害者解放委員会再刊に寄せる……小
川悟 (文)

巻頭言——(生きる) ということ——／編
集後記

第十九号

(一九七二・五) B5・26頁

【書評】ジョン・レノン「ビートルズ革命」
◆私はビートルズを信じない……上村
哲彦 (京都女子大文)／◆ビートルズ
世代の果たした役割……久礼勉 (社四)

高野悦子「二十歳の原点」……角野康

郎 (経)

イダ・メット／レオン・トロツキー

「クロンシュタット叛乱」……松岡保
(経)

【自著を語る】「親魏倭人王」——中国人が
書いた魏志倭人伝——… 大庭脩
(文)

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史
の一面I……増田涉 (文)

◆古代史の謎に挑むⅧ……網干善教
(文)

◆差別の空間構造I……末吉栄三 (工)

巻頭言——仮寝の夢——… 小川悟／編
集後記

第二十号

(一九七二・六) B5・28頁

【書評】永山則夫「人民を忘れたカナリア
たち」……福岡信孝 (哲四)

比嘉春潮・崎浜秀明編訳「沖縄の犯科
帳」……石尾芳久 (法)

東峰夫「オキナワの少年」
◆表現しきれない「悪」……小山富雄
(経三)／◆帰ろうよ、うちなあんちゅ
……末吉栄三 (工)

白夜の旅人——五木寛之の世界——
……大坪信善(社三)

【私の研究ノートから】◆古代史の謎に挑むⅩ……網干善教(文)

◆日中文化関係史の一面Ⅱ……増田涉(文)

◆洋魂和才のことⅠ……市原亮平

巻頭言——怨念・沖繩——……末吉栄三ノ編集後記

第二十一号

(一九七二・九) B5・26頁

【講演記録】経済学批判と弁証法——とマルクス——(上)……細見英(経)

【書評】ロナルド・ヒングリー「ニヒリスム」……陸井四郎(神戸大)

高橋和巳の二短編より……小川富雄(経三)

金史作品集——人と作品——Ⅰ……田所信吉(文四)

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史の一面Ⅲ……増田涉(文)

◆台湾ノート二章……市原亮平(経)

巻頭言——自転車経済——……西岡孝男

第二十二号

(一九七二・十) B5・38頁

【特別寄稿】素顔の詩人 田木繁……下程息(文)

(資料) 田中角栄「日本列島改造論」……小谷節男(社)

【書評】N・ヴァレンチノフ「知られざるレーニン」……阿武洋子(工四)

フォルスターと書斎……上道功

【私の研究ノートから】◆私の口論ノートⅠ……市原亮平(経)

◆日中文化関係史の一面Ⅳ……増田涉(文)

◆ヘーゲル詣でⅠ……中埜肇(文)

◆「総有地」と「庶民」……矢口孝次郎(経)

巻頭言——日中有効——……奥村郁三法ノ編集後記

第二十三号

(一九七二・十一) B5・22頁

【書評】カミュ「幸福な死」……熊谷周子(社四)

金史良作品集——人と作品——Ⅱ……

田所信吉

多田道太郎「しぐさの日本文化」……

川野英明

【私の研究ノートから】◆ヘーゲル詣でⅡ……中埜肇(文)

◆私の人口論ノートⅡ……市原亮平(経)

◆日中文化関係史の一面Ⅴ……増田涉(文)

巻頭言——ニーチェとウエーバー——石尾芳久(法)ノ編集後記

第二十四号

(一九七二・十二) B5・19頁

【書評】マリオ・ブツォー「ゴッドファーザー」……末吉栄三(工助手)

谷川健一「常民への照射」……河口純一郎(社四)

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史の一面Ⅵ……増田涉(文)

◆ヘーゲル詣でⅢ……中埜肇(文)

巻頭言——新重農主義への接近——……市原亮平(経)ノ編集後記

第二十五号

(一九七三・一) B5・19頁

【書評】有吉佐和子「恍惚の人」……竹内千代(大学院生)

金鶴泳断章——在日朝鮮人のこと——

……山園勝(商三)

大谷民郎「ニッポン釜ヶ崎」……当脇雅恵(文四)

【私の研究ノートから】

◆日中文化関係史の一面Ⅷ……増田 渉(文)

◆ヘーゲル詣でⅣ……中埜 肇(文)

卷頭言——実証すること——網干善教(文)

／編集後記

第二十六号

(一九七三・四) B5・27頁

【特別寄稿】飛鳥の四季……高橋三知雄(法)

【書評】山本三郎「しいのみ学園」……大杉栄一(文)

フランツ・ショーナウアー「第三帝国のドイツ文学」……山村嘉巳(文)

【私の研究ノートから】

◆差別の空間構造Ⅱ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅲ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅳ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅴ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅵ……末吉栄三(工)

第二十七号

(一九七三・五) B5・35頁

【書評】佐藤友之「死に急ぐ若者たち」

◆青年の死生観……横田健一(文)

◆自殺へのアプローチ……杉野栄智(社四)

◆最早はまで……竹内千代(院生)

高野悦子「二十歳の原点」……田嶋麟一(47法卒)

【投稿】青木健「内なる中原中也」……川野英明(43法卒)

【私の研究ノートから】

◆ヘーゲル詣でⅥ……中埜 肇(文)

◆日中文化関係史の一面Ⅸ……増田 渉(文)

◆差別の空間構造Ⅶ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

第二十八号

(一九七三・六) B5・43頁

【書評】石原吉郎「望郷と海」

◆生きるということの二つの意味……植月美作雄(社四)

◆そこにあるものはそこにそうしてあるのだ……上村哲彦(京都女子大文)

大岡昇平「野火」

◆弱きもの、汝の名は?……市川陽一(社四)

◆したたかに生きること……小山仁示(文)

【特別寄稿】佐藤友之「死に急ぐ若者たち」

……多田敏行(大工大)

倉石武四郎「中国語五十年」……上野 恵司(文)

ソルジェニーツィン・ノート(上)……松岡保(経)

【投稿】松田道雄「ロシア革命」……善峰 輝明(法四)

【私の研究ノートから】

◆日中文化関係史の一面Ⅹ……増田 渉(文)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

羅針盤——極限状況での人間——久野収
特集号について／読者の声／書物の案内／
編集後記／バックナンバー

第二十九号

(一九七三・九) B5・44頁

【書評】牧英正「人身売買」

◆「家」から生まれる芸娼妓……藤田
道代(院生)

◆条件付・期限付の人身売買……福尾
猛市郎(文)

細井和喜蔵「女工哀史」……北川勝彦
(院生)

樋口一葉「にぎりえ」……菱田裕子(社
四)

【特別寄稿】森鷗外「高瀬舟」……堀泰生
(社四)

ソルジェニーツィンノート(下)……松
岡保(経)

【投稿】全ては終わりから始まる——ポオ
についてのひとりごと——殺木一
郎(明治大文四)

児童文学の復興——赤い鳥の考察——
……小比賀和彦(社三)

【私の研究ノートから】◆ヘーゲル詣でⅦ

……中埜肇(文)

◆差別の空間構造Ⅴ……末吉栄三(工)

◆日中文化関係史の一面Ⅺ……増田
涉(文)

羅針盤——人身売買——書物の案内／読
者の声／ヘーゲル詣で順路／編集後記

第三十号

(一九七三・十) B5・51頁

【講演記録】市民の復権……久野収

【特別寄稿】サミズダート——地下出版物
——松岡保(経)

「五四」事件——その運動の自発性——
……増田涉(文)

知られざる久野収の一面……落合祥堯

【投稿】久野収・鶴見俊輔「現代日本の
思想」……明定義人(社三)

久野収「憲法の論理」……小代誠一郎
(法二)

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史
の一面Ⅻ……増田涉(文)

◆トウハチエフスキ事件の謎Ⅰ……
平井友義(法)

羅針盤——抵抗的自己——読者の声／書
物の案内／編集後記

第三十一号

(一九七三・十一) A5・57頁

【書評】W・ライヒ「ファシズムの大衆心理」

◆「性・エネルギー経済論」とファシ
ズムの構造……望月浅巳(社三)

◆ライヒの社会学論……泉久人(京
都教育大三)

D・گران「褐色のベスト」……小川
悟(文)

【投稿】W・ライヒ「性と文化の革命」
——性の肯定と新しい社会——……小
代誠一郎(法二)

【映評】「奇妙な果実」——ビリー・ホリア
イの自伝——……小川まち子(関西学
院大四)

【私の研究ノートから】◆トウハチエフス
キー事件の謎Ⅱ……平井友義(法教授)

◆日中文化関係史の一面ⅫⅢ……増田
涉(文)

羅針盤——ファシズムと人間／読者の声／
書物の案内／編集後記

第三十二号

(一九七三・十二) A5・88頁

【書評】エムリッピ「カフカ論」……植松健郎(文)

A・カミュ「シーシュポスの神話」

……市川陽一(社四) J・P・サルトル

◆「存在と無」を中心として……中村良夫(文四)

◆「嘔吐」を中心として……伊久美一義(文二)

◆「シチュアシオン」を中心として……渡辺幸博(文)

C・ウィルソン「アウトサイダーを超えて」……曾和信一(社四)

【映評】「独裁者」——チャップリン体験——……大坪信善(社四)

【私の研究ノートから】◆戦後日本企業の特許戦略史概説Ⅰ……堀康三(大学院生)

◆トゥハチエフスキー事件の謎Ⅲ……平井友義(法)

◆日中文化関係史の一面Ⅳ……増田渉(文)

◆差別の空間構造Ⅵ……末吉栄三(工)

羅針盤——「実存主義」とその変化——／書物の案内／読者の声／編集後記

第三十三号

(一九七四・一) A5・81頁

【書評】五十嵐良雄「大学・単位・教師」……松本豊(法一)

……松本豊(法一)

リングス「第五の壁テレビ」

◆環境テレビ考察……西村進(社四)

◆テレビの功罪……宅間逸朗(社三)

【特別寄稿】◆テレビ報道と視聴者の現実認識……田宮武(社)

◆新聞——その流質と流速について……足立利雄(社)

【私の研究ノートから】◆トゥハチエフスキー事件の謎Ⅵ……平井友義(法)

◆差別の空間構造Ⅶ……末吉栄三(工)

◆日中文化関係史の一面Ⅳ……増田渉(文)

◆戦後日本企業の特許戦略史概説Ⅱ……堀康三(大学院生)

羅針盤——環境と人間——／書物の案内／読者の声／昭和四十八年度総括／編集後記

第三十四号

(一九七四・四) A5・67頁

【書評】ポール・ニザン「九月のクロニク

ル」……河本康夫(大阪工業大学)

小山仁示「田湖豊吉議会演説集Ⅰ」

……木坂順一郎(竜谷大法)

【評論】◆北村透谷小論……田中孝夫(48社卒)

◆私の中の宮澤賢治……村上順一(大工大四)

【特別寄稿】ビートルズと対抗文化——感覚革命について——……中晶三(社教授)

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史の一面Ⅵ……増田渉(文)

◆差別の空間構造Ⅷ……末吉栄三(工)

◆戦後の日本企業の特許戦略史概説Ⅲ……堀康三(大学院生)

巻頭言——日常生活の再確認——／読者の声／書物の案内／編集後記

第三十五号

(一九七四・五) A5・55頁

【書評】ロラン・バルト「神話作用」……山村嘉己(文)

津村喬「メディアの政治」……田宮武(社)

栗津潔「デザインにながでできるか」

……上島直志(文四)

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史

の一面Ⅷ……増田 渉(文)

◆差別的空間構造Ⅹ……末吉構造(工)

◆戦後日本企業の特許戦略史概説Ⅳ

……堀 康三(大学院生)

羅針盤——日常生活批判の課題——/読者の
声/書物の案内/編集後記

第三十六号

(一九七四・六) A5・60頁

【書評】田中義久「私生活主義批判」……

森田啓嗣(大学院生)

A・ミッチーリヒ「父親なき社会」

……浅田良純(文四)

岡田米雄「農民志願」……東井正美(経)

【特別寄稿】ゲマインデの原点を求めて

……神谷国弘(社)

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史

の一面Ⅷ……増田 渉(中国文学者)

◆戦後日本企業の特許戦略史概説Ⅴ

……堀 康三(大学院生)

羅針盤——家族・共同体——/読者の声/
書物の案内/グラビア/編集後記

第三十七号

(一九七四・九) A5・71頁

【書評】ニーチェ「ツアラトウストラはか

く語りき」……岡松秀牧(大学院生)

ヒンクリー「ニヒリスト」……高瀬嘉

弘(社二)

角間隆「燃えるアメリカ」……本村亜

紀子(社二)

小山仁示「戦前・昭和期 大阪の公害

問題資料集」

溝辺敬一(大阪大助教授)

山口和男「ドイツ社会思想史研究」

……善峰輝明(49法卒)

【評論】坂口安吾私論……大峰雅之(経四)

【私の研究ノートから】◆戦後日本企業の特許戦略史概説……堀 康三(大学院生)

◆日中文化関係史の一面Ⅷ……増田

渉(中国文学者)

羅針盤——価値観の崩壊——/書物の案内/
バックナンバー/編集後記

第三十八号

(一九七四・十) A5・71頁

【評論】◆優生保護法とその改悪……本

久仁子(文三)

◆高橋和巳試論……三宅 卓(大工大

四)

◆協同組合論確立に向けての試論……

川崎 聡(大工大)

【翻訳】樊亢・宋則行・池元吉・郭昊新・

朱克煊「主要資本主義国家経済簡史

(一)」……訳者・林 信賢(文四)

【書評】ルイ・アルチュセール「政治と歴

史」……渡辺幸博(文)

森崎和江「闘いとエロス」……矢里泰

代(大学院生)

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史

の一面Ⅷ……増田 渉(中国文学者)

新たな書評運動への提言——文化・思

想運動の発展のために……書評編集委

員会事務局

書物の案内/「書評」の内容を充実させよ

う/編集後記

第三十九号

(一九七五・一) A5・95頁

【講演記録】日本人と朝鮮人との連帯につ

いて——金石範

【評論】 ◆朝鮮情勢の視点……金貞文

◆金石範あるいは済州島(上)……末吉 栄三(工)

◆金石範氏の二、三の作品にふれて……小川 悟(文)

【書評】 ビエール・エマニュエル「ボードレール」……渡辺幸博(文)

浦永昌吉「数の体系」……山田 穰(大工大)

【私の研究ノートから】 ◆差別の空間構造(最終回)……末吉栄三(工)

◆ランボー研究余滴Ⅰ……山村嘉己(文)

◆日中文化関係史の一面Ⅺ……増田 涉(中国文学者)

羅針盤——金石範講演会の意義と今後の課題——/書物の案内/書評編集委員会七四年度活動の総括/編集後記

第四十号

(一九七五・四) B5・49頁

【特集】 新しい〈大学像〉を求めて

◆結果から根拠への序章——「大学院大学」構想批判1……中原裕二(社四)

◆大学の歴史と現在——日本の現状の

要因……宗孝文(文)

◆大学蘇生の要件——いまひとつの大 学論……橋本昭一(経)

【評論】 ◆認真看書学習(まじめに本を読 んで学習しよう)——中国の学習運動 ……鳥井克之(文)

◆やすみしわが大王……高橋三知雄 (法)

【書評】 足立正生「映画への戦略」……山 本 暁

菅原行「天王論ノート」……大原紀夫

【私の研究ノートから】 ◆日中文化関係史 の一面Ⅻ……増田 涉(中国文学者)

◆ランボー研究余滴Ⅱ……山村嘉己(文)

羅針盤——新しい〈大学像〉を求めて——/編集後記

第四十一号

(一九七五・五) B5・41頁

【特集】 〈読書〉への招待

◆私の推せん図書と読書への提言—— 教官アンケート——

◆推薦図書評「マルクス主義と現代」 「スロシエンコ作品集」 「スヴェンボル

の対話」 「毛澤東思想萬歳」 「韓国から の通信」

魯迅の道——文学による抵抗の位相……泉 文雄(大学院卒)

【評論】 ◆結果から根拠への序章——「大 学院大学」構想批判2……中原裕二(社 四)

◆やすみしわが大王Ⅱ……高橋三知雄 (法)

【私の研究ノートから】 ◆日中文化関係史 の一面Ⅼ……増田 涉(中国文学者)

◆ランボー研究余滴Ⅲ……山村嘉己(文)

連載予告・対談シリーズ第一回/堀江壮一 氏に聞く……林 賢治

羅針盤——〈読書〉への招待——/編集後記

第四十二号

(一九七五・九) B5・64頁

【講演記録】 ◆水平社五〇年の歴史……土 方 鉄(作家)

◆一人の沖繩人として今何を考えるか ……末吉栄三(工)

【評論】 ◆結果から根拠への長征——「大 学院大学」構想批判3……松本 昶(経

四)

◆ やすみしわが大王Ⅲ……高橋三知雄
(法)

【書評】山本晴義「若きマルクスとその批判者たち」……中村和彦(大工)

関沢紀「鹿島からの報告」……大原紀夫(社三)

【連載・対談シリーズ(1)】堀江壮一氏と語る
No 1 労働者の町・大阪での生い立ち

……堀江壮一/林賢治

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史の一面Ⅳ……増田渉(中国文学者)

◆ランボー研究余滴Ⅳ……山村嘉己
(文)

羅針盤/新刊案内/編集後記

第四十三号

(二九七六・五) B 5・72頁

【特別寄稿】「戦後」の朝・日関係を語る

……高峻石

【連続講演記録】◆刑法改正の諸問題……

中義勝(法)

◆環境問題への基礎視角……沢井裕

(法)

【評論】◆「障害者」解放への視点……山崎久美子(51社卒)

◆さまざまの古代学……高橋三知雄

(法)

【連載・対談シリーズ(1)】堀江壮一氏に聞く

No 2 高知高校入学から社研結成まで

……堀江壮一/林賢治/附・社会運動史関連年表Ⅰ 一九一〇―一九二六

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史の一面Ⅴ……増田渉(中国文学者)

◆ランボー研究余滴Ⅴ……山村嘉己
(文)

道標/新刊案内/編集後記

第四十四号

(二九七六・七) B 5・36頁

【評論】◆大杉栄の思想と運動……小山仁

示(文)

【書評】E・フィッシャー「若い世代の問題」……小川悟(文)

中谷寛章遺稿集「眩ゆさへの挑戦」

……北沢誠(文四)

【翻訳】南開大学・経済研究所「壟断・財

団・大企業」(独占・財閥・大企業)

……訳/結城良(文卒)

【連載・対談シリーズ(1)】堀江壮一氏に聞く

No 3 帝国主義戦争反対……堀江壮一/林賢治

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史の一面Ⅵ……増田渉(中国文学者)

◆ランボー研究余滴Ⅵ……山村嘉己
(文)

道標/新刊案内/編集後記

第四十五号

(二九七六・十一) B 5・36頁

【特集】教育問題

選別機構としての大学……田中欣和
(文)

【評論】現代心理学の苦悩……田中俊也(大学院生)

【翻訳】南開大学・経済研究所「壟断・財

団・大企業」(独占・財閥・大企業)

……訳/結城良(文卒)

【私の研究ノートから】◆日中文化関係史の一面Ⅶ……増田渉(中国文学者)

◆ランボー研究余滴Ⅶ……山村嘉己
(仏文学者)

道標／新刊案内／編集後記

第四十六号

(一九七七・五) B5・40頁

【評論】在日朝鮮人教育について……李明淑

障害者差別の現実……山口梨季

【書評】湯浅越夫「第三世界の経済構造」

……西行雄(50経卒)

渡辺一民「近代日本の知識人」……渡辺幸博(文)

L・アルチュセール「科学者のための

哲学講義」／村上陽一郎「科学・哲学・

信仰」……田中俊也(大学院生)

【私の研究ノートから】◆ランボー研究余

滴Ⅷ……山村嘉己(仏文学者)

◆日中文化関係史の一面Ⅺ……増田

涉(中国文学者)

【追悼 増田涉】弔辞……鳥井克之

増田先生の思い出……編集部

道標／新刊案内／編集後記

第四十七号

(一九七八・四) B5・30頁

【特集】「読書」への招待——新入生への

推薦図書——……教官アンケート

【評論】施設解体ノ——「障害者」解放闘争の更なる飛躍を克ち取るために——

……社会福祉研究会

【私の研究ノートから】◆ランボー研究余滴Ⅸ……山村嘉己(文)

羅針盤——復刊の言葉にかえて——／書物の紹介(新刊から)／書評バックナンバー

掲載論文一覧／編集後記

第四十八号

(一九七八・十) B5・36頁

【講演記録】彼はなぜ韓国へ渡ったか——

11・22在日韓国「政治犯」救援運動を通じて——……桑原重夫

【評論】ことばの社会性——名作童話「ピノキオ」の差別表現をめぐって——

……田宮武

【書評】神島二郎「近代日本の精神構造」

……竹内洋(社)

【私の研究ノートから】◆ランボー研究余滴Ⅹ……山村嘉己(文)

羅針盤／編集後記

第四十九号

(一九七九・四) A5・52頁

【特別寄稿】芝居のすすめ……古賀勝行

(「演劇批評」編集者)

芝居のすすめ・対談編……古賀勝行／

杉麻司由

【私の研究ノートから】ランボー余滴Ⅺ

……山村嘉己(文)

【コラム・映評】自働律の分度器……北沢純一(法二)

ドール……泉良樹(商四)

読書の方法……平田重和(文)／書物

とのつきあい……市川訓敏(法)／新

入生のための入門リスト

羅針盤／書籍部便り／編集後記

第五十号

(一九七九・十二) A5・60頁

【評論】西学東漸と中国事情……大庭脩

本屋あれこれ……石田信博

行きずりの人……沢野光路

【研究ノート】ランボー研究余滴Ⅻ……山村嘉己

【コラム】映像——私の西部劇小論……倉

持隆

音楽——今現実をとりかえせ……筑紫
毛切郎

【書籍部より】今読まれている本／予約カ
ウンターの利用案内／類書案内／全集
フェア

羅針盤／編集後記

第五十一号

(一九八〇・四) A5・80頁

新入生諸君へ……小川悟(文)

【評論】ワンバターン(犬の卒倒)にかた
よらない日本人論……中農晶三(社)

甘えの世代と沈潜の文学……吉田永宏
(文)

日本の大学とドイツの大学生について
……D・シャウベッカー(文)

【書評】「ユースカルチャー史」批判……
竹内洋(社)

細見英「経済学批判と弁証法」……竹
内良知(文)

【コラム】映像——映画はだれのものか
……松山秋邦(社四)

【研究ノート】ランボー研究余瀛……山
村嘉己(文)

村嘉己(文)

羅針盤／書籍だより(刊全集一覽)……書
籍部／編集後記

第五十二号

(一九八〇・六) A5・56頁

【評論】サルトルと現代——追悼サルトル
——……渡辺幸博(文)

【書評】サルトルと現代——追悼サルトル
武(社)

差別落書問題をめぐって(1)……田宮
武(社)

【書評】渡辺幸博「サルトルの哲学」……
川神伝弘(文)

野間宏「崩壊感覚」……小田実篤
辻邦生「廻廊にて」……小田実篤

【研究ノート】◆研究余瀛 ボードレール
1……山村嘉己(文)

◆日本中国ことばの来往 その1……
芝田稔(文)

羅針盤／編集後記

【評論】差別落書問題をめぐって(2)……田
宮武(社)

【書評】長須祥行「筑波大学」……円尾健
(文)

【研究ノート】◆研究余瀛——ボードレール
2……山村嘉己(文)

◆日本中国ことばの来往 その3……

【評論】II部大学論を載せるにあたっての
われわれの視点……書評編集委員会

「長須祥行「筑波大学」新構想は何を
もたらしたか——円尾健氏の書評」
に対する反論……天六公開自主講座実
行委員会

【研究ノート】◆研究余瀛——ボードレール
2……山村嘉己(文)

◆日本中国ことばの来往 その3……

【書評】五十嵐良雄「裁かれる大学」……
小川雅也(文)

大庭脩「江戸時代の日中秘話」……泉
澄一(文)

深沢七郎「檜山節考」……江崎明(文
一)

【評論】II部大学論を載せるにあたっての
われわれの視点……書評編集委員会

「長須祥行「筑波大学」新構想は何を
もたらしたか——円尾健氏の書評」
に対する反論……天六公開自主講座実
行委員会

アントニー・バージェス「時計じかけ
のオレنج」……荒木倫子(大学院生)

【研究ノート】◆日本中国ことばの来往
その2……芝田稔(文)

【隨筆】北京で生活して(1)……鳥井克之
(文)

羅針盤／編集後記

【書評】五十嵐良雄「裁かれる大学」……
小川雅也(文)

大庭脩「江戸時代の日中秘話」……泉
澄一(文)

深沢七郎「檜山節考」……江崎明(文
一)

【評論】II部大学論を載せるにあたっての
われわれの視点……書評編集委員会

「長須祥行「筑波大学」新構想は何を
もたらしたか——円尾健氏の書評」
に対する反論……天六公開自主講座実
行委員会

【研究ノート】◆研究余瀛——ボードレール
2……山村嘉己(文)

◆日本中国ことばの来往 その3……

【書評】五十嵐良雄「裁かれる大学」……
小川雅也(文)

大庭脩「江戸時代の日中秘話」……泉
澄一(文)

深沢七郎「檜山節考」……江崎明(文
一)

【評論】II部大学論を載せるにあたっての
われわれの視点……書評編集委員会

「長須祥行「筑波大学」新構想は何を
もたらしたか——円尾健氏の書評」
に対する反論……天六公開自主講座実
行委員会

【研究ノート】◆研究余瀛——ボードレール
2……山村嘉己(文)

◆日本中国ことばの来往 その3……

【書評】五十嵐良雄「裁かれる大学」……
小川雅也(文)

大庭脩「江戸時代の日中秘話」……泉
澄一(文)

深沢七郎「檜山節考」……江崎明(文
一)

【評論】II部大学論を載せるにあたっての
われわれの視点……書評編集委員会

「長須祥行「筑波大学」新構想は何を
もたらしたか——円尾健氏の書評」
に対する反論……天六公開自主講座実
行委員会

【研究ノート】◆研究余瀛——ボードレール
2……山村嘉己(文)

◆日本中国ことばの来往 その3……

芝田 稔(文)

【随筆】 北京で生活して(2)……鳥井克之(文)

羅針盤／編集後記／書評編集委員会80年度活動の総括

第五十五号

(一九八一・四) A5・80頁

【特集】 新人生へ贈る——今読むべき本はこれだ——

石尾芳久(法)／山川雄巳(法)／松岡保(経)／田宮 武(社)／竹内 洋(社)／小原 仁(社)／吉田永宏(文助)／田中 欣和(文)／鍛冶邦雄(商)

【書評】 山村嘉己「文学入門」……工藤精一(文)

【講演記録】 「裁かれる大学」……五十嵐良雄(相模女子大)

【研究ノート】 ◆研究余滴——ボードレール3……山村嘉己(文)

◆日本中国ことばの来往 その4……芝田 稔(文)

◆ポーランド——その歴史と風土——I……松川克彦(京産大)

【随筆】 北京で生活して(3)……鳥井克之

(文)

【評論】 差別落書問題をめぐって(3)……田宮 武(社)

羅針盤／新刊案内／書評バックナンバー掲載論文一覧／編集後記

第五十六号

(一九八一・6) A5・64頁

【書評】 岩波叢書「欽ばしき学問」(文化の現在)……渡辺幸博(文)

置塩信雄「現代資本主義分析の課題」……森岡孝一(経)

三嶋唯義「ピアジェ・逸年の思想」……中城 進(大学院生)

大江健三郎「セウンティーン」……江崎 明(文二)

【評論】 剝奪つれた関係性——その外體としての映画論……黒木貞雄(文二)

【研究ノート】 ◆日本中国ことばの来往 その5……芝田 稔(文)

◆ポーランド——その歴史と風土II……松川克彦(京産大)

【随筆】 北京で生活して(4)……鳥井克之(文)

羅針盤／新刊案内／編集後記

第五十七号

(一九八一・九) A5・56頁

【特集】 在日朝鮮人文学とその周辺

◆特集を組むにあたり……書評編集委員会

◆講演録／光州事態の内と外……金時鐘(詩人)

◆在日朝鮮人文学覚え書(1)……吉田永宏(文)

◆出入国管理令改訂の分析……金一(社四)

◆忘れえぬこと……ピョン・アリ

【研究ノート】 ◆日本中国ことばの来往 その6……芝田 稔(文)

◆ポーランド——その歴史と風土——最終回……松川克彦(京産大)

【随筆】 北京で生活して(5)……鳥井克之(文)

羅針盤／編集後記

第五十八号

(一九八一・十二) A5・112頁

【特集】 大学——教育再編攻撃に反撃せよ

◆講演録／私たちの受けてきた教育と

は——そして大学とは——……宇井純(東大工)

◆講演録/放送大学の真の狙いはなに
か?……生越 忠(和光大)

◆軍事力増強と教科書問題……鈴木祥藏(文)

◆ふたたび「筑波大学」(長須祥行)をめぐって……田尾 健(文)

【書評】サミール・アミン「世界資本蓄積論」……若森章孝(経)

【研究ノート】◆日本中国ことばの来往その7……芝田 稔(文)

【随筆】北京で生活してVI……鳥井克之(文)

羅針盤/新刊案内/編集後記

第五十九号

(一九八二・二)

【書評】書をもて、ともに語れ——一九八一・性教育書・回顧——小代誠一郎(大学院生)

ロラン・バルト「文学の記号学」……後藤尚人(文四)

【映評】「典子は、今」を撃つ/関大工部障害者解放研究会

【研究ノート】◆日本中国ことばの来往その8……芝田 稔(文)

【随筆】北京で生活して(7)……鳥井克之(文)

羅針盤/編集後記

第六十号

(一九八二・四)

【新歡企画】読書への招待……玉田勝郎(文)/小山仁示(文)/市川訓敏(法)

土倉莞爾(法)/佐藤真人(経)/木田和雄(商)/足立利雄(社)/木村洋二(社)

【評論】◆論争・ボルノと「性非行」——大阪府の新条例案をめぐって——小代誠一郎

◆レクチュールの立体学——または戦略的「書評」のために——福田昌敬

【連載】◆差別落書問題をめぐって・まとめ——私と部落問題——田宮 武

◆日本中国ことばの来往 その9……芝田 稔

◆北京で生活して(8)……鳥井克之

◆研究余滴 ボードレール4 ボードレルと美術批判……山村嘉己

◆在日朝鮮仁文字覚え書(2)……吉田永

宏

バックナンバー掲載論文一覧/お知らせ/編集後記

第六十一号

(一九八二・六)

【特集】現代マスコミ・メディア・映像問題を問う

【書評】◆実践主義者としての新聞記者をめざして——八木晃介著「反差別メディア論——新聞記者として」——田宮 武

◆現代社会の構造的(ひずみ)の告発——ジャン・ボードリヤール著「消費社会の神話と構造」——渡辺幸博

◆「情報環境」を見直す目を——H・I・シラー著「世論操作」——足立利雄

◆テレビの技術開発を支配したものの——青木貞伸著「かくて映像はとらえられた」——橋本敬造

◆ジャーナリズムとテレビ・メディア——青木貞伸著「ブラウン管の思想」——井上 宏

◆マスコミと国民の知る権利——堀部

政男著「アクセス権」——薄田 桂

◆象徴交換論への招待——ジャン・ポ
ードリヤール著「生産の鏡」……中村
主永

【エッセイ】鈴木志康「映画の弁証」から
……石木真透

写真は何処へ……黒岩岳男

【翻訳】魯迅の文字改革論……伊井健一郎
【連載】◆日本中国ことばの来往 その10
……芝田 稔

◆北京で生活して……鳥井克之

羅針盤／編集後記／お知らせ

第六十二号

(一九八二・九)

【特集】第三世界にとつての経済学とは？

【書評】フランス派「不平等交換論」——
A・エマニュエル／C・ベトレーム

【新国際価値論争】——S・アミン／
C・パロワ著 原田金一郎訳……木田

和雄

マーケティング的視点からの多国籍企
業——宮崎義一著「現代資本主義と多
国籍企業」——市川浩平

南北問題の根底にあるもの——「資本

論」の現代的活性化を通じて——S・

アミン著「周辺資本主義構成体論」野
口 裕・原田金一郎訳……若森章孝

現代マルクス主義への招待——P・ス
ウィージ著「マルクス主義と現代」
……石木真透

【評論】日米貿易摩擦と農業問題……東井
正美

【連載】◆日本中国ことばの来往 その11
……芝田 稔

◆北京で生活して……鳥井克之

◆研究余滴 ボードレール4 ボード
レールと美術批評……山村嘉己

羅針盤／講演会の件／お知らせ／編集後記

第六十三号

(一九八二・十二)

【特集】なぜ今、憲法改「正」・刑法改「正」
なのか

【書評】憲法改正問題を考える——佐藤
功著「憲法問題を考える——視点と論
点」……堀 堅士

監獄法改正を考える——前野育三著
「日本の監獄と人権」……大山 弘

反動立法の方向性を見究めよう——永野周

志著「刑法と支配の構造」……森井暉

【教育を考える・シリーズI】教科書とは
何だったのか
教科書問題について……竹内良知

【連載】◆日本中国ことばの来往 その12
……芝田 稔

◆北京で生活して(最終回)……鳥井克
之

◆研究余滴 ボードレール5 ボード
レールと音楽……山村嘉己

羅針盤／書評／お知らせ／編集後記

第六十四号

(一九八三・四)

【新歓企画】読書への招待

日本社会を知るためのいくつかの書
……山中敬一

江戸時代の朝鮮通信使をめぐる……
大庭 脩

「国連障害者の十年」にちなんで……
山下栄一

日本資本主義発達史にかかわるいくつ
かの文献……安喜博彦

遺伝子の分子生物学……福留祥子
モラトリウム人間論……佐々木土師二

【寄稿】象徴天皇主義とは何か——丸山昭雄著「象徴天皇主義とは何か」……藤田宏三

【連載】◆研究余滴 ボードレール6 ポードレールと老婆……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その13……芝田稔

羅針盤／短評／お知らせ／編集後記／バックナンバー紹介

第六十五号

(一九八三・六・十五)

【連続講演会再現(1)】目・を・そ・ら・さ・な・いで／

科学技術とは何か——その虚像と実像……中山茂

【特別掲載】公教育再編における放送大学の機能……清原正義

羅針盤／短評／編集後記

第六十六号

(一九八三・九・八)

【連続講演会再現(2)】教科書・教育・大学を考へる 《講師》毎日新聞社・教育取材班 矢倉久泰／小学校教員 吉村

龍之／大阪女子大学助教授 杉村昌昭
資本主義・多国籍企業・南北問題を考へる 《講師》東京経済大学教授 宮崎義一／大阪経済法科大学教授 原田金一郎

【連載】◆研究余滴 ボードレール7 ポードレールの韻文詩と散文詩……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その14……芝田稔

羅針盤／短評／お知らせ／編集後記

第六十七号

(一九八三・十一・二)

教育政策の展開とその特徴——教員養成免許制度「改革」をめぐって——岡村達雄

【書評】『教育の中の国家』(岡村達雄著 社会評論社刊)……尾崎ムゲン

教科書問題への視角……清原正義

【連載】◆聞き書き——部落に生きる人たち ① 水平社の糾弾闘争に参加して……田宮武

◆研究余滴 ボードレール8 ボードレールと月……山村嘉己
◆日本中国ことばの来往 その15……

芝田稔
羅針盤／お知らせ／お詫びと訂正／編集後記

第六十八号

(一九八四・一・十)

【特集】ファシズムの先駆者マルクス……池田浩士

グラムシの哲学——存在論と客観性の構成——トマス・ネメット／竹内良知

新聞・諸雑誌よりみたマルクス没後一〇〇年記念の動向……重田晃一

マルクスのマルクス主義——科学的社会主義をめぐって——渡辺幸博

現代化のなかの『資本論』——情報化社会をみる眼とマルクス——若森章孝

マルクス主義哲学における類と疎外——ポルトマンとの関連をふまえて……山本冬彦

レーニン主義に現代的有効性はあるか……庄野克己

ネオ・マルクス主義をこえて——ポールピッコリーネ著『現象学的マルクス主義』

義（せりか書房刊）（資本のバードック）所収を媒介として……………中村水

【特別掲載】講演録◆わたしのなかの優生思想―戦前・戦後の「国民優生法」

「優生保護法」成立過程を通じて―講師・「あいら」編集部……………京藤千代

【連載】◆聞き書き―部落に生きる人たち② 部落差別の中を生きぬいて……………田宮武

◆研究余滴 ボードレール9 ボードレールの愛のかたち……………山村嘉巳

羅針盤／お知らせ／編集部より書評67号について／編集後記

第六十九号

（一九八四・四・七）

【特集】新入生諸君へ

田中克彦 「言語の学校」（NHKブックス）……………山村嘉巳

木下順二作「夕鶴」（未來社）を「疎外論」として読んでみよう……………鈴木祥蔵

吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」（岩波文庫）の値打ちが判らないようではこまるのだ……………小山仁示

有吉佐和子著「複合汚染」（新潮社）を一に通読、二に精読、三に批判的摂取……………東井正美

坂本義和著「軍縮の政治学」（岩波新書）の読みかた……………土倉莞爾

中村収著「ナルシスの現代」（時事通信社）で自らの「青春を読み解こう」……………岩見和彦

新入生のみなさんに贈る◆I・B・シンガー著「ヘルムのあんぼん譚」（篠崎書店）／「メイゼルとシユリメイゼル」（富山房）／「短い金曜日」（晶文社）……………鍛冶邦雄

【連載】◆聞き書き―部落に生きる人たち③ 差別への怒りを燃やして……………田宮武

◆日本中国ことばの来往 その16……………芝田稔

羅針盤／短評／お知らせ／お詫びと訂正／編集後記

第七十号

（一九八四・六・九）

逆流の思想……………宇波彰

コスモロジーIIカオスの相互依存について……………

……………井手二一四
【青年・文化】論の理解のために……………岩見和彦

【連載】◆聞き書き―部落に生きる人たち④ 差別の現実を見つめて……………田宮武

◆研究余滴 ボードレール10 ボードレールにおける水(1)……………山村嘉巳

◆日本中国ことばの来往 その17……………芝田稔

羅針盤／お詫びと訂正／編集後記

第七十一号

（一九八四・九・十七）

【書評】フォルスター研究会「ゲオルク・フォルスター作品集」―世界革命からフランス革命へ（三修社）について……………芳原政弘

僧院と監獄との間に―「監獄の誕生」に関する試論……………田中寛一

【図書館問題】なぜ図書館ネットワークなのか……………書評編集委員会

学術情報システムを粉砕するために……………胸水ヒトシ

大学図書館の「解放」序論の序論……………

木村隆美

【連載】◆聞き書き——部落に生きる人たち

ち⑤ 学校で差別を体験した……田宮武

◆研究余滴 ボードレール11 ボード

レールにおける水(2)……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その18……

芝田 稔

羅針盤／編集後記

第七十二号

(一九八四・十一・十三)

教育問題特集を組むにあたって

【書評】『戦後日本教育史料集成』(三二書房刊)……尾崎ムゲン

【講演録】6・26岡村達雄講演会

社会学部カリキュラム改善委員会／付録・基調

明

【短評】ドナルドダックを読む……剣持

羅針盤／お知らせ／編集後記

第七十三号

(一九八五・四・八)

【読書案内】なぜ本を読むの？

読むということ……堀 堅士／浅田ク

ンを越えて……渡辺幸博／演劇的知への

の試み……小川雅也／科学を効果的に

あつかうために……橋本敬造／今出会

ってほしい「読書」……生田 靖／日本

経済の読み方……木村雄二郎／日本と

朝鮮のあいだに……吉田永宏

【講演録】84・11・14教育シンポジウム

教育再編——関大はどうなる……菅孝

行・胸永等

【投稿】◆内藤湘南と間島協約……西重

和

【連載】◆聞き書き——部落に生きる人たち

ち⑥ 融和主義に怒りを感じた……田

宮 武

◆日本中国ことばの来往 その19……

芝田 稔

◆研究余滴 ボードレール12 ボード

レールと死(1)……山村嘉己

羅針盤／お知らせ／お詫びと訂正／新歓セミナーのご案内／編集後記

第七十四号

(一九八五・六・十五)

【書評】ナチス時代の「ジプシー」植松健郎

ドナルド・ケンリック／グラタン・パ

ックソン著 小川 悟訳

賤民文化と天皇制……菅 孝行著・出

雲路敬作

【連載】◆聞き書き——部落に生きる人たち

ち⑦ 差別の仕組みが見えてきた……

田宮 武

◆研究余滴 ボードレール13 ボード

レールと死(2)……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その20……

芝田 稔

羅針盤／お知らせ／お詫びと訂正／編集後

記

第七十五号

(一九八五・九・三十)

【新刊紹介】アフター・マルクス……松岡

保／D・マクレラン著／重田晃一・松

岡保・若森章孝・小池 渺訳

【投稿】◆中国語と「母国語の干渉」……

西川和男

【連載】◆聞き書き——部落に生きる人たち

ち⑧ 闘って勝利する喜びを……田宮

武

◆研究余滴 ヴェルレーヌ1 ヴェル

レーヌの位置……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その21……

芝田 稔

羅針盤／お知らせ／編集後記

第七十六号

(一九八五・十二・十)

【特集】 小川雅也先生を偲んで……山村嘉己／加藤美雄／平田重和／野浪嗣生／小川悟／渡辺幸博／中農晶三／橋本昭一／上田惟一／中所聖一／田中譲司／青木義尚

【連載】 ◆ロマン主義文学論序説(1) 小説の中の異境……池田浩士

◆聞き書き——部落に生きる人たち⑨

◆研究余滴 ヴェルレーヌ2 サンチュエルニヤンの自覚……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その22……

芝田 稔

羅針盤／お知らせ／編集後記

第七十七号

(一九八六・四)

【読書案内】 これから何を読むの？

三種類の読書の型……千藤洋三／(筑豊)——近代日本の栄光と悲惨……玉田勝郎／インチキに騙されないために

錯覚に気づくために……松岡保／「時代を透視するために」……陶山計介／読書日記より……三谷真／A君の将来……隈元昭／三橋修と「頼べない身体」……池田進

【投稿】 ◆内藤湖南と「北朝鮮ルート」論……西 重信

【連載】 ◆聞き書き——部落に生きる人たち⑩ 解放研究生徒との話し合いを……田宮 武

◆日本中国ことばの来往 その23……

芝田 稔

◆研究余滴 ヴェルレーヌ3 華やかな衣装の陰で……山村嘉己

羅針盤／お知らせ／編集後記

第七十八号

(一九七八・七)

【寄稿】 経済白書の役割——我国最初の白書に関連して……元木 久

【連載】 ◆ロマン主義文学論序説(2) 小説の中の異境……池田浩士

◆聞き書き——部落に生きる人たち⑪ 卑屈な姿勢からの脱却を……田宮 武

◆日本中国ことばの来往 その24……

芝田 稔

◆研究余滴 ヴェルレーヌ5 魔王との接触……山村嘉己

羅針盤／お知らせ／編集後記

第八十号

(一九八七・四)

【読書案内】 解答なき読書のすすめ……竹下賢／反差別教育にかかわる三冊の本……田中欣和／異体験のために……

◆聞き書き——部落に生きる人たち⑫ 南但馬に差別糾弾の旗を……田宮 武

◆研究余滴 ヴェルレーヌ4 かりそめの天国に歌う合いの愛の「やさしい歌」……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その24……

芝田 稔

羅針盤／お知らせ／編集後記

第七十九号

(一九八六・十二)

【連載】 ◆聞き書き——部落に生きる人たち⑫ 卑屈な姿勢からの脱却を……田宮 武

◆日本中国ことばの来往 その25……

芝田 稔

◆研究余滴 ヴェルレーヌ5 魔王との接触……山村嘉己

羅針盤／お知らせ／編集後記

◆聞き書き——部落に生きる人たち⑫ 卑屈な姿勢からの脱却を……田宮 武

◆日本中国ことばの来往 その25……

芝田 稔

◆研究余滴 ヴェルレーヌ5 魔王との接触……山村嘉己

羅針盤／お知らせ／編集後記

第八十号

(一九八七・四)

【読書案内】 解答なき読書のすすめ……竹下賢／反差別教育にかかわる三冊の本……田中欣和／異体験のために……

◆聞き書き——部落に生きる人たち⑫ 南但馬に差別糾弾の旗を……田宮 武

◆研究余滴 ヴェルレーヌ4 かりそめの天国に歌う合いの愛の「やさしい歌」……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その24……

芝田 稔

羅針盤／お知らせ／編集後記

山本繁純／考える座標の変換……藤澤
隆章／本の買いかた……多喜弘次

【連載】◆内藤湖南の朝鮮観——「停滞論」と「同祖論」を中心にして——……西

重信

【連載】◆聞き書き——部落に生きる人たち⑬ 立ち上がって差別からの解放を……田宮 武

◆ロマン主義文学論序説(3) 小説の中の異境……池田浩士

◆日本中国ことばの来往 その26……

芝田 稔

◆研究余滴 ヴェルレーヌ6 地獄の

底からの(悪しき歌)……山村嘉己

羅針盤／編集後記

第八十一号

(一九八七・九・二十一)

【投稿】◆「諮問拒否の思想」を読んで

……小川 悟

◆いまなぜフーコーか(上)——フーコーの構造主義エピステモロジー——

……竹内良知

◆僕がバッテリーになるまで……勝 道興

◆私の身体……羽地 亮

◆「お山の大将」レッド・ツェッペリン……若大将クラブ

◆醜悪でおぞましい「統一教会」……

莉部雅子

◆書評「モモ」……辻 恵子

◆書評『弁証法はどういう科学か』……河田智治

【連載】◆ロマン主義文学論序説(4) 小説

のなかの異境……池田 浩士

◆日本中国ことばの来往 その27……

芝田 稔

◆聞き書き——部落に生きる人たち⑭

心に部落解放のゼッケンをつけて……

田宮 武

◆研究余滴 ヴェルレーヌ7 牢獄で

の呻吟と悔悟(1)……山村嘉己

羅針盤／編集後記

第八十二号

(一九八八・一・二十六)

【投稿】◆いまなぜフーコーか(下)——ミシェル・フーコーについての覚書——

……竹内良知

◆我々の美術は何処に?——日本戦後美術の周辺——……平井章一

◆語るべき人生……田中敏郎

◆日本人と朝鮮人が共に生きるために……S・I生

【連載】◆日本中国ことばの来往 その28

……芝田 稔

◆聞き書き——部落に生きる人たち⑮ 心に部落解放のゼッケンをつけて……

田宮 武

◆研究余滴 ヴェルレーヌ8 牢獄で

の呻吟と悔悟(2)……山村嘉己

◆ロマン主義文学論序説(5) 小説のな

かの異境……池田浩士

羅針盤／編集後記

第八十三号

(一九八八・四・三)

【読書案内】読書の誘い

大学と読書……堀 堅士／大江健三郎と椎名誠……平田重和／経済学を学ば

ねばならぬ学生諸君に薦める一冊の本……橋本昭一／誰を読むか……三谷

信／機械は心をもつことができるか……池田進／新入生の方々への読書

の誘い……引原隆士

【投稿】◆内藤湖南と頭山満——間島協約

に果した役割——西 重信

【連載】◆日本中国ことばの来往 その28

……芝田 稔

◆研究余滴ヴェルレーヌ9 『穀智』

の世界……山村嘉己

羅針盤／お知らせ／お詫びと訂正／新歓セ

ミナーのご案内／編集後記

第八十四号

(二九八八・六・十)

【寄稿】イエーリング「権利のための闘争」

について……石尾芳久

対南ア経済制裁をめぐる「日本の問題」

……神野 明

「定住外国人関係法」制定運動を考え

る……李 英和

【書評】闘った者の深さと美しさ——「人

間の運命」(トヨロホフ作 米川正

夫・漆原隆子訳 角川文庫)——

伊藤明子

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ

ートI 戦後、民族教育の成立……梁

永厚

◆ロマン主義文学論序説(6) 小説のな

かの異境……池田浩士

◆研究余滴ヴェルレーヌ10 ふたた

び愛の狂乱に……山村嘉己

羅針盤／お知らせ／お詫びと訂正／編集後記

第八十五号

(二九八八・十・十五)

【特集】岩波新書特集——岩波新書から戦

後を問う——

【心に残るこの一冊】書評編集委員会より

忘れられた思想家——安藤昌益のこと

(ハーバート・ノーマン著)……石尾芳

久／日本の地方自治(辻 清明著)……

市川訓敏／アリストテレスとアメリカ

カ・インディアン(ヘルイス・ハンケ(佐

々木昭夫著)……市原靖久／ルソー

(桑原武夫著)……上田誉志美／魔女狩

り(森島恒雄著)……小川 悟／東京大

空襲(早乙女勝元著)……小山仁示／

銃後の責務……芝井敬司／解放思想の

人々(大塚金之助著)……松岡 保／資

本論の世界(内田義彦著)……若森章

孝／結核をなくすために(松田道雄著)

……木田和雄／同時代のこと(吉野源

三郎著)……三谷 真／数学の学び方・

教え方(遠山啓著)……山本 登／知

的生産の技術(梅棹忠夫著)……雨宮

俊彦／アユの話(宮地伝三郎)……佐

々木土師二／子どもたちの太平洋戦争

(山中 恒著)……多湖正紀

岩波新書アンケート結果報告

【連載】◆日本中国ことばの来往 その30

……芝田 稔

【寄稿】網野善彦氏著「異形の王権」につ

いて石尾芳久

お知らせ／編集後記

第八十六号

(二九八九・一・十)

【講演録】(88・4・13)

教育再編の生態解剖——「管理教育を

けつとばせ」——

基調PART1……尾崎ムゲン

PART2……鎌田 慧

【研究ノート】「周作人日記」にみえる郷

振鐸……倉橋幸彦

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ

ートII 植民主義教育の実相……梁 永

厚

◆研究余滴ヴェルレーヌ11 「今と

昔」——夢よ再び……山村嘉己

◆ロマン主義文学論序説(7) 小説のな
かの異境……池田浩士
◆日本中国ことばの来往 その31……
芝田 稔
羅針盤／編集後記／お知らせ

第八十七号

(二九八九・四・三)

【読書案内】あいさつ／自己の基本的な姿
勢からの批判……岡徹(法)／影の学
問、窓の学問……市原靖久(法)／「辞
書」の新発見……西川和男(文)／無意
識の伝達……和田葉子(文)／よみかた
ことはじめ 私の読書法……石田 浩
(経)／韓国(本)ブームにおける「きわ
どさ」……李 英和(経)／ラス・カサス
著 染田秀藤訳「インディアスの破壊に
ついて」の簡潔な報告……木田和雄
(商)／社会的問題関心を深めるために
……杉野幹夫(商)／アジアの考察と外
国人労働者……大西正曹(社)／ピート
ルズの時計……多喜弘次(社)／「意見
の確立のために」……引原隆士(工)／
まわりに目を向けよう……山本 登
(工)

【寄稿】◆内藤湖南の朝鮮統治論——併合
へむけて——……西 重信

【連載】◆研究余滴ヴェルレーヌ12
ど

◆日本中国ことばの来往 その32……
芝田 稔

◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート

Ⅲ 懺悔と抑圧……梁 永厚

羅針盤／短評／バックナンバー一覽／お知
らせ／編集後記

第八十八号

(二九八九・六・三十)

【特集】天皇制再考

書評編集委員会より

昭和天皇と天皇制……小山仁示

「日の丸」「君が代」を考える——悲憤
の山脈の裾野に立って……鈴木祥藏

天皇報道とマスコミ……田宮 武

【特集】外国人労働者

書評編集委員会より

在日朝鮮人と「出入国管理」体制——外
国人労働者問題の原点……李 英和

【寄稿】◆内藤湖南の朝鮮統治論(二)——
併合に際して——……西 重信

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ
ートⅣ 同化教育政策の復活……梁 永
厚

◆ロマン主義文学論序説(8) 小説のな
かの異境……池田浩士

◆研究余滴ヴェルレーヌ13 どん底
の中で「愛」を(Ⅱ)——詩集「愛」の構成
……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その33 国
際化をめぐって——ある「小さな」出
来事……芝田 稔

【短評】「昭和」の学校行事／市民の目か
ら見た国際化／あぶない日本語学校

羅針盤／お知らせ／編集後記

第八十九号

(二九八九・九・二十二)

【特集】新人生歓迎連続講演会「今(国際化)
を問う」再現

書評編集委員会より

外国人出稼ぎ労働者問題の原点……田
中 宏

アジアからの留学生の過去・現在・未
来……芝田 稔

【特集】五四運動七〇周年——激動する中

「書評」 総目次

国一

書評編集委員会より

六・四天安門事件と五四運動……渡辺

幸博

中国の都市と農村——中国社会主義の
虚像と実像……石田浩

【寄稿】書評編集委員会より

自衛官合祀訴訟大法廷判決批判……石
尾芳久

内藤湖南の朝鮮統治論(三)——三・一
運動に直面して——西・重信

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ

ⅠトV 一九四八年・学校弾圧の開始

……梁 永厚

◆ロマン主義文学論序説(9) 小説のな
かの異境……池田浩士

◆研究余滴 ヴェルレーヌ14 霊も内
も交々に——詩集『平行して』をめぐつ
て……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その34……

芝田 稔

◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅰ——
……芝田啓治

【短評】女ひとり中国を行く／覚悟ノ／白
河夜船

羅針盤／編集後記

第九十号

(一九八九・十二・五)

【特集】新人生歓迎連続講演会(今(国際化)

を問う)再現PART II

書評編集委員会より

「孤立する日本」を語る……安江良介
日本に住むフィリピン人から見た国際
化……ロランド・ユ一

【寄稿】◆人権思想の源流と部落の歴史

……石尾芳久

◆ネルーの日本・朝鮮論……西・重信

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ

ⅠトVI 非常事態宣言……梁 永厚

◆ロマン主義文学論序説(10) 小説のな
かの異境……池田浩士

◆研究余滴 ヴェルレーヌ15 不可能
な「幸福」を求めて——詩集『幸福』を
考える……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その35……

芝田 稔

◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅱ——
……芝田啓治

【短評】エビと食卓の現代史／「教育技術

の法則化運動」症候群

羅針盤／お詫びと訂正・お知らせ／編集後
記

第九十一号

(一九九〇・四・三)

【読書案内】『書評』編集委員会より

専門から落ちたもの……園田 寿(法)
／「フランス革命」を例にして……土
倉莞爾(法)／空想の図書館……驚田清

一(文)／映像時代の読書とは……山本
冬彦(文)／時には尾獣骨を思い出させ
てくれるような本も……加勢田 博

(経)／ハウツー物の傑作『経済学』を
読もう……吉田達雄(経)／「講義を聴
こう」……廣瀬幹好(商)／「ほっといて
んかー、わしの勝手や」は勝手や、
……岩佐代市(商)／見えないものを見
る宇宙論……橋本敬造(社)／パターン

認知と理解は読書を嫌う?……藤沢
等(社)／日本の技術一〇〇年の歩み
……木村寿夫(工)／「語ることができ
るより多くのこと」を求めて……前田

裕(工)

【投稿】◆教育の現在——どこからどこへ

『教育の現在 歴史・理論・運動(全三巻) 完結に寄せて……岡村達雄

◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅲ——
……芝田啓治

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ

ⅠトⅦ 少年の死……梁 永厚

◆ロマン主義文学論序説(1) 小説のなかの異境……池田浩士

◆研究余滴 ヴェルレーヌ16 終末への歩み……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その36……
芝田 稔

【短評】在日六〇年・自立と抵抗——在日朝鮮人運動史への証言——/面白読本

地球汚染

羅針盤/新人生歓迎セミナー/STAFF
募集/編集後記

第九十二号

(一九九〇・六・三〇)

【投稿】◆末広重雄の朝鮮自治論——内藤

湖南を念頭において……西 重信

◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅳ——
……芝田啓治

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ

ⅠトⅧ 日本の労働者・市民の連帯
……梁 永厚

◆ロマン主義文学論序説(2) 小説のなかの異境……池田浩士

◆研究余滴 象徴主義Ⅰ 序章 象徴主義は死んでいない……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その37……
芝田 稔

【短評】同時代を撃つ PART3/出よう
かニッポン 女31歳/精神病を知る本

羅針盤/お知らせ/編集後記

第九十三号

(一九九〇・九・三〇)

【特集】「在日朝鮮・韓国人問題」を問う

【書評】編集委員会より

在日外国人と年金制度——とりわけ外国人障害者と国民年金制度について
……山本冬彦

日本の外国人管理行政と韓国・朝鮮人
……金東勲

【連載】◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅴ
……芝田啓治

◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート
Ⅹ 束の間の妥結……梁 永厚

◆研究余滴 象徴主義2 第1章 象徴主義とは?(その一)……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その38……
芝田 稔

【短評】熱帯雨林そして日本/母さんが死んだ——しあわせ幻想の時代に——

羅針盤/お詫びと訂正/編集後記

第九十四号

(一九九一・一・八)

【書評】「精神医療問題」を問う

【書評】編集委員会より

心病める人たち——開かれた精神医療へ——を読んで……飯田紀彦

【投稿】◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅵ
……芝田啓治

◆現代思想の快楽/その1 今村仁司の「仕事」(弘文堂)を読む……松原 恵一

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ
ⅠトⅩ 暴圧・学校閉鎖へ……梁 永厚

◆研究余滴 象徴主義3 第1章 象徴主義とは?(その二)……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その39……
芝田 稔

【短評】うちの子に手を出さないで——管
理教育とたたかう親と教師を訪ねて

——骨たち—— BONES ——

羅針盤／編集後記／お詫びと訂正

第九十五号

(一九九一・四・三)

【読書案内】「書評」編集委員会より

書を読み、書を書く……山川雄巳(法)

／天皇制と歴史学……吉田徳夫(法)

私の「履歴書」……井上泰山(文)／わ

れわれの本を読むように言いなさい

——文学と社会……中山喜代市(文)／

文庫本・釣り三題……森岡孝二(経)／

勝てば官軍?——とんでもない……楠

貞義(経)／O先生のことなど……鍛治

邦雄(商)／社会を読む 自分を読む

……池島正興(商)／しなやかな明晰さ

のために・読書メモ……両宮俊彦(社)

／専門書を読むために……大石裕

(社)／「どこでもドア」を開く楽しみ

……馬場昌子(工)／(文章) ことはじ

め……鉄川 精(工)

【特集】「在日朝鮮・韓国人問題」を問う P
A R T II



『書評』編集委員会より

◆〈在日朝鮮人文学〉論の前提……………吉

田永宏

【投稿】◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅵ

……………芝田啓治

◆「現代思想の快楽」そのⅡ それゆけ
バタイユ——ロード・オーシユ眼球譚
は痙攣するか……………松原恵二

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ

Ⅰ Ⅱ Ⅲ 学校閉鎖に抗して……………梁 永厚
◆研究余滴 象徴主義 4 第2章 象徴
主義の先駆者たち Ⅰ ボードレール
とかれに先立つ人々……………山村嘉己
◆日本中国ことばの来往 その40……………
芝田 稔

【短評】壁のない病室／広告進化論

羅針盤／「所感」も「書感」／お知らせ／投稿
募集／「書評」編集委員募集／編集後記

第九十六号

(一九九一・七・十五)

【連載】◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅶ

……………芝田啓治

【投稿】◆「現代思想の快楽」そのⅢ 『夕

屍体解剖・断章』前編……………松原恵二

【連載】◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノ

Ⅰ Ⅱ Ⅲ 公立朝鮮人学校の誕生……………梁

永厚

◆研究余滴 象徴主義 5 第2章 象徴
主義の先駆者たちⅡ ヴェルレーヌ
Paul Verlaine (1844-96)……………山村嘉
己

◆日本中国ことばの来往 その41……………

芝田 稔

【短評】ハイ・イメージ・ストラテジー／

子どもという巨人
羅針盤／編集後記／投稿募集のお知らせ

第九十七号

(一九九一・十一・七)

【特集】湾岸戦争を問う

『書評』編集委員会より

——『大統領の戦争とその決定過程
読む』……………平井友義

【講演録】湾岸戦争のその後、パレスチナ

問題を考える／真の中東和平とは？

……………信原孝子

講演基調／講演録・質疑討論

【投稿】◆「現代思想の快楽」そのⅢ 『夕

屍体解剖』特別編(世紀末の光と影)

……………松原恵二

◆豆腐江自由港化論について——一九
二〇年代と今日……………西 重信

【連載】◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅶ

……………芝田啓治

◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノⅠ Ⅱ

Ⅲ 大阪市立朝鮮人学校の発足……………梁
永厚

◆ロマン主義文学論序説(13) 小説のな
かの異境……………池田浩士

◆研究余滴 象徴主義 6 第2章 象徴
主義の先駆者たちⅢ アルチュール・
ランボー (1844-91)……………山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その42……………
芝田 稔

【短評】「ちくま日本文学全集 福永武彦」
(筑摩書房)／「世界で遊ぶこどもたち」
……………芹沢俊介(青弓社)／「国際化のゆ

らぎの中で」粉川哲夫(岩波書店)

羅針盤／投稿募集のお知らせ／編集後記

第九十八号

(一九九二・一・十四)

【投稿】◆モーツァルト没後二〇〇年に「モ

オツアルト」……平野達也

◆『現代思想の快楽』そのⅢ 『ダダ屍体解剖』その3(現代日本詩は如何に)

……松原恵一

【連載】◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅸ
……芝田啓治

◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート
XIV 学校の再建と公立化運動……梁永厚

◆研究余滴 象徴主義7 第2章 象徴主義の先駆者たちⅣ ステファヌ・マラルメ (1869-1900)……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その43 周作人と周辺の人びと——一九四九年以降における——芝田 稔

【短評】『国境を越える労働者』桑原靖夫(岩波書店)／『有害』コミック問題を考える『創』編集部(創出版社)／『娘に語る祖国』つかこうへい著(光文社)

羅針盤／スタッフ募集のお知らせ／投稿募集のお知らせ／編集後記

第九十九号

(一九九二・四・三)

【読書案内】『書評』編集委員会より

ありのままのあり……田中俊也(文)／

「いやなら読むな。されど……」野村幸正(文)／自己主張と独断……元木久経(経)／考えるな、見よ……若森章孝(経)／辞書を常に座右に……永沼博道(商)／商学部4年間で読んだらよいと思う本……羽原敬二(商)／「おたく論」のすすめ……岩見和彦(社)／遊びのススメ……山本準(社)／旅の中の旅……吉田栄二(法)／マンガ、またはマルクス・フロイト……若田恭一(法)／「どこでもドア」を開く楽しみ……馬場昌子(工)

【投稿】◆『現代思想の快楽』そのⅣ 最終回『読書の快楽のすすめ』(短評編でわかりやすく)……松原恵一

◆鏡花の「夜行巡査」「外科室」あたり……平野達也

【連載】◆おいてけぼり——宮本輝試論Ⅹ
……芝田啓治

◆在日韓国・朝鮮人の教育問題ノート
XV 日本人教師と在日朝鮮人子女の教育……梁 永厚

◆研究余滴 象徴主義8 第3章 象徴主義運動 I その運動の周囲……山村嘉己

◆日本中国ことばの来往 その44 『漢字統一』へのアドバルーン……芝田 稔

【短評】『デモと自由と好奇心と』福富節男(第三書館)

羅針盤／お知らせ／短評募集／『書評』編集委員会募集／98号のおわびと訂正／組織部主催 催新人生歓迎行事紹介

『書評』賞大募集

『書評』賞 (1名) 賞状及び副賞(図書券5万円分)

優 秀 賞 (1名) 賞状及び副賞(図書券3万円分)

佳 作 (若干名) 賞状及び副賞(図書券1万円分)

■応募要項

〈内 容〉

書評もしくは論文(ジャンルは問わず。但し未発表作品に限る。)

〈文 量〉

四〇〇字詰原稿用紙7〜15枚程度

ワープロ原稿の場合は一行25字×110行〜240行程度

〈しめきり〉

11月30日

〈募集対象〉

本学学生及び卒業生

〈選考委員〉

本学教員 『書評』編集委員会

〈結果発表〉

『書評』10号誌上にて掲載

〈応募上の注意〉

B5判の紙に①住所②氏名③年齢④学籍番号または卒業年度⑤電話番号を明記してください。

封筒に、『書評』賞応募原稿在中と朱書きしてください。

郵送、持ち込みいづれでも構いません。

〈応募先〉

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生活協同組合本部3F組織部内 『書評』賞係

〈問い合わせ〉

06(387)9998 生協組織部 書評編集委員会

投稿募集のお知らせ

◎投稿募集

読者からの投稿をお待ちしています。

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文も結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとって置いて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生生活協同組合本部3F組織部内「書評」編集委員会

☎387-9998 (直通)

☎388-1121 (内線4821)

◎投稿規定は以下の通りです。

▼原稿は原則として縦書きで、「書評」誌用の字数、一行二五字、二二行(二五〇字)を一枚と計算します。

▼枚数は自由。(ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。)

▼締め切り各月末日。

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入

編 集 後 記

◆ある日の図書館にて。吹き抜けの空間の片隅にドサツと平積みされたA5版の冊子——それが『書評』との出会いでした。ここで多くのことを学びつつ、偶然とは云うものの一〇〇号という節目に携わることができたのは喜びです。これまでの『書評』を支えて下さった方々に心から感謝すると同時に、新しく加わった編集委員とともに、いま私達にしかできない中身を追求していく決意です。

◆一〇〇号記念ということで、本学の先生ならびに執筆者の方々より『書評』への思いを綴っていただきました。巻末に掲載したバックナンバー一覧と合わせて読んでみると、あらためて四分の一世紀という歴史の厚みを感じます。

◆今号では、今年五月一三日に行なった講演会、「情報化社会と私達」を再現しました。情報化社会と完全に隔絶した生活は到底考えられないほど、私達はコンピューターをはじめ幾多の情報産業から恩恵を受けているのが現実です。しかし、情報洪水によって感覚が麻痺させられていくなかで、コンピューターという第三の人格を認め、めでいくことに多大な危険性が孕んでいるように思いま

す。講演会では、「便利」の裏側では確実に新たな3K労働が形成されているという視点を与えてくれました。講演会終了後、講師の池野高理さんを囲んだ交流会が持たれ、とても盛り上がったことも印象に残っています。ここに収録できなかったのが非常に残念でなりません。

(H)

『書評』編集委員会では、一〇〇号を記念して『書評』賞と冠し、皆さんから書評および論文を募集します。四〇〇字詰め原稿用紙七十五枚程度でジャンルは一切問いません(但し、未発表作品に限る)。締切は一月三〇日。あなたの心に残った一冊の書評、批判等の作業を通じて自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表、論文を待ちしております。尚、今回の対象は本学学生および卒業生とさせていただきます。詳しくは本紙一三四ページをご覧ください。

季刊『書評』 1992年10月 通巻100号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部『書評』編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 〈内線4821〉 or 387-9998)
頒 価 250円